Z32-B88

金の星

第五卷 六月號 第六號

大正十二年五月六日印刷納本 大正十二年六月一日發行

国立国会
8. 3. 26
図書館

Kodak Color Control Patches
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Kodak Gray Scale
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
© Kodak, 2007 TM: Kodak

◆三越のお子様用品

◆洋服……四階……今年流行の紳士品及び婦人の軟門家の苦心になる洋服を澤山に陳列、男女兒用共七圓位より

◆文房具……四階……硯、墨、筆、鉛筆、紙、紙挟、鉛筆三越クレイオン繪具等の學童用必需品は漏らず御座います

◆靴……三階……雨の降るときのゴム長靴、男女兒用二圓七十錢より五圓六十錢まで、種々取揃へてあります

◆レーンコート……四階……男兒用ゴム引防水が六圓五十錢より、クレバネットが十三圓より女兒用が十四圓二十錢位各種

◆履物傘……四階……上履が九十錢より、洋傘が毛繻子張で二圓五十錢よりその外下駄等各種取揃へて御座います

東京 三越呉服店

少女學生雜誌中の女王樣!!

女學生

六月號

▽繪畫物語 蒼白い嬢さん 濱路
▽童話 蜉蝣と蠟燭 平亮
▽女學哀話 悲しき友 S子
▽女學生活 クロヴの丘 繪舟
▽女學漫畫 癖のアルバム 愚美

◇見て來た歐米の女學生（印象記） 伊藤長七
◇マーテルリンクの詩（物語詩） 西條八十
◇テニスを始める諸嬢に（運動講話） 吉塲生
◇「丘を越えて」と嵐の孤兒（活動新聲物語） 堤幹藏
◇東京出身の寶塚少女（歌劇物語） 國木昌子

◇關西紀行 料治朝鳴
◇山峽夜話 酒井朝彦

■樂園の花（長篇小說） 八木春泥
■幼き友だち（名詩物語） 橋爪末央
■日曜日（少女小說） 河井鞠子
■菖蒲の前（歷史小說） 畑苹花

■季節の愛（詩） 川路柳虹
■暮春調（詩） 西條八十
■立ばなし（童話） 佐藤八郎
■雨の花（短歌） 泉甲二

長篇小說 地は花咲けり 白石實三
武藏野を背景にして、美しい二少女が一秀才に捧げる清く可憐な愛の物語、作者のペンはいよいよ冴えて來ました。

連載物語 曲馬團の娘 野尻抱影
紅團と青畑の渦卷く曲馬團の中に生ひ育つ美しい二少女、數奇な運命のたはむれ、筆者の流麗な筆觸は讀者を惱殺する。

東京麴町九段 研究社
振替口座東京一〇六八二番
定價金參拾五錢（郵稅壹錢半）

知恥ら ねば ち の 此 二大名著 評加 日は 日る

▽西條八十先生新著 新版 新しい詩の味ひ方

●詩を作る第一歩は先づ詩を適當に解することから始まる。●るも既に詩人と云ふべきで有る。詩を知る事は文學の本質を極むることである。

◇四六判特上製總絹布箱入美本 ◇定價一圓六十錢◇送料十三錢

▼▼詩人として名聲高き著者が內外詩人の作品に就いて最も精細に且つ親切に思ふがまゝの評釋を試み傍ら詩作の秘術を說き明かされたるものなり

多の要求容れて此處に本書は生れたり本書を得て詩を初め諸解されんの讀者の

▼▼良書の選定に苦しみつゝ有りし若き女性の必ず讀まるべき愛の聖書とも云ふべき本書が如何に優れたる內容を有するか速に一讀せられよ

▽吉屋信子先生新著 新版 散文詩集 憧れ知る頃

●內容を四大別して憧憬篇、追慕篇、讃美篇、哀傷篇とし各篇中に收めたる數多の感想文、美文、散文創作、詩篇等は何人も及ばざる獨得の名文章である

◇新形版總羽二重極上箱入美本 ◇定價金一圓四十錢送料十二錢

長く期待されたる著者の文集は熱烈の歡迎を得て多ちの註文を增ふ々加

東京仲市京樂猿田神町區七十 交蘭社 振替口座東京四〇二七九番

目次

夢の國（表紙・原色版）……岡本歸一
悲しい約束（口繪・三色版）……
阿彌陀池（名所廻り童話）……四　野口雨情
同作曲（作曲）……二　本居長世
西班牙の山賊（長篇童話）……六　西條八十
阿新丸（史譚）……一五　霜田史光
首無し倭人（童話）……二二　馬場孤蝶
勇しい王子（童話）……二〇　三宅房子
顎の治療（童話）……四〇　沖野岩三郎
物草太郎（名作童話）……四六　森川一朗
蛙の親子（童話）……五二　若山牧水
とうかんや藤兵衛（入選童話）……五四　和田莊三郎
河童の復讐（童話）……五八　水島爾保布
水滸傳（長篇童話）……六四　宮島資夫
狐の裁判（長篇童話）……七二　小島政二郎
をどりの靴（童話）……八二　野口雨情
べんくゝ草（童話）……八四　野口雨情選
鐵砲（幼年詩）……八八　若山牧水選
弟の顔（自由畫）……八七　山本鼎選
子豚（綴方）……八八　編輯部選
土佐から（講演部報告）……九四　沖野岩三郎
通信……九七
讀者だより……一〇二

（附錄）

長篇物語　**鈍栗山**（第五回）……沖野岩三郎
＝紅い林檎＝

挿畫……岡本歸一　水島爾保布

悲しい約束（日治解説）

岡本歸一畫

『お前は誰だ！』とそこにゐた小人に王子は訊きました。

『誰だか直きにわかる、家へ歸つたらお前の父さんに、私が約束を果してくれといつてゐたといつてくれ。もし、それを怠ると、大變なことになると、その事も序に言つてくれ。』

（「勇しい王子」の三二頁をご覧下さい）

米本書店の童謡書目

童謡教育の實際

雨情先生序　黑田正著

定送價一圓二十錢　料六錢

說く處必ず實際と理論との、そつのない綜ひ合せであつて、省察に富んだ經驗的な陳述は、今日適所に逐つて居る多くの童謡教育當務者にとつて頗る必要な參考書であると共に、童謡研究家並に童謡教育の何たるかを知らんと欲する一般父兄の必ず一讀を要する好參考書である事を疑ひません敢て小學校教師と父兄に勸む。

課外の可愛らしき物讀み童謡のお話と劇

正午社編

定送價一圓二十錢　料六錢

價七十錢　送料六錢

雨情先生はこの書に序して子供の爲めになるよい本です、と。

本居、中山兩先生作曲八面
初山、冬木兩氏挿畫十一葉

野口雨情、西條八十、北原白秋、三木露風、山村暮鳥、西川勉、藍蘇秀夫の諸先生の御寄稿を得て最の日本童謡會と「ぽ」社の同人等が、若き同志を糾合して作つた敢て世に問ふ童謡集です。「童謡に面する心」「童謡私觀」の二論文と童謡に關する二百餘種の圖書總覽を入れてあります。

影繪のお國

雨情先生序　松波霞洋著

定送價一圓二十錢　料六錢

玉蟲と人形

童謡と曲畫集

定送價一圓　料六錢

雨情先生序　童謡研究部編

可愛らしい子供さん達のほんたうの心から出た童謡の傑作集であります皆さんはきつと「ゆきぼうし」よりも御上手でせう、繪が澤山ございます。

ゆきぼうし

蕗谷虹兒先生の表紙繪

きれいな童謡の本で中には童謡の曲と色々な童謡畫が澤山あります。

定送價十七錢　料六錢

若柳小學校童謡選集 蝙蝠の唄

若柳校兒童は全國中で童謡が傑出して居るさうです

定送價十九錢　料六錢

童謡銀のつぼ

藤田新作　紫水著

定送價十九錢　料六錢

發行所　東京振替　東京市神田錦町二丁目三番地　米本書店

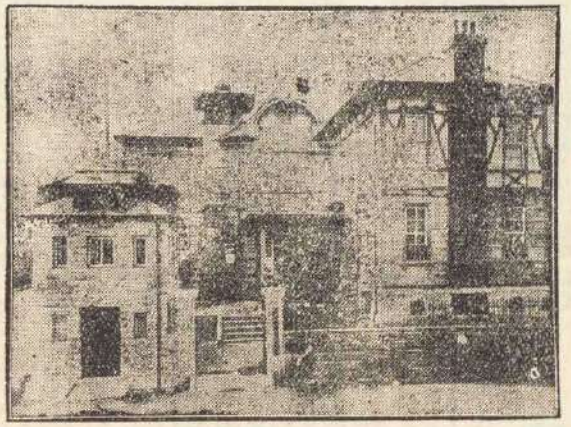
天下の青年は何故に爭ふて

大日本國民中學會に入會する乎

■講義が新いから
■會費が廉いから
■指導が良いから
■學制が正いから
■基礎が固いから
■講師が善いから
■卒業が早いから
■成功が慥だから

會長 尾崎行雄

學監 文學博士 遠藤隆吉
理學博士 山内繁雄
顧問 新渡戸博士 三宅博士
井上博士 浮田博士
岡田前文部大臣



一人前の男となるには

どうしても中等教育を受けなければいけない。中等教育の學力のない者はどうしても生存競爭の勝利者たることは六ケしい。併し家庭の事情で中學に入れぬ者も決して失望するには及ばない、中學校に行かずに中學卒業同樣の學問をする方法がチャンと出來てゐる。それは創立以來二十年の古い經驗のある講義錄で有名な大日本國民中學會の通信教授法である。

東京駿河臺（お茶の水電車通り）
振替東京四二〇〇 電話 神田三〇〇二 神田三〇〇三 神田三〇〇四

大日本國民中學會

◎創立以來二十一年記念大特典提供
目下新學期開講 入會の絶好機

■講義錄見本つき規則書無料進呈

兒童の綴方

定價 一冊 二十五錢（郵稅一錢）六冊前金壹圓四拾七錢十二冊前金貳圓八十八錢（郵稅共）

唯一の兒童藝術擁護雜誌

少年少女藝術の王國

六月號

諸君！諸君は、自分の書いた小說や、童話、童謠、和歌、俳句、自由畫などを自由自在に雜誌へのせたくありませんか。

えらい先生達が、いろいろな雜誌へ、きれいなさし繪でお出しになるやうに、自分の書いたのが雜誌へ出たらどんなに愉快でせう。しかし、どの雜誌でも、諸君の投書の出る領分はごくわづかの頁です。これは諸君の爲に大變お氣の毒な事です。

ところが「兒童の綴方」は、あべこべです。「兒童の綴方」は皆さんのやうな投書家ばかりの樂しい世界です。どの頁もみな、諸君のつくられたものばかりです。尋常一二年の小さい人でも、文章や童謠、自由畫などをドシドシ出してゐらつしやいます。それにはいちいち久米先生が繪をかいて下さいます。

選評

東京高師教官 飯田恒作先生 千葉春雄先生 田中豐太郎先生

ごほうびにはうつくしいメタルをお送りします。

兒童の綴方はどこの學校でもクラス中でとつて下さいます。そして月々全國の學校から競爭で山のやうな投書がきます。それで五月號からは今までよりも、もつと、もつと紙面をひろげまして、前よりもたくさんの投書を出すことにしました。そして、諸君がたがひに、作品の評をしあふのです。

こころみに本號を見て下さい、誰がどんな小說や童話、童謠、自由畫などを出してゐますか、なかにはキツト皆さんのお友達もゐらつしやるでせう。

さあ、さあ、諸君も負けずに「兒童の綴方」を自由自在にお使ひ下さい、えらい先生達がお書きになつたやうにして出せますから。

發行所 東京銀座二丁目 京橋區 市ノ一五 電話 京橋 三六一五 三七三三 三七三四 東京 六七三三 培風館

金の星

六月號

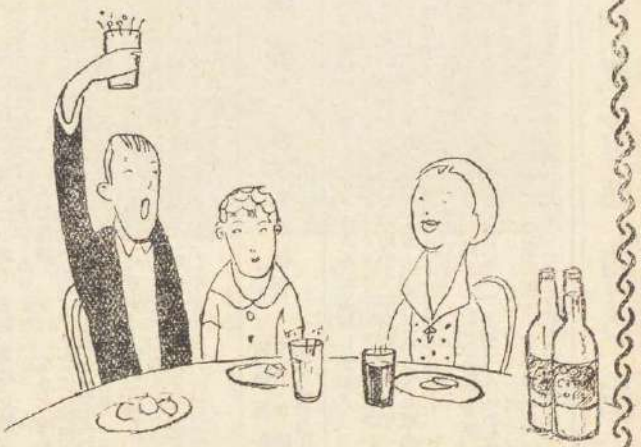
清涼飲料

ゆぶん印

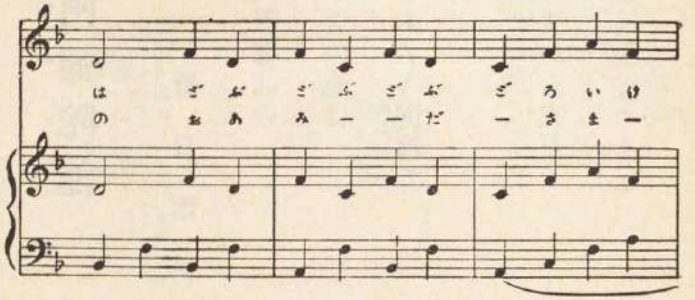
シトロン

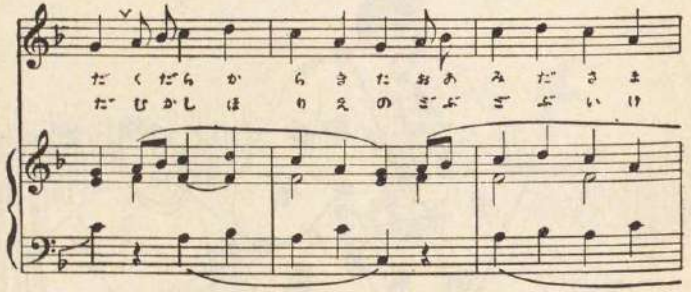
ラズベリー

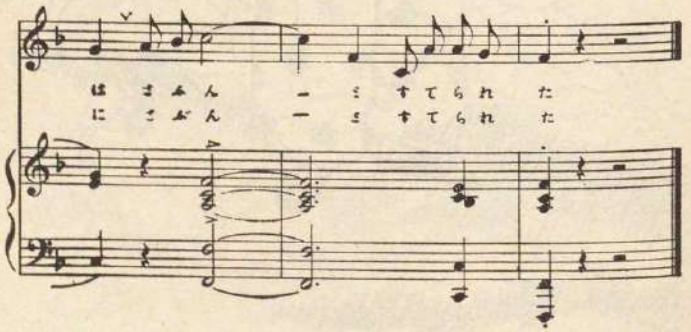
タンサン



大日本麥酒株式會社

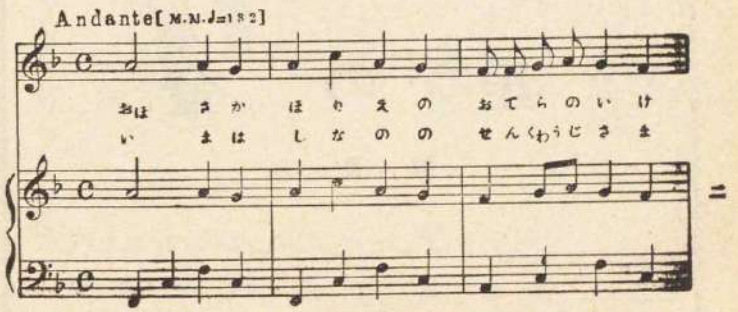

は ざぶ ざぶ ざぶ ざろいけ
の ぉあ み ー ー だ ー さ ま ー


だくだらか らきたおあみださま
だひかしほ りえのざぶざぶいけ


はさふん ー ミ すてられた
にさぶん ー ミ すてられた

阿彌陀池

本居長世作曲


Andante[M.M.♩=132]
おほ さか ほり えの おてらのいけ
い まは しなの の せんくわうじさま

阿彌陀池

（名所めぐり童謡の六）

野口雨情

大阪堀江の
お寺の池は
どぶ〳〵泥池だ

百濟から來た
お阿彌陀さまは
どぶんと捨てられた

今は　信濃の
善光寺さまの
お阿彌陀さまだ

むかし　堀江の
どぶ〳〵池に
どぶんと捨てられた

（大阪堀江和光寺の境内に阿彌陀池あり。その昔、信濃善光寺本尊阿彌陀如來の捨てられし池なりといふ傳ふ）

西班牙の山賊

西條八十

九、若い英國士官

僕が二度二度大聲で助けを呼んだにも拘らず、ウンともスーとも何處からも返事が無かつた。それは靜かな月夜の山中に空しい谺をひき起したに過ぎなかつた。

『靜かにしろい！往生際のわるい野郎だ。』

山賊の手下はかうセセラ笑つて、やけにぐいぐい僕を例の樅の樹の根方へ引ぱつて行つた。僕は、さては今聞いた物音は空耳だつたかと思つた、われながら女々しい眞似をしたものだと後悔した。

愈々生命をとられる土壇場になつた。僕は繩附のまま樹の根方の地面にぴたりと引据ゑられた。坐りながらそつと頭の上をふり仰ぐと、暗い枝の股に一抱へもある大石が提灯のやうになま白くぶらぶら吊下つてゐるのが、葉を洩れる月の光でほんやり見える。あれがドカンと落ちて來るんだな、さうしておれは忽ち煎餅のやうになつてしまふんだな。』さう考へると、僕はあまりの無氣味さに思はず頸もとをすくめた。

四十人の山賊どもは、いつの間にかぐるりと、樅のまはりを遠巻きにとりまいてしまつた。

『チエラール中尉！』

僕の背後でかう呼ぶ聲がした。紛れもない、首領エル・クチロだ。

『では愈々あなたの頭の固さの試驗にとりかかります。いいですか。ちよつと背後をご覽下さい。』

云はれて僕は首をうしろへ捻ぢむけた。エル・クチロは上衣を拔ぎ去つて、右手に明々晃々たる大長刀をふりかざしてゐる。かれが一聲その手を閃かせば、大石の繩は卽座に兩斷されるのだ。この間にもかれはそのキザな顎髯の生えた唇もとに、冷かな笑を浮べて、

『今一、二、三でこの刀を下すことにします。いいですか。ではお覺悟なさい。』

と、僕に最後の宣告をして、それから、ゆつくり、

『一――。二――。』

とやりだした。

萬事休矣！　ここに到つて僕はただチツと觀念の眼を閉ぢた。

『三！』

この叫びを僕はたしかに耳もとで聞いたと想つた。と同時に大石は矢のやうに頭の上に落下して僕の身體は煎餅ソックリになつた筈であつた。

ところが後になつて知つた事だが、エル・クチロのこの最後の掛聲は發せられずに終つたのであつた。といふのはその刹那に、前面の林の中から一隊の軍馬の姿がバラ〳〵と立ち現はれたからだ。

まづ先登にたゞ一騎躍り出て來たのは、美しい栗毛の駒に跨がつた、凛々しい顏つきの青年士官であつた。かれは實に元氣にあふれた、快活な樣子をしてゐた。その無頓著さうで、しかも氣どつた身のこなしは、どこか自分にソックリのやうな氣がした。かれが着てゐる軍服は、昔は何處も彼も眞紅であつたらしいが、今では雨にうたれた部分だけ枯葉いろになつてゐる。だが兩肩にチヤンと金モールの肩章を附け、

頭には白い羽毛のついた、ピカ〳〵する兜をかぶつてゐた。
かれのすぐ後にはおなじ服裝の騎兵が四人從づてゐた。どれも髭をきれいに剃つた、まるい福々しい顏をしてゐた。僕は軍人と云ふよりもなんだか坊さんたちを見てゐるやうな氣がした。
やがて先登の士官が短かく號令すると、一同は劍の音をガチャガチャさせて一時に馬を駐めた。士官はまづ自分一人だけ、山賊や僕のゐる方へと進んできた。
もちろん、僕はこの時までに、見馴れない服裝から判斷して、かれらが英國人であることを知つた。僕が當の敵　ある英國の軍人の姿を見たのは事實今が初めなのだ。が、かれらの屈竟な體格、男々しい擧動からして、かねぐ〳〵噂に聞いた通り、かれらが敵として戰ふに恥かしからぬ連中であることを僕はその時感じたのであつた。
「何だ？　何だ？」
英國士官は山賊どもの方を向いて、まづかう空下手な佛蘭西語で叫んだ。それから、
「君等はいつたいここに何をやつてゐるんだ？　それに、今助けてくれとどなつたのは誰だ？」
と、訊ねた。
降つて湧いた想はぬ幸運に、僕はこの間にと急いで逃支度をした。足くびの繩はすでに解かれてゐ。手くびのところは以前にも云つたやうにいつでもスッポリ繩を外しさへすればいいのだ。そこで僕は造作なく自由な身體になつて、ポーイと一足飛びに飛んで、焚火のそばに轉がつてゐた自分のサーベルを掴んだ。と、同時に身を翻へしてかの哀れなヴィダル少尉の乘馬の鞍へと武者ぶりついた。足の怪我にも拘らず僕は不思議にも鐙の助けも藉りずに無事馬上の人となつた。そこで慌てて鼻綱を樹から解くが早いか、山賊共がピストルの狙ひを定めぬ間に、かの若い英國士官の傍へと駈け寄つた。

十、エル・クチロの最期

「降參します！」
と、僕はまづその英國士官に向つてどなつた。精一杯うまく英語を使つたつもりだが、ことによると相手の士官の佛蘭西語よりも更に空下手だつたかも知れぬ。――それから、續

けて、
「君の左手に在るあの樹をご覽下さい。さうすればこの惡黨共が、毒手に陷づた旅客たちをどんな風に扱ふかがわかります。」
と云つた。
この瞬間、焚火が風でぱッと煽られたので、見るも恐ろしいヴィダル少尉の黑焦の死體が、英國人等の眼にありく〳〵と映つた。
「フーム」
士官は驚きのあまりかう唸りだした。
ほかの連中はあまりの酷たらしさに、眼を外らして神の御名を唱へた。
やがて四人はスラリと軍刀を引きぬいて、山賊共に對抗する身構へをした。中でも軍曹の腕章を付けた一人は、笑ひながらポンと僕の肩を叩いて、
「どうです、敵打ちをしては。」
と、云つた。
云ふにや及ぶ。馬は兩脚の間に在り、劍は掌中に在る。僕はその劍を風車のやうに頭上にふり廻して、即座にも山賊共の中に躍り入らうと武者ぶるひした。
するとこの時何思つたか山賊の首領のエル・クチロは、例の厭らしいニタ〳〵笑ひをしながら此方へ一歩み寄つて來た。
「閣下、ご覽の通りこの佛蘭西人はわれ〳〵の捕虜です。お互に味方同士相談の上、ひとつ處刑をしては如何なものでせう？」
かれはかう英國士官に向つて云つた。
「默れ！」
と、士官は大喝一聲して、
「わが神聖なる英國軍は貴樣等のやうな殘忍卑劣な味方は持たんぞ！　僕がもしウエリントン將軍だつたら、今即座に貴樣の身體を火炙りの極刑にしてやるところだ！」
青年士官は眞紅に怒つて、更に、
「默れ！　默れ！」
を連呼した。
エル・クチロは罵られても一向平氣で、
「ではこの捕虜の仕末はどうしますな。」

と、圖太い聲で訊いた。

「僕等と一緒に英國軍の陣營まで伴れて行くのだ。」

『では閣下、その以前に一寸お耳を拜借。』

エル・クチロはかう云つて、何か囁きでもするやうな風で、若い士官に近付いた。と、電光のやうに身を轉らして、僕をめがけてズドンと一發ピストルを放した。

彈丸は僕の頭髮の間を通つて、軍帽の前後に穴を穿けた。射損じたり、と見ると、エル・クチロは獅子のやうに狂ひ立つて、今度はピストルを僕めがけて投げつけようとした。

と、見る間、若い英國士官が後ざまに拂つた長刀一閃、哀れやエル・クチロは首と胴とは離れ離れになつてしまつた。

エル・クチロの傷口の血がまだ大地を染めないうち、その最期の呻きが、唇から消えるか消えないうちに、四十餘の山賊共は「ウォーッ」と猛獸のごとく咆吼して、僕等に打つて掛つて來た。けれども僕等は馬でその間を躍りぬけ、また同時に右手の劍で縱横無盡に切りまくりながら、林の中の廣場をのがれ、紆曲つた山徑を谿間の方へと首尾よく逃げ畢

してゐただらうと考へると、さすがに虎の口をのがれて毒蛇の顎に入つたやうな氣がしないでも無かつた。

四人の英國軍人の被害を檢べた結果では、ジョーンといふ兵卒の馬の片脚が、ピストルの彈丸で害られてゐるほか、別に誰も重い傷を負つてゐないことがわかつた。

『ではジョーンは僕等と一緒に行くことにせい。ハリデー軍曹は、ハアベイとスミスとを伴れて、これから右へ右へと途をとり、獨逸騎兵の哨兵の居るところへ出るがよい。』

若い士官はかう命令を下した。

三人の英國騎兵のカッ〳〵といふ馬蹄の音は、手の林中に消えてしまつた。僕と若い士官とは轡をならべて、——負傷した馬に跨つたもう一人の騎兵はすこし遲れて後から、——林のかげの路を英國軍の陣地をさして進んで行つた。

諸君！　一難去つてまた一難、最前までどうかして山賊共の毒手を遁れる工夫を凝らしてゐた僕は、今度は新にこの英

せたのであつた。

やれ〳〵安心といふ場所まで來て、僕等はやつと馬を駐め各自の手傷を檢べた。僕はかなり諸所に負傷した上、ひどく疲れ切つてゐたが、九死一生の場合を幸運にのがれた事を想ふと、喜びに胸はまだ躍つてゐた。だが、これが若し英國軍の捕虜とならずに助かつたのだつたら、喜びは更にこれに倍

國の士官を胡麻化して逃げ出す手段を講じなければならんことになつたのだ！

十一、眞劍勝負

憂々、轡を並べて行くうちに、いつか馬上の敵味方はすつかり仲好しになつてしまつた。いや僕は最初この頼母しさうな若い英國士官の顏をチラと見た時から好だつたのだ。相手もおそらく同じやうな氣持であつたらしい。

美しい西班牙の月の夜道を進みながら二人の互ひの打明け話によると、この英國士官は貴族の出で、名はミラー・ラッセルといふのだつた。かれらはウエリントン將軍の命令で、佛蘭西軍が已に山を越したかどうかを偵察に寄來されたのだ僕等は年齢も同じけりや、身分も同じ輕騎兵の將校で、おまけにおなじやうな大望と野心とを抱いてゐた。

ふたりは行々何でも彼でもうち明け合つた。僕が故郷の母親の話をすると、かれは自分の妹のことを話した。僕が母親の寫眞を出して見せると、かれは妹の長い手紙を衣匣から引き出して見せた。やがて自分等の聯隊の强い弱いの話になると、ふたりは危く喧嘩しさうになつた。といふのはかれがあまりに自分の聯隊の强いのを自慢するので『それはまだ僕の隊にぶつかつて見たことが無いからさ』とわざとひやかすと、かれはさも口惜しさうに唇をゆがめ、劍の覇をやけくそに叩いて、まじめに僕に挑戰して來たからだつた。

そんな風に親しく話を交しながら進んで行くうち、いつか夜は白々と明けそめた。

英國士官は見覺えがあるらしくあたりを眺めて、

『もう半里ほどでわが軍の前哨のところへ達する。』

と云つた。

僕もこれにつれて四邊を見廻すと、話が面白いので二人ともウカ〳〵駒の歩みを早めたと見え、跛馬に跨つた兵士の姿はずつと遲れて何處にも見えなかつた。見わたすがぎり廣々とした山間の平野の途に、在る人影とてはただ二個、――英國士官と僕とだけであつた。その時僕は心の中でつくづくと考へた。『自分には果してこのまま溫順しく英國軍の陣營まで率かれて行くべき義務があるかどうか』と云ふことを。――

いろ〳〵愚案したあげく、僕はどうにかうまくこの英國士官を說付けて、自分の身體を逃してもらはうと決心した。實、今のうちなら誰にも知れずに逃げてしまへるのである。さうして逃げたところで決してこの士官の大した落度になる筈は無い。そこで僕は馬を駐め、思ひ切つてかれにその相談をもちかけた。

『君、それはいかん！　軍規に反する！』

と、かれは儼然たる面地でそれを拒絕した。

『ちやあ一體どうすれば君は僕を逃がしてくれるんだ？』

僕は一度や二度、拒絕にはひるまず、馬を駐めたまま、頼んで見たり、怒つて見たり、百方手を盡して自分の希望をかれに容れさせようとした。

かれも僕の根氣のいいのにほと〳〵感心したと見えまた一方僕の境遇にも十分同情を感じたらしく、しばらく當惑の體で考へ込んでゐたが、やがて口を開いてかう云つた。

『ちやあかうしよう。つまり君と僕とここで眞劍勝負をするのだ。いいか。それで若し君が僕をその劍で斬るなら仕ずなりして負かしたら、それから君は何處へ逃げようとも自由だ。だがその反對に君が負けたら今まで通りだ。それでいいか？』

「有りがたい。それで結構だ。」

僕はニッコリ笑つて答へた。さうしていち早く馬上で軍刀をスラリ拔き放つた。併し僕は心の中でどうかしてこの自分の命の恩人を傷つけることなしで、うまく勝負に勝てるやうにと祈願した。

「サア先刻云つた英國輕騎兵の腕前を見るがいい。」

と云ひざま、若い士官は、軍刀を僕の眞向からふり下してきた。

「何を！」

僕は手際よくそれを中途でうけとめた。

上段下段、盛々實々、丁々發止。

ふたりは約十分ほど馬を右左に乘り開いて相鬪かつたが、そのうち隙を見て僕が右へと拂つた一刀は、かれの兜についた烏の毛をスカーリ美事に斬り落した。

僕は傷つけずに彼を負かした證據はこれで十分だと思つた。

そこで、

「では、ラツセル君！　約束通りこれで僕の身體は自由ですぞ！　さよなら！　御親愛ありがたう！」

と挨拶する間も無く、急いで馬首をめぐらして傍の坂路を駈け上つた。

さしもの英國士官も約束の手前今となつて厭とも云はれずさも口惜しけに齒がみをして、馬上でぢつと僕の後姿を見送つてゐた。

「自由來れり！　自由來れり！」

僕は大聲をあげて叫びたいほど狂喜を感じた。そこで意氣昂然として坂路をのぼり切つて思はず前方に眼をやると、これはしたり！そこに行手に當つて横はるは霧霞の如き大軍、——その服裝からして云はずと知れた英國軍である。さうしてその先登に白馬ゆたかに跨づたは、これぞ英國軍の總司揮官ウエリントン將軍！（この項終り）

ジエラール中尉の冒險物語

「西班牙の山賊」の續篇は

「牢破り」と題を改めて次號から。

（作者）

阿新丸

霜田史光

一

阿新丸は中納言日野資朝卿の唯一人の子でした。お父さんの資朝卿は何かの罪があつて、佐渡といふ遠い島國へ流されたと云ふことは知つて居りますけれども、お父さんにお別れしたのは六つの時でしたから、その理由も知りませんでした。

然し、あんなよいお父さんが悪いことをする筈はないと思つてゐましたので、これまで幾度となくお母さんにもその理由を訊ね、家來や坊さん達にも訊ねて見ましたけれども、誰も話しては來れませんでした。

それと云ふのは阿新丸のお母さんは、却つて阿新丸の智慧深くまた強い心根を知つてゐるばかりに、相當な年になるまでは、お父さんの流された本當の理由は話すまいと思つたからであります。それまではみつしり學問や武藝を仕込んで立派なものにし、いまに北條高時を亡ぼさせようと思つたのであります。それで、お母さんは仁和寺の近くの友則といふ家來の家に匿れ棲んで居りましたが、お父さんが流されて間もなく、阿新丸を聖護院に預けて、學問や武藝の仕込みを頼んだのであります。

阿新丸は聖護院へ來てからもう五年になります。十一といふ年になつた阿新丸はその位の子供とは思はれぬ程丈も高く學問も武藝も人並優れてよく出來るのでした。

或日お稽古も濟んだのでお庭を散歩してゐますと、とある垣根の日射りのよい所に親子の猫がさも睦じさうに遊んでゐました。子猫は親猫の體に戯れながら如何にも嬉しさうにククと泣聲を立てゝゐます。親猫は、それをさも可愛いといふ眼付で眺めて、子猫の戯れるに任せてゐるのでした。阿新丸はそれを羨しさうに見てゐました。そして遠い佐渡ヶ島へ流されたと云ふお父さんのことを考へて、何んとなく胸の底から涙が滲み出て來るやうな氣がしました。

阿新丸がぼんやりと立つてゐると、その時ぼんと肩を叩いた者があります。驚いて振り返つて見ると、それは御師匠様の大膳坊でした。大膳坊は聖護院にゐる山伏で、阿新丸を大層可愛がつて學問を敎へてくれてゐるんでした。

『阿新殿、何をそのやうにぼんやりしてお出ちや。』と云つて

阿新丸の眼の中の涙をちらと認めた大膳坊は、

『お主は泣いてゐるのではないか、何か悲しいことでもあるのですか。』と親切に訊ねてくれました。

阿新丸は氣を取り直して羞しさうに、

『御師匠様お眼に止まりまして恐れ入ります。別に何も悲しいと云ふのではございませんが、この親子の猫の仲よささうにしてゐるのを見まして、何故か自然と涙が出て參りまして……』とあとは言葉も濁つてしまひました。阿新丸は嚴しい大膳坊のことですから、屹度お叱りを受けるだらうと思つてゐました所、大膳坊は靜かにやさしく云ひました。

『阿新殿のそのやうなお心になられるのは無理ならぬことです。あなたはいま屹度佐渡へ流されたお父さんのことを考へてゐたのでせう。』

『はい、』と云つて阿新丸は、御師匠様が何を云ひ出すかと頭を垂れて待つて居りました。

『阿新殿、今日はよい折ですから、あなたのお父さんの資朝卿のことをお話しいたしませう。』

阿新丸は大膳坊の膝にはつとして顏を上げました。

『あなたのお父さんを佐渡へ流したのは北條高時です。あなたのお父さんは高時の惡い行ひを見るに忍びず天子様に味方をして、高時を亡ぼさうとしたのです。それが高時に知られて、あなたのお父さんは捕へられて島流しにされたのです。』

阿新丸はそれを聞いて北條高時に對して恨みの心が火のやうに燃え出しました。今迄も種々な人の噂を繼ぎ合して考へて見て、このやうな理由ではないかと考へて居たのですが、いま師の大膳坊からはつきりと聞かされて、高時を恨む心とお父さんに逢ひたい心とが一緒に燃え出したのです。

『御師匠様、私のお父さんは赦されて歸るやうな事はないのでございませうか。』と阿新丸は訊ねて見ました。

『さア、お歸りになるともならぬとも申されません。高時は資朝卿を恐れて居りますから、高時が亡びないうちは恐らくあなたのお父さんを歸すやうなことはしますまい。』

これを聞いて阿新丸は、どうしても高時を亡ぼさなければならないと思つたのであります。

その晩、阿新丸は床につきましたけれども、憎い高時のこと、懐しいお父さんのこと、また仁和寺のほとりに隱れ棲居をしてゐる淚しいお母さんのことなぞを考へて、どうしても眠られませんでした。そしてたうとう佐渡へお父さんを訪ねて行かうと決心いたしました。一眼逢つてから後命を投げ出して、高時を亡ぼすことに盡さうと考へたのであります。

その翌日阿新丸は一日のお暇を戴いて、お母さんの佗住居を訪ねました。お母さんは阿新丸の大きく立派になつたのを見て大層喜び種々と歡待しました。阿新丸はい、話の折を見て、昨日師の大膳坊に聞いた事を話して、

『お母さん、私に暫らくの間お暇を下さいまし。私はこれから佐渡へ行つて、一眼でもお父さんに逢つて來たうございます。』と云ひました。

お母さんはそれを聞いて、あまりに突拍子な申出に驚いて眼を睜りました。そしてまたはら〳〵と涙を膝の上にそゝぎながら、

『阿新丸、お前のその心は私にもよくわかります。この母としても一眼お逢ひしたいは山々ですけれど、五里や十里ならまだしも、佐渡は二百里近くも離れてゐる遠い島國、どうして年若のお前に行かれませう。そんなことを云つてこの母を困

らすものではありません。どうぞ思ひ止まつて下さい。』と申しました。

阿新丸も一度は云ひ出したものゝ、この氣弱の母を後に殘して心配させることを考へて見れば、思ひ止まりたくもあつたのですけれども、心に固く決心したことはどうしても翻したくなかつたのです。然しお母さんは、

『お前はまだ年若ですから、もう少しの間我慢して下さい。そして北條高時を亡ぼしてから、お父さんをお迎ひに行けばよいではありませんか。』と云はれましたので、やつと納得してその日は歸りました。

二

寺へ歸つて來て考へて見ますと、この先五年も七年も、ひよつとすると十年先か二十年先かわからぬ高時を亡ぼすことの出來る時を待つてゐるのは、如何にもつらい事でした。矢張自分はお父さんに逢ひに行きたいと、また元の考へに翻つてしまひました。

阿新丸は師の大膳坊にその事を打ち開けました。大膳坊は阿新丸の心根を察して、

『それでは私が院主樣やお母さんにお願ひしてあげませう。そして首尾よく許されたら、あなたに附添つて佐渡へ參りませう。』と云ひました。

阿新丸はこの情ある大膳坊の言葉に嬉し涙を流しました。大膳坊は早速阿新丸のお母さんを訪ねてお願ひしましたけれども、お母さんは阿新丸の身を案じてを許しになりませんでした。然し大膳坊の附添つて行くと云ふことを聞いて、

『院主樣がお許しになりましたら私も否とは申しません。』

と云ひました。

大膳坊は喜んで聖護院に歸り、院主樣にその事を話して、『阿新丸の佐渡へ行くことをお願ひしましたけれども院主樣は、『まだ年若であるからもう二三年の間待つがよい。』と云つてどうしても許してくれませんでした。

阿新丸は仕方なく二年を過して十三になつた或日、鎌倉から來たと云ふ武士に、高時は佐渡の地頭本間山城入道に命令けて、資朝卿を亡き者にしようと企んでゐると云ふ噂を聞きましたので、阿新丸はもうとてもぢつとしては居られぬ程氣が焦り出しました。

『この上は院主樣やお母さんには隱してそつと出懸けてしまふより外はない』と思ひ定めましたので、或日病氣と云つて三四日の暇を貰ひ、お母さんの許に歸りました。そして阿新丸の幼い時から世話をしてくれた忠助といふ僕を呼んで、心の程を打開けたのでした。忠助は始の中はしきりに止めましたけれども、阿新丸の熱心に動かされて、たうとうお供をして佐渡へ行くことを承知いたしました。それでは今夜皆の寢靜つた頃を見計つてそつと家を抜け出ようと云ふことになりました。

その晩になると阿新丸は夜中にそつと起き出して、畫間の中に忠助が調へて置いてくれた草鞋、脚絆などをつけ、父から遺品に貰つた細身の刀を腰に差して、そつと抜け出ようといたしました。

京師を離れた所とて夜は森として物音一つしません。寒い冬の夜は凍りつくやうな靜けさです。自分の吐く呼吸さへお母さんに聞きとられはしまいかと、阿新丸は心顧へながら抜き足差し足、雨戸に近づきました。外にはもう一足先に忍び出た忠助が、阿新丸の出て來るのを待つてゐるのでありました。宵の中は燈火を消してしまつたので眞暗でしたが、忠助が一尺ばかり開けて置いた雨戸の隙間からは遠い夜空に蒼い星が光つてゐるのが見えます。

阿新丸は十分足元に注意しながらその星を頼りに雨戸の開いてゐる所に近よりました。

その時阿新丸の差してゐた刀が、室の隅に立掛けてあつた弓に輕く當りました。

『しまつた。』と思ふ間もなく、その弓は音を立てゝ倒れました。阿新丸はお母さんか友則かに覺られはしまいかと、暗い所に身を寄せて暫らくは息を殺して樣子を窺つてゐました。然し別に目覺めたらしい氣配もないので、はつと安心して雨戸の隙間からそつと外に忍び出ました。

『若殿ですか。』

『忠助か。』

と二人は聲を祕めて囁き合ひ、まづこれで首尾よく家を抜け出すことが出來たと安心して、二人は足音を忍ばせて歩き出しました。

阿新丸主從が十足も歩いたと思ふ頃、後から、鋭い聲が掛

りました。

『阿新丸、お待ち。』

阿新丸はびくつとして後を振り向くと、其處にはお母さんの姿が夜目にもはつきりと見られました。

『阿新丸、今頃お前は何處へ行かうと云ふのです。』

キリツとしたお母さんの聲に、阿新丸は縛られたやうに立ち竦んでしまひました。お母さんは忠助を認めて、

『忠助ではないか。お前までが何事です。』と云つて、阿新丸の肩に手を掛け、

『この母が話すことがあるからまア家へお這入りなさい。』と云つて阿新丸を家の中へ引き入れました。

友則も聲を聞きつけて目を覺まし、起き出して燈火をつけました。お母さんは阿新丸に向つて、

『お前は私が許さないので、祕かに佐渡に行かうと思つたのであらう。』と云ひました。

『はい。』と云つて阿新丸は頭を下げました。

『お前はそれ程まで父上に逢ひに行きたいか。』

『はい、行きたうございます。かう申しますと、お母さんはたゞお父さんが戀しいからとばかりお考へになるかも知れませぬけれども私はお父さんにお目に掛つて、この後のことを相談したいのでございます。お母さんも御存じの通り北條高時の惡い行ひの爲めに、尊い天子樣は、まことにお氣の毒なことになつてをります。それを見ると忍びず、高時を亡ぼして天子樣の勢を上げようとなさいましたのは、お父さんでございます。して見るとお父さんには、敵に討たれるにしても云ひ殘したいことが澤山あるに相違ございません。私はそれを承りに參りたいのでございます。そして又そのことを承るのは、私の外にこの世に誰があるでございませう。』

と阿新丸は熱心をこめて云ひました。

お母さんは阿新丸の熱心さと、その云ふ事の道理なことゝに始めて氣が折れたらしく、

『お前がそれ程までに決心したのならお許ししませう。明日院主さまにも私からお願ひして上げますから、立派にその役目を果して來ておくれ。』

と、キツパリ申しましたので、阿新丸は躍り上らんとばかりに喜びました。

その翌日、阿新丸のお母さんは聖護院へ行つて昨夜のことや、阿新丸の決心の固くて飜へすことの出來ないことを話して、この上は佐渡へ行くことをお許し下さるやうにと頼みましたので、院主樣もそれ程までに固く決心したのなら行くがよいと云つてお許しになりました。

そして大膳坊を招んで、

『あなたは大層阿新丸のために盡して下すつた。お蔭で立派なものになりましたが、今度佐渡へ父君に逢ひに行かれると云ふので、どうか附添つて行つて貰ひたい。』と申しました。

大膳坊は喜びの色を顏に現して、

『その事ならばいつぞや私からお願ひしたこと、必ず命に更へて、お守りして附添つて參りますから御安心下さい。』と此處にすつかり約束が出來て、いよ〳〵日を定めて出立することになりました。

出立の日は聖護の院主樣や澤山の坊さん始め、友則や忠助まで別れを惜んで見送つてくれました。

お母さんは勇ましい我子の門立を涙も出さずに送つて、

『阿新丸、お前はどんなことがあつても早まつてはなりませぬぞ。此處に母がお前の歸りを待つてゐることを忘れてはなりませぬぞ。』と心をこめて申しました。

『必ず短氣はいたしませぬ。』と阿新丸は母に誓つて、忠助を連れて出立いたしました。（つゞく）

首無し倭人

馬場孤蝶

一

或る時、或る村の教會の牧師さんが、小使ひの仕事の外に夜半に教會の塔へ昇つて行つて、時間の鐘を鳴らすことをやるやうな男を雇ふのに、一方ならない骨が折れました。

誰にしたところで、一日ぢうさんざん使はれて疲れ切つてからも、まだその上に夜半に高い塔の上へ昇つて行つて、鐘を鳴らさなければならんといふやうな仕事に使はれることを好まないのは當然です。が、それでも、始めのうちは、使つて呉れと云つて來る者が幾らもありました。牧師さんは、さういつて來る者のうちから、好かりさうな男を雇ひまして、晝間の仕事がしまつてから、夜半の鐘を鳴らさせにと、塔へ昇らせたのですが、實に不思議なことには、行つた男はそれきり何處へ行つたか、行方が分らなくなつてしまふのでした。鐘も鳴らなければ、鐘を鳴らしに行つた男の姿も二度とふたたび見ることはできませんでした。牧師さんは、さういふことが世間へばつと知れゝば、誰も雇はれる者はないことは分り切つたことですから、さういふ不思議は誰にも話さないやうにして、極く内所にして置いたのですが、それでも、その噂は何時の間にか、世間へ漏れてしまつて、たうとう、誰も雇はれようといふ者がなくなつてしまひました。小使に雇はれた男が、誰も彼もみんな何處かへ行つてしまふのは、實は牧師さんが殺してしまふのだとこそ〳〵噂する者さへある位でした。

牧師さんは、日曜の度毎に、説教の後で、教會の鐘を鳴らすのは神聖な大切な仕事であるのだから、それをよす譯にはいかないので、その仕事を引受ける者にはこれまでの給金の倍を拂ふことにすると、村人に云つて鐘を鳴す男をもとめたのですが全く無駄で、誰も私が雇れませうと云つて來る者はありませんでした。

牧師さんはすつかり困り果てゝしまひまして、或る日、家の戸口にぼんやりして立つて居ますといふと、村で「利口者のハンズ」といふ名で通つて居る若者がやつて來ました。

二

「牧師さん。私の今まで使はれてゐる主人はひどい吝嗇漢でそこで貰らふ給金ではとても食つて行くことができません。私は貴君に雇つて頂いて鐘撞きの仕事を引き受けませう」

さう「利口者のハンズ」が云ひました。

牧師さんの喜びといふのはありませんでした。

『いや、それは實に結構だ。それでは早速今夜お前の腕試しをやつてみるがいゝ。その上で給金は明日になつてから、しつかり相談することにしよう』

と、牧師さんは答へたのです。

ハンズはそれで結構だと承知しました。で、今度の主人の牧師さんだつても矢張り前のに負けない吝嗇漢だとは知らず

に、大喜びで臺所へ行つて、仕事に取りかゝりました。此の牧師さんもさういふひどく吝嗇な男でしたので、肉をにんと食はれては堪まらぬといふので、自分の居る眼の前でば流石にみんなが遠慮して食ふことを大分控へるだらうと思つて、雇人どもの食事の時には、自分も同じ卓子に就いて居て、みんなに麥酒を飲むやうにすゝめるのでした。牧師さんの考では、麥酒を餘計飲めばそれで腹がふくれて肉が食へなくなる、さうすれば、肉より麥酒の方が安いのだから、餘程割がいゝといふのであつたのです。所で、ハンズの場合は、さういふ計略が何にもなりませんでした。ハンズには幾ら麥酒を飲ませても、矢張り盛に肉を食ふのですから、要するに、麥酒だけ損といふことになるので、牧師さんは全くまゐつてしまひました。

もう大凡一時間もすれば夜半になるといふ刻限になりますとハンズは教會へ行つて、中へ入つて入り口の戸を閉めました。ハンズは、無論内は眞暗で、何の音もなくしんとして居ることと思つてゐたのですが、驚いたことには、燈がかんかんついてゐて、大勢の人が卓子の周圍に坐つて、骨牌をやつて居るのでした。ハンズは、その不思議を見ても少しも恐れませんでした。いや、少しはこはかつたかも知れないのですが、そんな場合に恐がつた風を見せてはよくないと思つたので、恐しがつてゐる樣子などは少しも見せなかつたのかも知れぬと思はれます。それはとにかくとして置いて、ハンズは平氣な樣子で、卓子のところへ行つて、骨牌の連中のなかへ

坐り込んでしまひました。

すると、その連中のうちの一人が顔をあけて、ハンズを見て、

『やア、朋友、お前さんは何の用で此處へ來なすつたね』

と、きゝました。

ハンズはその男の顔をちよつとの間ぢつと見詰めて居てから、アハゝと笑つて、かう答へました。

『いや、此所でさういふことをきく權利のあるものは、此の私きりなんだよ。ところで、その私が何にも云はないでゐる以上、君等の方からはそんな言はいはない方がつまり君等の得なんだらうぜ』

其所で、ハンズは、骨牌を手に取り上げて、その誰だか分らぬ無い連中に對して、まるで、それがこれまで極く親しい人人であつたかのやうに、骨牌の勝負を始めました。所が、その晩のハンズの運の好さといふのは非常でして、勝負の度毎に勝ち續けて、相手の連中の金がどん〳〵ハンズの衣嚢へ入つて行くのでした。

夜半の時計が鳴りますと、何處かで鷄が鳴きました。すると、燈も、卓子も、骨牌も、人間も、みんな一遍にパッと消えてなくなつて、ハンズ一人が教會の眞暗なしんとしたなかに取り殘されてしまひました。

三

ハンズはしばらくは闇のなかを手さぐりにして歩き廻つたが、やがて、塔へ上がる階段が手に觸つたので、そろ〳〵と探り足で昇り始めました。

第一階まで昇ると、燈の細い光線が壁の小さい隙間からさ

して居て、小さい男が坐つて居たのですが、その男には首がないのでした。

『いやァ、一寸法師さん、君は一體此所で何をしてゐるんだい？』

と、ハンスはきいて、先方の答は待たずに、その首なしの一寸法師をポンと蹴飛ばしますと、一寸法師は階段の下へとバツと飛んで行つてしまひました。ハンスはそれから又上へと昇つて行きましたが、二階にも、三階にもといふ風に、何の階にも首無しの一寸法師が一人づつ坐つて居るのでした。

ハンスはそれをみんな一番始めの一寸法師を蹴飛したやうにポンと足蹴にしてしまつたのです。

で、到頭、塔の頂上へまで昇り詰めて、ハンスは、四邊を見廻したのですが、すると、今一人首無しの一寸法師が鐘の内に隠れ込んで居て、ハンスが鐘の紐をつかまへたら、内から鐘舌でハンスの頭を一つグァンと喰はして、ハンスをそのまゝ、陀佛にさせてしまはうと、待ちかけてゐるのがハンスに見えたのです。

『おい、待つたり、一寸法師の兄い。そんな手を喰つて堪まるものかい。君は君の仲間が俺の手にかゝつて何うなつたか見てゐたらうね。君も矢つ張り同じやうにしてやつたつていいんだぜ。だが、君は一番高いところにゐるんだから、君には君で相當に立派な引つ込み方にしてあけよう。窓から下へ飛んで行くやうにしてあけよう。窓から下へ』

ハンスはさう呶鳴りつけたのです。

さう云つてから、ハンスは、鐘の内からその一寸法師を引ずり出し、脅しつけた通りに、塔の素頂邊の窓から、蹴落してしまはうと思つて、梯子をば昇り始めました。

すると、その一寸法師は、哀れな聲で、かうハンスに頼みました。

『あゝ、兄弟、何うぞ生命ばかりは助けてください。私は勿論のこと、私の仲間もこれからは決して貴所に手向ふ樣なことはしませんから。私は此の通り小さい弱い一寸法師ですけども何時か貴所に恩返しができぬとも限らないんですから』

『何だ、此のケチな小人島め。お前なんぞの恩返しを誰が當にする者があるものかい。だが、俺はな、今夜はひどく心持がいゝんだからな、手めえの生命は取らないで置いてやらう。けどもな、此れからは二度と再び、俺の眼にかゝらないやうに用心しろよ。今度何處でゝも見附けやうものなら、今晩のやうにわけなく見逃しちやァやらないからな』

と、ハンスは答へました。

首無しの一寸法師は、平つくばつて、ハンスに禮を云つて大急ぎで鐘の繩を傳はつて滑り下り、火事から逃げ出す人間でもあるかのやうに、忙てふためいて、塔の階段を駈け下りて、何處かへ行つてしまひました。其所でハンスは鐘の繩を引いて、思ひきつて鐘を撞き鳴しました。

牧師さんは夜半の鐘の音を聞きますといふと、非常に驚いたのですが、それでも、到頭それでやつとのことで、鐘撞きの大切な勤をまかせて置くことのできる人間を見附けることができたのだと、大へん喜んだのでした。ハンスの方はしばらく鐘を鳴らして置いて、それから直ぐ干草小屋へ入つて、ぐつすり眠こんでしまひました。

四

所で、牧師は何時も朝は極く早く起きて、雇人たちがみん殘らず仕事に就いて居るか何うかを確に見とゞける爲めに

見廻る習慣であつたのですが、此の朝も、その通りに牧師さんが見廻りますと、他の雇人たちは皆揃つて居たのですが、唯つた一人ハンズだけは影も形も見えません。ハンズは何うなつたのか誰も知つて居る者がありませんでした。やがて、九時になりました。それでも、ハンズの姿が見えません。けれども、十一時を打つといふと、牧師さんはハンズも矢張り前の鐘撞きたちと同じやうに行方知れずになつてしまつたのではないかと心配しだしたのです。然し、雇人たちがみんな晝飯の卓子に集りますと、ハンズは伸をし、欠伸をしながら何處からか、出て來ました。

『お前は何處に今まで居たのだ』と、牧師さんが訊きました。

『睡て居ましたよ』と、ハンズは云ひました。

『なに、睡て居たつて。正午まで睡て居たなどと云つては困るぢやァないか』と、牧師は呆れ返つて、大聲で云ひました。

『いや、何うしてもそれに相違ないんです。晝働けば夜は睡なければならないのと同じ譯でね。夜働く以上は晝間睡なきやァならないんです。若し、貴所が夜半の鐘撞きのできる男を他に見つけなさりやァ　私は夜明けからでも起きて働らきまさァ。だが、私に夜半の鐘撞きをやれと仰しやるんなら、私は、幾ら早くも、正午までは睡かして貰らはなければ駄目ですよ』とハンズは答へたのです。

牧師さんはさういふ點でハンズと談判し始めて、やがて次のやうな話に纏まりさうになりました。ハンズは鐘撞きをやめる代りに、他の雇人たちと同なじに日出から日没まで働け、但し朝飯の後一時間と、晝飯後の一時間とは睡ても宜しいといふのでした。それで、牧師さんは、何でも無いやうな顔付で、かう云ひ添へました。

『だが、勿論、それでも時々は用がふえれば餘計に働いて貰はなきやァならんよ。殊に、冬、日の短い時分になつたら、仕事の仕あがるまでにやつて貰はなきやァならんよ』

『いや、そんな事は全く駄目です。夏のうちもつと早く仕事をしまつていゝといふ話でなければ、冬になつても、お約束したよりは一分も餘計に働くことはできませんよ。矢張り夜明けから日の暮までしきや働くことはできません。私は何んな事があつても、それ以上は働きませんから、その積りでおいでなすつてください』と、ハンズは答へました。（つゞく）

勇ましい王子

三宅房子

一

むかし、あるところに王様がありました。王様は隨分お歳をとられてゐましたが、世繼の王子がないので、大層淋しく思つてゐました。で、王様は始終野や山へ行つて獵して歩いて氣をまぎらしてゐましたが、それにも眞きに飽きておしまひになると、今はもう何といつて慰めになるものがないので、ふと、ご自分の領地の中で、まだ行つたことのない一番遠くの國々を歩いて見ようとお思ひになりました。

さて、いよ〳〵旅に出れば、再び都へ歸るには幾月も〳〵かゝるのですが、しかし淋しい王様にとつては、遠い旅にさへ出れば、見るもの聞くものが珍しいものばかりだから、苦勞も忘れて、きつと面白いだらうと思はれたのです。

そこで王様は、いよ〳〵旅にお出かけになりました。

王様の領地は大層廣いのでした。それに高い岩山や、沙漠のやうなところが澤山あるので、旅をするのはなかなか容易なことではないのでありました。

ある日のこと、王様はお獨りでぢきそのあたりを歩いて見ようとお思ひになつて、ふらりとお出かけになつたのです。然し、いざ歸らうとなすつた時には、どつちを見ても同に見えて來た道がわからなくなつてしまひました。

いく時間もの間、王様は夢中でお歩きになりましたが、恰度日中でお日様は頭の上でカン〳〵照つてゐますから足はふら〳〵して來るし、咽はひつつくやうに乾いて來て、もう今にも眩れさうになりました。

すると、その時、ふと小さな井戸が道端にあるのにお氣づきになりました。しかし、それが古井戸でなく、この頃新しく掘られたやうな、きれいな井戸なのです。

水の上には銀の盃が浮いてゐます。王様はよみがへつたやうにお喜びになつて、盃をつかまうとなさいましたが盃はすーッと中へ沈んで行つてしまひました。さうしては、またぢらすやうにポカンと浮いて來るのです。王様はいくども〳〵攫へようとなさいましたが、たうとう我慢が出來なくなつて、ぢかに口を水につけてがぶ〳〵とお呑みになりました。

王様は思ふさまお飲みになりましたそこで起上らうとなさると、誰か水の中で王様の髯をしつかりと攫へてゐるやうなのです。王様はうん〳〵いつて首を擧けようとなさいましたが、どうしても立上ることが出來ません。二度も三度も力をこめましたが、たゞ痛いばかりで、どうすることも出來ませんでした。王様は怒つて、

「誰だ！私の髯をつかまへてゐるのは！」と呶鳴りました。

『俺だ！コスチェ王だ。』と井戸の中から聲がしました。見ると、青い眼をして、頭の大い小人が井戸の中に立つてゐます。

「お前は私の井戸から水を飲んだのだ。だから、私はお前のご殿中の一番大事な物で、しかも、お前がゐた時には無かつたものを、くれると約束するまでは決して離しはしないぞ。』と、小人の王がいひました。

さて、王様が御殿中で一番大事に思つてゐるものは何かといふと、それはお妃様でした。しかし、お妃様は王様が旅にお出になる時、廣いお部屋の中で切りと泣いておいでになつた位ですから、勿論小人の王がよこせといふ物とも違ふので、王様は

「よろしい、やる。」と約束しておしまひになりました。

すると、忽ちに小人の王も、井戸も、銀の盃も消えてしまつて、王様だけがたつた一人、砂地の上に立つてをりました。

王様は今のは夢ぢやないかとお思ひになりました。しかし、あんなに咽が乾いて今にも死ぬかと思つたのがすつかり元氣になつたのですから、たしかに夢である筈はないとお思ひになりました。王様は大元氣で、馬に乘つて、家來達を探しに、お出かけになりました。そして、間もなく皆なのゐるところへお出になりました。

二

それから數週間すぎますと、王様はいよ〳〵都へお歸りになることになつて、恰度お出かけになつてから八月振

りで御殿へお着きになりました。

人民たちは王様を尊敬してゐますから、王様の行列が町中を通ると、皆な道端に列を作つて帽子を振りながら『萬歳！萬歳！』と叫びました。御殿の石段にはお妃が立つてゐました。

お妃は手に何か薄い、きれいな布團にくるんだものを抱いておいでになります。よく見ると、その中には可愛い可愛い赤ん坊がレースの布に包まれてゐるのです。

王様はそれを見た瞬間、はッと思つて、小人の王との約束を思出しになりました。

『あゝ、取り返しのつかないことをしてしまつた。』と思ふと、王様はもう堪らなくなつて、そのまゝ其處に立ちすくんで、思はず兩手を眼にあてゝ、涙を抑へておいでになりました。

皆はびつくりしてしまひました。王様は王子のお生れになつたのを御覧になつて、さぞお喜びになるだらうと思つてゐたのに、この有様なので、皆なの驚きつたらありません。

この時から王様は、折角の旅もなんにもならないで、前よりも一層鬱こんでおしまひになりました。今日は王子をつれに來やしないか、明日は連れに來やしないかと思ふと、もう暫くの間も安心がなりませんでした。

しかし、その後何事もなく幾年か過ぎました、王子はもう立派な若者になりました。流石の王様も、小人の王との約束を全く忘れておしまひになりました。恐らく、世界中に王様の御家庭ほど、幸福な家庭はなかつたといつていゝでせう。

ところが、ある日、王子が森へ獵に行かれた時、ひよつこり一人の小人に出遇つたのです。

『お前は誰だ！』と其處にゐた小人に王子は尋ねました。

『誰だかぢきにわかる。家へ歸つたらお前の父さんに、私が約束を果してくれといつてゐたといつてくれ。もし、それを怠ると、大變なことになると、そのことも序に言つてくれ。』

さういつたかと思ふと、小人は見えなくなつて了ましたから、王子は御殿へ歸つて、お父様に其事を話しました。王様の驚きつたらありませんでした。眞蒼になつて、おそろしい、昔の話を王子に聞せました。

『お父様、そんなに悲しんで下さいますな。それほど怖いことでもありません。私はこれから行つて、どうかして小人の王が私を見限るやうな法を考へ出します。でも、もし一年たつても私が歸らなかつたら、私はもう無いものとあきらめて探さないで下さい。』

王子はすぐと旅に出る支度にかゝりましたので、お父様は立派な鞍の鎧と

鞍と馬とを王子に與へました。お母様は王子の首に金の十字架をさげて下さいました。そして、お父様もお母様も、涙を流しながらお別れを告げました。

三

王子は三日の間馬を走らせましたが、四日目になると、日の暮れ方になつてある濱邊へ出ました。見ると、砂の上に雪のやうに眞白な十二枚のきれいな着物が脱ぎ捨てゝあるのです。しかし、何處を見渡しても人らしい影も見えませんでした。

王子は不思議に思つて、また一つにはどんなことが起るのかといふ好奇心も手傳つて、馬から降ると、そつとその中の一枚をとつて柳の樹の蔭にかくれました。

間もなく、海の中を一群の白鳥が泳ぎながら岸の方へ近づいて來ましたがめい〳〵陸に上つたと思ふと、忽ちに十一人の美しい王女になつて、脱ぎ捨てゝあつた着物に眞換へて砂の上に立ちました。そして、元氣よく駈けて行つてしまひました。

しかし、十二人目の一番年若の白鳥だけは、まだ水の中にゐて長い首を伸しては何か心配さうに見廻してゐます。

白鳥はその時、ふと柳の樹の蔭にゐる王子を目つけました。

『王子さま、私の着物をお返し下さいませ。私はいつまでもあなたのことを有り難く思ひますから。』と、可愛いゝ白鳥がいひました。

さういはれると意地悪く返さずにはゐられなくなつて、王子は急いで砂の上へ着物を持つて行きました。

白鳥の王女は人間の着物に着更へて王子のゐる方へ歩いて來ました。王子

はこれまでにこんなに美しい娘を見たことがありませんでした。

『王子さま、私のお願ひをすぐにきいて下さいまして有り難う。私はコスチエ王の一番末の娘です。父は地の下の廣い國を治めてをりますが、あなたの事を長い間待つてゐて、大層怒つてゐるのです。

でも、決して御心配になつてはいけません。ちつとも恐れなさる事はないのですから、私の申上げる通になさませ。父にお會ひになつたら、すぐと跪きなすつて、父がどんなに脅しても、大聲を出しても、そんな事には少しも構はずに大膽に傍へ近づいていらつしやいませ。さうさへなされば、大丈夫なのでございます。さア、ではご一緒に參りませう。』

白鳥の王女が足でトン〳〵と地面をたゝくと、忽ちに大きな口が地面に開いて、二人は地の下の世界へ降りて行くことが出來ました。

二人は、間もなくコスチエ王の宮殿に着きました。宮殿の灯は暗い地の下の國を照して、太陽よりもまだ明るくかゞやいてゐます。王子はいはれた通り、大膽に大廣間の方へ進んで行きました。

コスチエ樣は、頭の上にキラ〳〵と輝く冠をかぶつて、黄金の椅子に腰かけて坐つてゐました。王の青い眼はガラス玉のやうに光り、兩手はまるで蟹の爪のやうな恰好をしてゐます。

コスチエ王は王子を見るとすぐ、宮殿の壁がふるへる程恐ろしい聲を出して呶鳴りました。

でも王子はそんなことには構はずに王の椅子の方へ向つて跪きながら進んで行きました。

王子がいよ〳〵側まで行つた時、コスチエ王は急にあはゝゝゝと笑出しました。

『貴樣は仕合せ者だよ。俺を笑すことが出來たなんて。……この地の下の世界にゐてはどうだ。しかし、その前に三つの仕事をしなければならないのだが、今夜はもう晩いから寢たがいゝ。明日になつたら話すから。』

四

翌朝になると、王子のところへ使が來て、コスチエ王が會ひたいといつて來ました。王子はすぐと王のところへ行つて、跪きながら丁寧にあいさつをしました。

『王子よ、お前がしなければならない事といふのを聞かせる。明日の晩までに水晶の窓と黄金の屋根を持つた大理石の宮殿をこしらへるのだ。もしお前にそれが出來たら、私の友達にしてやるが、出來なかつたら首はないと覺悟するがいゝぞ。』

王子はこの恐ろしい命令をたゞ默つて聞いてゐましたが、自分の部屋に歸ると、もう死ぬより外に道がないと思つて、うなだれて考へに沈んでゐました。すると、その時、ふいに一匹の蜜蜂が窓のところへ飛んで來て、コツ〳〵ツと戸をたゝきながら、

『入れて下さい、入れて下さい。』と、いつてゐます。

王子が立つて行つて窓を開けると、蜜蜂はブーンとうなりながら部屋へ入つて來ましたが、忽ちコスチエ王の末の王女となつて、ひよいと立上りました。

『何をふさいでゐらつしやるのです、王子樣！』

『私はあなたのお父樣のことを考へてゐたのです。お父樣は私を殺さうとしてゐるのです。』

『怖いことはちつともございませんわ。安心してお寢みなさいまし。明日の朝になつてお目覺めになれば、ちやんとその御殿が出來てゐますから。』

さて、コスチエ王の末の王女は、いつた通の事を本當に行つたのでした。

翌朝になつて王子が部屋から出て見ると、自分が思つてゐたよりは、もつともつと立派な御殿が出來てゐました。コスチエ王もびつくりしました。どうして出來たのだらうと自分の眼を信じられないやうに眺めてゐました。

『ウン、こんどだけは貴樣に勝をとられた。だが、いつもさう巧く行きはしないぞ。明日、俺の十二人の娘たちが皆な一列になつて貴樣の前で並ぶが、その時貴樣はその中のどれが一番末の王女であるか當てるのだ。それが出來なかつたら、首はないぞ。』

王子はがつかりして自分の部屋へ歸つて來ました。コスチエ王の王女達は十二人が十二人とも、實によく似てゐて、とても一人一人見別けがつかないのです。

困り切つて王子が考へ込んでゐると

天井の方で聲がしました。見ると、例の蜜蜂です

『それは難しいことですわ。私がお手助けしなければ駄目です。私たち姉妹は、お父樣でさへ見別けがつかない程によく似てゐるのですから。』

『それなら、どうしたらいゝのです。』と、王子は尋ねました。

『かうなさいまし。私は眼瞼に小さなほくろがございますから、よく氣をつけてご覽なさいまし。…… それでは左樣なら。』

五

翌朝になると、コスチエ王の使が王子を迎ひに來ました。十二人の王女たちはずらりと並んでゐます。しかし、どの王女も全く同じ姿をしてゐます。

王子は迷つてしまひました。二度も王女たちの前を通つて一々よく見ましたが、眼瞼の上の目印をさがし出すことが出來ないのでした。

やうやく三度目になつて、王女たちの一人が眼瞼に小ちやなほくろをつけて居るのを見た時、王子は思はず胸ををどらせて、

『この方が一番末の王女さまです。』と叫びました。

『どうして當つたのだらう。』

コスチエ王は怒つて呶鳴りました。『これには、何かごまかしがあるに違ひない。だが、いつもさう巧くばかり行はしないぞ。三時間の間に貴樣はまたこゝへ來て、何か別に貴樣の智慧を見せるやうなことをしなければいけない。さうだ、こゝにある一握の藁に火をつけて置くから、それが燃え切らぬ内に貴樣はそれを一足の靴に變へてしまふのだ。もしも出來なかつた時は、貴樣の首はないぞ。』

また王子はがつかりして自分の部屋へ歸つて行きましたが、その前に蜜蜂は、もうちやんと來てゐました。

『どうしてそんなに鬱ぎ込んでゐらつしやるのです、王子樣。』

『あなたのお父さんは私に一足の靴を作れといふのです。鬱ぎ込まずにはゐられまん。私を靴屋だと思つてゐるのだ。』

『まア、どうやつておこしらへになりますか。』

『どうやつてといつて、私にはどうにも拵へやうがありません。私は死ぬのなんか怖くはない。人間はどんなにしたつて一度よりは死なないのだから。』

『いゝえ、いけません、王子樣。死になんぞなすつてはいけません。私があなたをお救ひします。私たちは一しよにこゝを逃げませう。それが出來なかつたら、一しよに死にませう。』

王女はさういつた時、思はずほとりと涙を落しました。

王女は王子を部屋の外へつれ出すと部屋に鍵をかけてしまつて、鍵を見えないところへ捨てゝしまひました。王女と王子はお日樣のかゞやいてゐる地上の世界へ向つて駈け出したのです。そして、程なくこの前と同じ海邊まで來ることが出來ました。

ふと、見ると、王子の乘つて來た馬がまだ傍の牧場で靜かに草をたべながら遊んでゐます。馬の方でも、王子の姿を見たものですから「ヒーン」と嘶きながら飛んで來ました。

もう一刻も猶豫してゐる時ではありませんから、王子はひらりと馬に跨つて、後には王女を乘せて、矢のやうに駈けました。

六

コスチエ王の方では、約束の時間が來たのに王子が姿を見せませんから、何をぐづ〳〵してゐるのだといつて家來をよこしました。

家來は來て見ると、部屋には堅く鍵が下りてゐますから、どん〳〵扉をたたきました。

すると、中から

『一寸の間待つて下さい。』と聲がしました。

それは王女の落した涙が、王子の聲をまねていつたのでした。

家來はコスチエ王のところへ行つてその事をいひました。

王は仕方なく待つてゐました。でも、王子は出て來ません。王はもう一度家來を使にやりますと、矢張り同じ樣な聲で、『直きです。』と、答へました。

『あいつは俺を馬鹿にしてゐるのだな。』

王は顏を眞赤にして呶鳴りました。

『扉を破つて引張つて來い。』

家來は急いで駈けて行つて、扉を打ち破つて中へ入りますと、中には誰もゐませんでした。

コスチエ王も腹が立つて〳〵堪らないので後から來て見ると、この有樣ですからいよ〳〵怒つて、兵士たちにすぐと二人を追ひかけろと命令を下しました。そして、若しつかまへて歸つて來なかつたら、命がないぞと言ひ渡しました。

その時までには、王子と王女はもう遠くの方まで來てゐましたので、ホッと安心してゐたのですが、不意に後を追ひかけて來るやうな馬の足音を聞きつけました。王子は馬から飛び下りて耳を地面にあてました。

『おや、大勢追ひかけて來る。』と、王子は叫びました。

『ではぐづ〳〵してゐられません。』

王女はさういつたかと思ふと、忽ち自分は河に變つてしまひ、王子は橋になつてしまひ、馬は鳥に變つてしまひました。そして、橋から先きの廣い路は、三つに別れた小さな路にしてしまひました。

兵士たちは橋のところまで來て立どまりましたが、王子と王女が三つの路の內、どの路を行つたかわからなくなつてしまつたのです。

兵士たちはがつかりして戻つて行きました。しかし、そのまゝ歸つたら、どんな罰をうけるかと思つて、みんな顚へてゐました。

七

『馬鹿。』

コスチエ王は夢中で呶鳴りました。

『あいつ達は橋と河になつたにきまつてゐるのだ。そんな事がわからなかつたのか。すぐともう一遍行つて來い。』

兵士たちは電のやうに駈け出しました。而し、もう遲かつたのです。王子も王女も、遠くの方へ行つてゐました。

やがてのこと、

『また馬の足音が聞えます。』と、王女が驚いていひました。王子は馬から飛

下りて、地面に耳をつけました。

『さうだ、もう近くへ來てゐます。』と王子もいひました。

すると、忽ちにして、王子も王女も馬も見えなくなつてしまひました。その代りに深い森が出來て、數知れない澤山の路が中を通つてゐました。

コスチエ王の兵士たちは、目の前に二人を乘せた馬が走つて行くと思ひながら、森の中まで駈けて來ました。そして、もういよ〳〵近くまで來たと思つた時、不意に馬も森も何もかも消えてなくなつてしまひました。兵士たちは仕方なくがつかりして、また王のところへ戻つて行かなければなりませんでした。

『馬を出せ、馬を出せ。』と、コスチエ王は叫びました。『俺が追つかけて行くのだ。こんどこそもう逃げさせはしないぞ。』

王は怒つて頭から湯氣を立てながら馬を走らせました。

八

『誰か私達を追つかけて來るやうです。』と王女がまたいひました。

『さうです、私もさう思ひます。』と、王子がいひました。

『こんどはお父樣がご自分で來たのです。ですが、お父樣の力は教會の前までは來られますが、それから中へは行かれないのです。さアあなたの金の十字架を貸して下さい。』

王子はお母さんから貰つた十字架を首からとつて王女に渡しました。

すると王女は、忽ちに自分は教會に變つてしまひ、王子は鐘樓に變つてしまひました。

コスチエ王が着いた時には、もうすつかり、變つてしまつてゐたのです。

『お坊さん、こゝを馬に乘つた旅人が通りはしませんでしたか。』

『ハイ、王子とコスチエ王のお娘御が今しがた通りました。お二人はそこの教會へ入つて行きましたが、もしあなたがお出でになつたら、宜敷く申上げてくれといふて居られましたよ。』

教會の中へ入つたと聞いた時、コスチエ王は歯ぎしりして口惜しがりました。流石の王もそれから先へ行く力がないからです。

やがて、コスチエ王はすご〳〵と戻つて行きました。

さて、王子と王女はそれからどうしたでせう。

やつと邪魔物がなくなつたので、さつと樂しい旅をつゞけて行つたことでせう。（をはり）

顎の治療

沖野岩三郎

昔、紀州の山奥に、周齋といふお醫者さんがありました。

周齋は立派なお師匠さんにも就かず、醫學校も卒業しなかつたので、少しむづかしい病氣になると、もうどうする事も出來ませんでした。で、せめてもに、息子の久齋だけは、京都へ勉強にやつて、立派なお醫者にしてやりたいと思つたので、或年の春、五百兩のお金を持たせて、久齋を京都へ旅立たせました。

京都へ出て來た久齋は、早速或名高い先生の所へ入門して傷寒論といふ書物を習ひ初めましたが、どうも文字がむづかしいので、一月も經たないうちにお暇を貰つて、他の先生の弟子になつて藥の調合を敎へて貰ひました。所が藥にも何百といふ種類があつて、その名前だけ覺えるのも容易でないので、其所も一月と經たないうちに出てしまひました。そしてお父樣から貰つた五百兩のお金が無くなるまで、毎日何にもしないで、ぶら〳〵遊び暮してゐるうちに、或日の事突然、紀州から使が來て、お父樣の周齋が大病だといふ知らせを受けました。久齋は吃驚して早速使の者と一緒に、大急ぎで紀州へ歸つてみますと、お父樣は、もう餘程の重病でしたが、可愛い息子が京都から歸つて來たといふのを聞いて、早速久齋を枕もとに呼寄せて、

「久齋、よく歸つて來てくれた。定めし立派なお醫者になつたであらう？」と尋ねました。すると、久齋は正直に、

「お父樣、私はまだお醫者の事は、ちッとも習ひません。」と答へました。で、お父樣は、

「しかし傷寒論といふ書物を讀んだらう？」と問ひましたが久齋はまた正直に、

「お父樣御免下さいまし。私はその書物の最初にある……およそ傷寒は……といふ言葉だけしか覺えてゐません。」と答へました。

周齋はそれを聞いて暫く默つてゐましたが、

「では、藥の調合方は習つて來たらうネ。」と問ひました。

すると久齋は、

「それも習ひかけましたが、あんまり澤山の品數があるので、面倒臭いから止めました。でも甘草と三歸來の名だけは覺えてゐます。」と正直に答へました。

周齋は眼をぱッちりと見開いて、久齋の顏を覗めてゐましたが、

「京都へ行つて……凡そ傷寒は甘草と三歸來……といふ事だけ習つて來たのか。それだけ習ふのに五百兩使つたのか。」と言つてハヽヽヽと笑ひました。所が周齋の病氣は笑中風といふ病氣でしたから、一度笑ひ出したなら、なか〳〵容易にその笑ひが止みません。

周齋は三時間も五時間も、ハヽヽハヽヽと笑ひ續けてゐましたが、其日の夕方たうとう笑ひながら死んでしまひました。

その話を聞傳へた村の人達は、

「久齋さんは京都へ行つて、餘程偉いお醫者さんになつて來たと見え、周齋さんは喜んで喜んで、笑ひながら死んださうな。」と言つて大評判になりました。

お葬式が濟んだあとで、久齋はお父樣の後を嗣いでお醫者を開業しましたが、どんな病人が來ても、皆な甘草と三歸來といふ草の根だけを調合してあげましたが、不思議にもそれで、大抵の病氣は癒つてしまひました。

所が或日の事、年の頃四十ばかりの、手拭で頰冠りをした百姓男がひよつこり入つて來ました。そして頻りに右の人さし指で口の所を指さしながら、ワケの判らないことをオゴオゴと言つてゐました。

「あなたは啞ですか。」と、久齋は尋ねました。

『あンあ。』と頬冠りの男は答へました。
『何か食べたいのか、お飯でもあけようか。』
と久齋が訊きますと、又、
『あンあ。』と言つて、男は掉頭をふりました。
『おい〳〵、どうしたんだい？　その頬冠りを除らないか。』
久齋は腹が立つたやうに呶鳴りました。けれども、男は矢張り、
『あンあ。』と言つて頭を掉つてゐました。
久齋は妙な男もあるものだと思つて、ぢいッと其の顔を見てゐるうちに、ふと氣づいたやうに、
『あなたは顎が外れたのですか。』と申しますと、男は『さうです。』と云ふやうに、深く點頭きました。
いよ〳〵顎が外れたのだと知れた時、久齋は困つてしまひました。けれども致方がないから、取敢へず甘草と三歸來とを煎じて飲ませようとしましたが、あんぐり口を開けた男は、『あンあ。』と言つて藥を斥けました。そして早く顎をもとの通りにして下さいと手まねで頼みました。
久齋は奥の一室へ入つて暫く考へてゐましたが『さうだ！』と言つて、はたと膝をたゝいて表へ出て來ました。そして顎の外れた男を裏の泉水の傍へつれて行つて、
『この泉水を向ふ側までとび渡れ！』と命令しました。それは、男が泉水をひらりと跳び渡つて兩足がトン！　と土についた時、きつと顎がもとの通りに篏るだらうと思つたからでした。
百　姓　男はお醫者樣の命令だから、久齋のいふ通りに五尺ばかりもあらうと思はれる、泉水の上をひらりと向ふ側にとび渡りました。
『どうだ、顎は元の通りになつたらう？』と久齋は尋ねましたが、男は矢張り、
『あンあ。』と云つて首を横に掉りました。
『これでは致樣が無い！』と呟きながら、久齋は長い梯子を納屋の中から持出して來て、それを物置の屋根に架けて、
『では此の屋根の上にお上り。今度は屹度癒してあげるから』と云つて、自分も一緒に屋根の上に登りました。そして百姓男の頬冠りの手拭を、強く〳〵顎の下で結んで、一の二の三つで、ひらりと庭の上に跳び降りさせました。

百　姓　男は庭にとび降りる時、どうしたものか自分の膝頭でひどく鼻柱を打つて、たら〳〵と鼻血を出しました。
『どうだ、物が言へるか、言つて御覽！　と久齋は屋根の上から叫びました。けれども百姓男の顎の下は、強く手拭で縛られてゐるので、口が開きません。そこで久齋は、
『その頬冠りの手拭を除れ！　早く除れ』と言ひますと、男は急いで頬冠りの手拭を除りますと、顎は元の通りだらりと下へさがりました。
『物が言へるだらう、言つて御覽！』と久齋は屋根の上から叫びました。けれども男は矢張り、
『あンあ。』と言つて掉頭をふりました。
久齋は少し腹が立つたので、大きな聲で、
『では、あの土藏の屋根へ上つて、あしこから跳んで御覽！』と叫びますと、百姓男は土藏の屋根を見上げて、あーン、あーンと子供のやうに泣き始めました。それはあんな高い屋根から跳び降りるなら屹度死んで了ふと思つたからでした。
『子供ぢやァあるまいし、泣くといふ事があるかッ！』

久齋は屋根の上から叱りましたが、百姓男の顔を見ますと、兩の眼から白い涙がほろ〳〵、兩の鼻の穴から紅い血がほた〳〵、あんぐり開いた口から黄ッぽいヨダレがたら〳〵流れてゐるぢやありませんか。

久齋は可笑しくて可笑しくて堪らなかつたので、腹を抱へて笑ひましたが、あんまり笑ひ過ぎたので、どうかした機みに、久齋の顎がコチリ！　と鳴つたと思ふと、百姓男と同じやうにだらりと下つてしまひました。

しまつた！　と思ひましたが、もう物が言へないので、久齋は懐の手拭を取出して、それで頬冠りをして、顎の下で強く〳〵結んで、一の二の三つで、ひらりと屋根から跳び降りました。そして頬冠りの手拭をとつて見たが、顎はだらりとぶら下つたまゝ矢張り物が言へませんでした。で、百姓男に對つて、

『私も顎が外れた。どうかして下さい。』と頼まうとしましたが、物が言へないので、

『あンあ、あンあ、』とばかり申しました。

百姓男は久齋の顎が外れたとは知りませんから、

『先生、そんな戯言どころではありません。早く癒して下さいまし。』と頼まうと思つて、頻りに、

『あンあ、あンあ、あンあ、』と申しました。久齋も同じやうに、

『戯言でも洒落でもない。私も顎が外れたのだよ。どうかして下さい。』と言ひたかつたが、物が言へないので頻りに、

『あンあ、あンあ、あンあ、』と言つて頭を掉りました。二人はかうして、

『あンあ、あンあ、あンあ、』

『あンあ、あンあ、あンあ、』と言ひ合つてゐましたが、久齋は忌々しくなつて來たので、大きな聲で、

『あーンあ！』と呶鳴りました。百姓男も、久齋が飽まで自分を馬鹿にしてゐると思つたので、たうとう腹を立てゝしまつて、いきなり右の拳を固めて、久齋の顎を思ひきり強く下から殴り上げました。

『いたッ！　何をしやがる！』と言つて、久齋も右の拳を固めて、百姓男の顎を下から上へ、思ひきり小突き上げました。その時百姓男は、

『畜生！　其のまゝは置かないぞ！』と叫んで身構へました。

『サア來い！　俺は醫者は下手でも柔道は強いぞ！』と久齋が叫ぶと、百姓男も負けてゐず、

『サア來い！　俺は柔道は知らないが、棒捻は強いぞ！』と呶鳴り返しました。

こんな事にならうとは知らない、外の患者さん達は表の待合室で、久齋の出て來るのを待つてゐましたが、あんまり遅いので、顎の外れたのを入れるのは、どんな事をするのだらう、内證で見てやらうぢやないかと言つて、そッと物蔭から見てゐましたが、皆なすッかり感心してしまひました。で、一人の爺さんが出て行つて、

『久齋先生、誠に感心致しました。もうあの男の顎は、あんなに強く殴りつけても外れなくなりました。又たあんなに大聲で呶鳴つても、平氣ですから、この上柔道で投げつけて御覽にならないでも大丈夫でございませう。』と申しました。

その時二人は、ふと自分達が、いつの間にか物が言へるやうになつてゐるのに氣がつきました。そして二人は一緒にハハ、、と大聲で笑ひましたが、顎が外れませんでした。

百姓男が顔を洗つて歸つた後で、久齋はつく〳〵自分の技倆の足りないのを悲しく思ひました。で、其の翌日から思ひ切つて醫者を廢して、また京都の町へ出て行きました。そして一生懸命に勉強しましたので、七年の後には、本當の名高いえらいお醫者樣になつたといふ事です。（をはり）

世界名作物語（その四）

物草太郎（日本）

森川一朗

昔、信濃の國に物草太郎と云ふ男がありました。こ男はその名の通り日本一の物臭者で、起きるが面倒だと四日も五日も續けて寢てゐました。物草太郎の家と云ふのは、身分相應にすばらしいもので、竹を四本立てゝそれを茲で圍つたゞけなのでした。

物草太郎は貧乏な癖に仕事もせずにゐるものですから、食べる物がなくてお腹が空いて堪りません。けれども自分では至つて暢氣なもので、『いまに誰か食べるものを持つて來て呉れるだらう』位に考へてゐて、相變らず物臭根性から寢てゐるのでした。

（けれどもその心の中では繁昌なことばかり考へてゐました。

『己れもこんな家に住んで居ずに立派な家に住みたいな。まづ家の四面四方に築地を築いて、三方に立派な門を立て、東西南に池を掘るかな。そして池の中へは鳥をこしらへるんだ。鳥から隣へ繪巻な反り橋を架けるんだ。それで家だが、屋根はひわだ葺きがいゝな、庇は木の組入れにして金や銀を打ち込んでぴか〳〵させ　天井は錦で張ることにしよう。そして自分の居間の前に櫻琦の御簾を掛けるんだ。いゝなア、こんな家に住んだら……。かうなると家來も欲しいな。家來にも立派な服裝をさせるとしよう。そして己れは外へ出る時は金欄の馬掛けをして馬に乘つて家來を大勢連れて威張つて道をゆく――あゝ、いゝなア。』

物草太郎はこんな贅澤なことを獨りで考へてゐました。すると寢てゐる背中の方で蚤がちくり〳〵と食ひ刺します。

『あッ、畜生！己れが御飯も食べずにゐるのに、蚤の奴は己れの體に食ひ付くなんて情知らずの太い奴だ。いま〳〵しい。』と思つても起き上つてその蚤を取りつぶすのも憶劫なので我慢をしてゐました。然しお腹の空いて來るのはと時が經つにつれて、だん〳〵と我慢がし切れなくなるのでした。

『あゝ、お腹が空いて來た。誰が食べ物を持つて來て呉れないかな。』と思つてしきりに表の方を見てゐますと、お隣の家のお内儀さんがやつて來ました。

物草太郎は、隣のお内儀さんの顏を見ると、また何か食べ物を持つて來て呉れたのだと思ひましたのでにこ〳〵して、

『やアお内儀さん、大變いゝお天氣ですね。』

とお世辭に言葉を掛けました。

『太郎さん、まだお前さんは寢てゐるのですか。そんな立派な體をしてゐて、起きて働らいたらどうです。』とお内儀さんは云ひました。

『どうも起きるのが物臭くてね。』と太郎は相變らず暢氣に云ひました。

『お前さん、お腹が空いてゐるでせう。お前さんの鼠にちやんと書いてある。太郎は大急ぎで竹の竿を振り廻

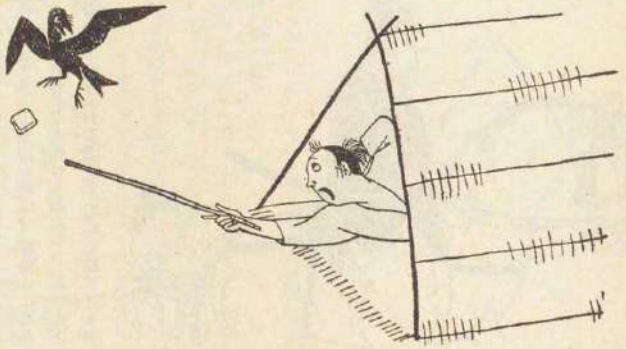
な餅にして寢てばかりゐるなんてあきれてしまひます。しかし可哀さうだから餅を持つて來てあげました』と云つてお隣のお内儀さんは餅を五切れ置いて行きました。

『あゝ有難い〳〵。』と云つて太郎は寢たまゝそれを食べました。大きな餅の切れですがあんまりお腹が空いてゐたものですから、四つ食べてしまひました。そしてあとの一つも食べようとしましたが、

『待てよ、これを食べてしまふと樂しみが無くなつてしまふ。一つでも殘して置けば安心して居られる。また誰か食べ物を持つて來て呉れるまでこれを取つて置かう。さうすればその間飢じい思ひをしても我慢するに氣が强いからな。』

さう考へて食べたい一切れの餅を食べずに置きました。

物草太郎はまた種々なことを考へては一人で面白がつてゐました。自分が出世した時のことや、大將になつて何萬といふ家來を連れて戰さに行つて勝つことや、または話しに聞いた浦島太郎の行つたと云ふ龍宮へ行つたことなぞ、それ〴〵好き勝手に心で作り出して



獨りで面白がつてゐました。

然し、どうも餅のことが氣に掛つてなりませんので、それを取つて胸の上へ乘せて見てゐましたが、少し惡戯がして見たくなりましたので、今度は額の上へのせて鼻の脂をつけて、それを転らしては遊んでゐました。

すると、ひよつとした動機で、その餅がこつて往來の方へころ〳〵と轉つてゆきました。

『しまつた。これは困つたことになつたな。』

と思ひましたけれど、相變らずの物臭からそれを起きて取りに行かうともしません。

『その内に誰か人が通るだらう。そしたらその人に頼んで取つて貰はう。』と思つて人の通るのを待つてゐました。

然し、なか〳〵人は通り掛りません。すると烏が一羽空の方から下りて來てその餅を食べようとしました。太郎は大驚愕いて手元にあつた竹の竿でそれを追ひました。

『あゝよかつた。己れの唯一つの財產を烏に持つて行かれる處だつた。』と獨り言を云つて相變らず往來を眺めてゐますと、今度は犬が歩いて來ました。犬も餅を見て食べようとしましたので、太郎は大急ぎで竹の竿を振り廻

してそれを追ひ退けました。

その中に夜になつてしまひました。太郎は夜の中に犬にでも食はれなければよいがと思つて、心配しながら翌朝目が醒めて見ますと餅はまだありました。それでやつと安心して今日こそは誰か通る人があるだらうと思つて昨日のやうに竹の竿で烏や、犬を追ひながら待つてゐましたけれども、その日もたうとう誰も通りませんでした。

さうして三日經ちましたが誰も通りませんので落膽してゐますと、三日目の夕方向ふから馬の蹄の音が聞えました。物草太郎は大層喜んでゐますと、それはこの土地の地頭と云ふお役目をしてゐる左衛門尉と云ふ立派な人でした。何んでも鷹狩りの歸りらしく家來を五六十人ほど連れてゐました。太郎はそれを見て寢床の中から鎌首をもたげて、

『若しお侍樣、其處に餅が一切れ落ちて居りますが、どうぞそれを取つて下いませんか。』

と申しました。

けれども左衛門尉はさも聞えぬと云ふ風でどん〳〵通つてしまひさうになりましたから、太郎は落膽して、

『あの人は何んと云ふ物臭者だらう。馬からちよいと降りて取つて呉れたつて、そんなに骨の折れることでもないのに、世の中に物臭者は自分ばかりだと思つてゐたら、あの人は自分よりもつと物臭者らしい。』と獨り言を云ひました。

すると左衛門尉はそれを聞き咎めて、通り過ぎた馬を引き返して來て申しました。

『お前は今私の惡口を云つたらう。私だから腹をたてないが、他の人ならひどい目に遭ふ所だぞ。うむ、話しに聞いてゐた物草太郎と云ふのはお前だな。お前のやうなものはこの廣い日本に二人とあるまい。』

それを聞いて物草太郎は不平らしく云ひました。

『はい、私は物草太郎には違ひありませんが私のやうな物臭者はこの日本にもう一人あります。その一人と云ふのはあなたです。』

かう云はれても左衛門尉は腹も立てないで却つて「此奴は面白い男だ」と、思ひましたので、

『お前は毎日そんな風にして寢てゐるのか。』

と訊ねました。

『ええ、起きるのが憶劫ですから、氣が向くまでかうして寢てゐます。然し氣が向けば起きることもあります。物臭さなことは私の病氣ですからどうも仕方がありません。始めの中は父が死ぬ前に遺して置いて呉れたものゝ

ありましたので、それを賣つて食べてゐましたが、今では何もなくなつてしまひました。それで人が食べ物を呉れゝば食べるし、貰へなければ七日も十日も食べずにかうしてゐます。』と答へました。

『それは不憫な事だ。然しそんなに寢てゐてはお終ひには命が失くなつてしまふから今の内に命を助ける支度をするがよい。私が通り掛つたのも何かの縁と思ふから、土地をやるから百姓をして見たらどうか。』と左衛門尉は親切に云つてくれました。

『御親切は有難うございますが、どうも土地を耕して米や麥を作るのは面倒臭くて、とても私には出來ません。』

『それでは商ひをしてはどうか。』

『資本がありません。』

『資本は私が出してやらう。』

『でも習ひ覺えたこともない商は私に出來さうもありません。』

これには迚に親切な左衛門尉も困つた樣子でしたが、ふと何か思ひ付いたらしく、

『それでは私がよいやうにして助けてやらうお前は明日から何處の家へ行つても御飯の食べられるやうになる。』と云つてその儘地頭の左衛門尉は歸りました。

左衛門尉は家へ歸るとすぐに次のやうな書付けを自分の領地中の家々に配りました。

『物草太郎に毎日三合の御飯を二度食べさせよ。そしてお酒を一度飲ませよ　この命ずに從はぬものは他國に追ひやつてしまふ。』

こゝやうな書付けが配られたので、百姓達は大層迷惑に思ひましたけれども仕方がありません。地頭の命令ですから、その後は物草太郎が來さへすれば一日に三合の御飯を二度と、いくらかのお酒とを飯まして呉れました。

物草太郎は左衛門尉のお蔭で、それからは食べ物に困るやうな事はありませんでした。然し生れつきの物臭ですから、よく〳〵お腹が空いて來なければ、やつぱり寢てゐて食べに行かうともいたしません。

さうして三年程經ちました。其年の暮に四五人の百姓が物草太郎の所へ來て申しました。

『太郎さん、今日は折り入つてあなたにお願ひがあるのですがね。實はこの土地へ京都の二條の大納言樣から「ながふ」と云ふものを當てられたのですが、太郎さんあなた一番行つて下さいませんか。』と云ひました。

『一體「ながふ」と云ふのは何んですか。面倒臭いことは私には出來ませんよ。然しながい間あなた方は私に食べさせて下すつたのですから樂なことなら行かぬこともありません。』

と太郎は云ひました。

『「ながふ」と云ふのは三月の間大納言樣のお邸へ行つて働くことです。今年はこの土地へ當てられましたので、誰かやつたものかと相談しましたが、たうとう太郎さんにお願ひに來たやうな譯なのです。』

『いや、それはお斷り申しませう。私には人に仕へて働くなぞと云ふことは出來ません。然し地頭樣の命令なら行かぬ限りもありませんが、あなた方の賴みなら眞平御免です。』

と云つて太郎はそれを斷りましたが、百姓達は更ら〳〵賴んで、都へ行くと出世するとか、都は一生に一度は見て置きたい程立派だし、また美しい女の人もゐるから、あなたもお內儀さんを探し當てゝ來られるかも知れないなぞと云つて、種々と勸めましたので、遂に物臭者の物草太郎も、

『其では私が「ながふ」になつて行きませう。』

と云つてそれを受けました。

百姓達は大層喜んで、早速お金を集めて太郎に贈りましたので、太郎は信濃を出立して都へ上りました。

物臭者の太郎も一度故國を離れて旅に出て見ますと、周圍の變つた美しい景色や、宿場宿場に泊つてゆく旅の面白さに、今までの物臭い氣持が、何處かへ飛んでしまつたやうに、さつぱりした心になりました。すると今迄重苦しく感じてゐた頭の上の空までも、はつきりと晴れ渡つてゐる樣な心地がしてきました。

となく輕いよい氣持になるのでした。

『何だか己れは生れ變つたやうな氣がする。』

と太郎は自分で自分を不思議に思ふ位でした。

都へ來た物草太郎はその賑やかなのに眼を丸くしてしまひました。都の人達は太郎の汚い服裝や垢だらけの顏を見て、

『あんな汚い色の黑い人がこの世に二人とゐるだらうか。』と云つて笑ひました。

太郎は人々の笑つてゐるのを耻しも氣にしないで、二條の大納言樣のお邸に來ました。

大納言樣は太郎の日本一と云ふ程汚い姿を見て一度は吃驚いたしましたが、

『忠實で働いて呉れさへすればよい。』と云つて太郎を召使ひました。

所が都へ來て立派な街や、お寺や、御殿や尊い方や、美しい人達なぞを見た太郎は何んとなく氣が浮き立つて、今迄のやうな物臭い氣持はすつかり失くなつてしまひました。それでなか〳〵忠實に働くので、大納言樣に氣に入られて、三月のお約束が七月にも延びてその年の十一月にやつとお暇を貰つて故國へ歸ることになりました。

物草太郎は大納言樣から莫平かのお動金を戴いたので、ゆつくりと都々くの方々を見物して歸らうと思つて、お邸を出てから宿屋に泊りました。其處で太郎は考へました。

『故國を出る時都へ行つたらいゝお內儀さんを探し當てゝ來るがよいと云はれたが、己れもこの儘歸るしもつまらないから、一人お儀さんを探して連れて行きたいものだ。』と思ひましたので、宿屋の亭主を招んで、その事を話し、お內儀さんを世話して下さいと賴みました。すると宿屋の亭主は、太郎の汚い姿を見て噴き出して笑ひながら、

『この廣い都にもあなたのやうな人のお內儀さんになるやうな女はゐませんよ。』と云ひました。然し、太郎は何んとかしてお內儀さんを連れて歸らぬと百姓達に笑はれると思つてゐましたので、

『何んとかよい方法はありませんか。』と訊ねました。

『そんなに欲しいのなら辻取りをなさい。辻取りと云ふのは辻々に立つてゐて通る女の中で好きなのを凌つて來ることです。』と亭主は冗談半分に云ひました。

物草太郎はすつかりそれを本氣にして、

の墨川早速い清水寺の塀內へ行つて待つてゐました。

清水寺は大層お參りする人がありまして、その中にに幾百人と云ふ女も居りましたけれども、物草太郎の氣に入るやうな者は眼に入りません。その中に風が吹き出して寒くてなりませんので、宿へ歸らうかと思つてゐますと、向ふから一人のお供を連れた美しい女が來ました。太郎は一眼それを見ると、これこそ自分のお內儀さんに欲しい人だと思ひましたので、その女に近寄りますと、女は汚い太郎の姿を見て逃げてしまひました。

太郎は落膽して宿へ歸りましたけれども、その後たうとう女の家を探し當てゝ、自分の心を歌に詠み込んでお內儀さんになつて下さいと申しました。その女と云ふのは侍從の局と云ふ尊い方でしたが、太郎の汚い姿に似合はす心持のよいのに感じて、たうとうお內儀さんになることを承知いたしました。

それで局は太郎を七日の間毎日お湯に入れて眞黑一肌に附いてゐた垢を落し、雀の巢よりまだもぢや〳〵した汚い髮に手入れなどをして、着物を着せた所、驚くほどの立派な男になりました。そして何處となく氣高い樣は大納言樣とでも云ひたい位上品でした。

そして物草太郎は歌を詠むことが上手でしたから、それはきつと尊い方のお子さんに相違ないと思つて、そのことを天子樣に申上げました所、天子樣は大層珍らしがられて物草太郎を招んで種々と訊れました。然し太郎は、

『信濃の國の生れで自分は物草太郎と云ふ者です。』とより外は答へませんでした。

太郎はその折に一首の歌を天子樣に差上げましたので、天子樣は事の外太郎が氣に入つてしまひました。

太郎が歸つた後、天子樣は信濃の地頭をお招びになつて、物草太郎の父母や先祖のことを調べさせました所、太郎の先祖は天子樣のお血統をひいてゐる者で、二位の中將と云ふ人がふとした事か信濃へ流されてゐた時にお子さんがないので善光寺へお參りをして願をかけました所、この太郎が生れたのでした。その後二位の中將とも云はれた人もだん〳〵と落ぶれて、父母の亡くなつた後の物草太郎は、乞食も同じやうになつてゐたと云ふことが判りました。

それを知つて天子樣は大層お驚きになつてすぐ樣太郎を信濃の中將にしまして、甲斐、信濃の二國の主になさいました。

物草太郎は思はぬ出世をして信濃へ歸り立派な邸を造つて住むことになりました。

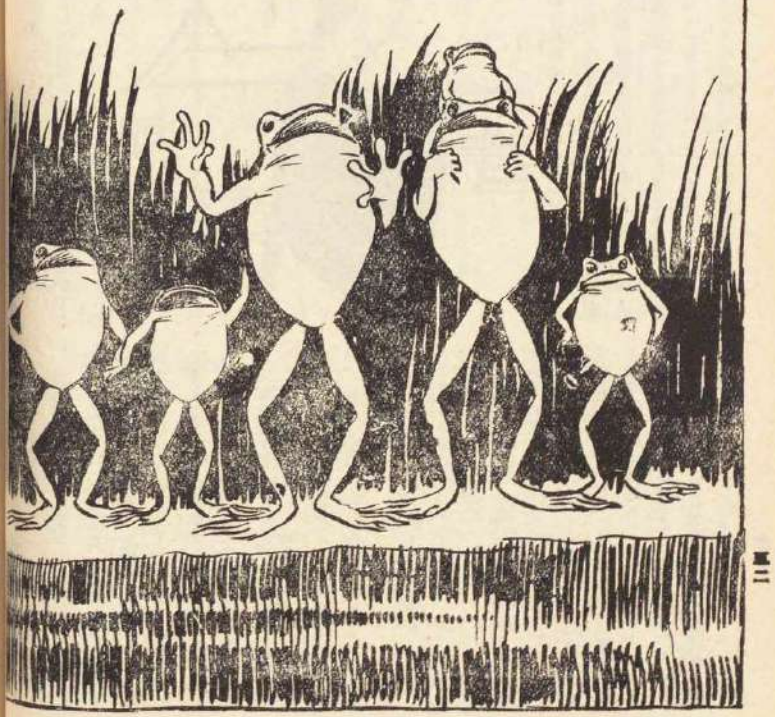
驚いたのは「なが、ふ」にやつた百姓達と地頭の左衞門尉とでした。殊に百姓達は怒られてどんなひどい目に遭ふことかとびく〳〵してゐました所、太郎は今迄お世話になつたお禮だと云つて、その百姓達や左衞門尉に月々澤山の贈り物をしました。（なほり）

蛙の親子

若山牧水

けろけろかろかろ
けろけろかろかろ
けろけろと鳴くは子蛙
かろかろは親蛙

親はかろかろ
子はけろけろ
けろけろかろかろ



けろけろかろかろ

親子いつしよに
けろけろかろかろ
大ぜいいつしよに
けろけろかろかろ

けろけろかろかろ
けろけろかろかろ
けろけろかろかろ
けろけろかろかろ

入選童話

とうかん屋藤兵衛

和田莊三郎

江戸幕府の盛な頃のことでありました。その頃、下總上總の國境には、柳澤の原といつて、横が三里餘、縦が十幾里もある廣い廣い原がありました。

この原は、幕府の馬放場であつて、野馬といつて小さな馬が、何萬頭となく放しでありました。そして年一回將軍家の、お狩鞍のお催しがあるばかりで、その外は、人一人ゐないで、萱などが茫々と生ひ繁つた、さびしい〳〵原でした。

したがつて、たゞ荒れはうだいになつてゐますので、一度も人の踏み入つた事のない藪だの、林だのが、到る所にあつて、狐や狸の棲むには、ほんたうによい所でした。中でも狐は、非常に多くて、年老いた古狐が、一族を率ゐて、人里を荒しまはることも度々あつたといひます。

また旅人などが、この原に掛かつた時などは、一晩中引まはされて、なやまされることもめづらしくありませんでした。

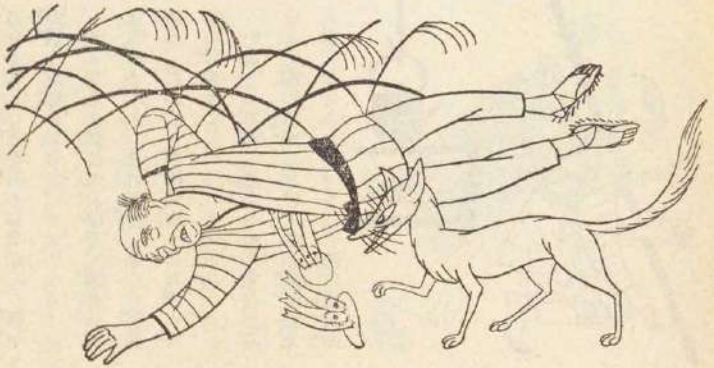
ところがこの惡戯な狐を捕つて、其の日の生計を立てゐる人がありました名は藤兵衛と言つて、この原の近くに一人ぼつちで、暮らしてゐるといふ、風變りな爺さんでありました。

この藤兵衛は見かけは至つて無器用で、取柄のなささうな人間でした。啞のやうに、默りやで、いつも山の中にばかり日を暮らして居りましたが、、狐捕りにかけては界隈きつての名人で、いくら利口な古狐でも、藤兵衛にかかつては、造作もなくつかまるといはれてゐました。だから誰言ふとなく、あの爺は、とうかんとりの名人だ、藤兵衛は、とうかん屋だ、とうかん屋藤兵衛だと言つて居りました。

だが、淺石の藤兵衛も、手におへない一匹の狐がありました。その狐といふのは、鐵守の裏山に棲んでゐる古狐で人を化かす位は何でもない、大きな狐でありました。

ところが、此度この狐をどうしても捕らねばならぬことになりました。それと言ふのは、その年の冬から春にかけて、毎晩村中の家で鶏を何ものかに取られました。それで、鶏といふ鶏は村に姿を見られないまでになつたのです。村の人々は何ものの惡戯だらうとしらべて見ますと、鐵守の裏山の狐だと分りましたから、サア大騒ぎで、村中總がかりで、退治にかゝりましたがたうとう捕れないのです。仕方がなくて、藤兵衛のところへ來て頼みました。

藤兵衛は斷わるわけにも行かないで仕方なく、



『一週間のうちに。』と、いつて引受けてしまつたのでした。

さて藤兵衛は、引受けた上は何とかして捕へたいものだと思つて、その方法について、その晩は眠らずに考へました。

あくる朝、暗いうちに起き出た藤兵衛は狐のゐる山へ出かけて行きました そして、十分に念を入れて見たすゑ、こゝぞといふ松の根本に割縄（狐を捕る仕掛け）を張りました。囮として大きな雄鶏を下げて置きました。

かうして夜にゐるのを待つて、狐のまはしにかゝりました。この狐をまはすと言ふのは、彼等を割縄におびき寄せる藤兵衛の謀なのであります。これが他人の眞似出來ない、得意の術でありました。

さて夜が、だんだん更けて行くにつれて、狐の鳴聲がして來ました。

『畜生きやがつた。』

藤兵衛は一人でうなづいてゐました。

藤兵衛は聲が近よつて來るのを待つて、醉漢の姿に早變りして、道ばたに仰向けに、ぶつ倒れました。

狐はやつて來ました。きよろ〳〵とあたりを見廻してゐましたが、ぶーんといゝ匂がするのでよく見ると、藤兵衛の懷から、鰯の目差がはみ出てゐました。

これを見つけた狐は、藤兵衛をすつかり馬鹿にしてしまつて懷中の目差を引出しに掛りました。この樣子を寢た振りをして見てゐた藤兵衛は、さも今目が覺めたといふ風をして起き上がると、あつちへひよろ〳〵こつちへひよろひよろと目差を落としながら、狐を引張つて歩きました。

かうなると狐は大喜びで、藤兵衛をはなれません。それを見て取つた藤兵衛は、だん〳〵割繩の近くにおびき寄せて行きました。

いよ〳〵割繩の近くへ來ますと、ぶーんと鶏の匂がしたのでさア狐はたまらなくなりました。そこで急に藤兵衛

を離れて、鶏をねらひにかゝりましたが、用心深い古狐のことですからすぐには飛びつかないでたゞその周圍を遠くまはりながら、樣子を見てゐるのでした。

暫らく樣子を覗つてゐた藤兵衛はもう大丈夫と見て取つたので家に歸りましたが狐がゐたけに藤兵衛には翌朝になるのが待遠でたまりませんでした。

夜が明けるのが待ち切れずに、割繩を見まはりに行きました。

然し藤兵衛の豫想を裏切つて、狐は掛つてゐませんでした。

落膽した藤兵衛は、家へ歸つて來て終日圍爐裡ばたで考へ込んでゐましたが、今夜こそはと夜になるのを待つてまた狐まはしに行きました。その夜藤兵衛は家へは歸らず、翌朝になつて歸

りましたが、矢張り何の獲物もありませんでした。

かういふ日が六日續きました。藤兵衛の顏は、寢ずの仕事にすつかり衰へて、やゝて見えるやうになりました。

六日目には流石の藤兵衛も、もうあきらめたと言ふ風に、日向ぼつこで居眠をしてゐました。しかし夕暮近くなつた時に、藤兵衛は急に起き上がつて、圍爐裡で何かぶん〳〵匂ふものを煮はじめましたが、煮てしまふと、それを竹皮包として出掛けました。そして、間もなく歸つて來ました。

その晩藤兵衛が一と寢入りした頃、

藤兵衛、藤兵衛。』

と戸をたゝいて起すものがあります。藤兵衛が默つて樣子を覗つてますと、

『藤兵衛、起きろ。』

とつづいて呼起しますので、

『へえ。只今あけます。』と藤兵衛が起きて行つて戸を開けると、立派なお侍が入つて來ました。そして藤兵衛に向つて、

『貴樣は近頃、原の鳥獸を捕つて荒すといふがほんたうか。自分は幕府の役人だが無斷に原へ立入る者があると云ふので來たのだ。』といひました。

『お侍さま、私はそんなことはいたしません。』

と藤兵衛は慄えながら答へました。

『捕らぬと言へば宥してつかはすが、さもなくばたゞは置かぬぞ。』

と立派な腰の刀を見せびらかしながら言ひました。藤兵衛はます〳〵驚いて、

『決していたしません。』といつて、侍を拜むやうにしてあやまりました。

『それなら宥す、以後必ずするなよ。』

と言ひすてゝ侍は行つてしまひました藤兵衛が雨戸を閉めやうとした時は、影も形もありませんでした。

――翌朝、藤兵衛が割繩の側へ行つて見ますと、尾の白い大きな古狐が、血を吐いて仰向に、跳ね飛ばされて死んでゐました。（をはり）

河童の復讐

水島爾保布

九州の島原半島から天草島へかけて、大そう河童がはびこつたことがありました。そのために命をとられる人々が日に何人といふ數で町の人も村の人もちやうど激しい流行病に襲はれたと同じやうな氣持ちでおちおちと仕事をする空もありませんでした。そこの殿樣の許へは毎日何通となく町の人から又村の人々からの訴へ狀が送り屆けられました。殿樣も、もはやうつちやつては置けないといふので、みづから大勢の家來をりつれて、河童退治に出向くことになりました。

川といふ川、池といふ池は、底の底まであさり盡されました。さうして打ち殺したり斬り殺したりした河童は何百何十とも知れぬ程の數でありました。殿樣も家來も、これでもう河童も根絶やしになつたらしいといふので一先河童退治の軍隊をまとめてお城へ引上ることになりました。

河童退治の隊中に八左衛門といふ侍がありました。すでに殿樣はお引上げになりましたが、八左衛門はその後かたづけのために一人殘つて居りました。

と、一人の百姓が八左衛門の許へ、息せき切つて馳けて來ました。そして、

「旦那樣、河童が居ります。まだ一疋討ち洩らされて淺つてゐる奴が居ります……。蓮池の緣でぐつすりと寢込んでゐるらしい樣子で御座ります。」と訴へたのであります。

八左衛門はそれをきくと刀をおつとり、その蓮池の緣に走つて行きました。百姓の言葉通り、大きな河童が一疋、前後も知らず草叢の中でさもいゝ心地さうに寢て居りました。

八左衛門はその側に立寄りざまいきなり拔打ちにしました。强い手應へがしたかと思ふとたんに、河童の姿はふツと消えて無くなつて了ひました。そして、同時にどぶんといふ——大きな水音がして、何ものか、池の中へ跳び込んだらしい氣配がしました。八左衛門は餘りの不思議さに呆れながらも、手にした刀を見ると、切先かけて生々しい血汐がついて居りましたので、

「今に死體になつて浮び上るだらう。」

とさう呟きながら、油斷なく池の面を見つめて居りました。ものゝ一時餘りも待つて居りましたが、池は赤くも黑くもならずまた蛙子一疋跳ね返へるほどの音もしませんでした。とかうするうちに太陽は傾きあたりはだんだんと夕暮の色につゝまれて來ました。

「仕損じたか。」

と、八左衛門は自分で自分を嘲るやうな薄笑を洩らしました。そして一先その場を引上げました。

それから三年たちました。秋もすゑつ方、山の端もやうやく色づかうといふ頃でありました。ある日のこと八左衛門は一人緣近く出て庭の垣根に亂れ咲いた菊の花を眺めて居りますと、その庭の片隅の草叢の中から異樣の動物の姿が

むく〳〵とまるで影のやうに現はれました。
『八左衛門、お前はこの私を覺えてゐるか。』
とその怪しの影はいひかけました。
見るとそれは大な河童でありました。ちやうど繪にかいた烏天狗のやうに太い尖つた嘴をして水搔のついた手には、三尺ばかりの柄に梅の核のやうな形をした太い戟先をつけた武器をもつて居りました。その時八左衛門の頭の中には、もうほとんど忘れたも同樣になつてゐた三年以前の河童退治の日の出來事が、ありありと映つて來ました。
『おゝ、お前はいつぞやの河童だな。』

と、八左衛門は少しも騷ぐ氣色もなくかういひました。
『さうだ、今からちやうど三年前、お前の爲めにひどい手疵を負はされた河童だ。その時お前に負はされた疵がやうやく癒つたのでその復讐に來たのだ。』

と、その河童は八左衛門の前へ突立つて高々とその戟を振りかざしました。
『さうか、それは能く來た。』
と、八左衛門はさういひながらも、あの時自分が河童を斬つた處と、今自分の居るところとは道のりで四十八里もありこの間には浪高い海一つ隔て尙かなりに險しい山を二つも越

えなければならないことに氣がつきました。
『お前の住んでゐるところから此處までは隨分道程もある。さうして海もあれば山もある。お前はそこを何うしてやつて來た。』
と、八左衛門はともかくもその不思議から先へ解かなければならないと思ひました。
『そんなことは私にとつては何でもない事だ。私は自由に形を隱すことが出來る。どんな隙間へでもくぐり込むことが出來る。』
と、河童は事もなげに云ひました。
『それ程自由自在な通力をもつてゐるなら、わざわざ名告りかけるまでもないぢやないか。何故いつぞや、私がお前に切りつけたやうに、不意に襲ひかゝつては來ないのだ。』
『人間たちと私たちとは考へが違ふ。……とにかくお前と私と、こゝで勝負をしよう。』
と、河童は八左衛門をせき立てました。
八左衛門も直に身支度をして庭へ下りました。
八左衛門のお母さんや、奥さんは、誰も客も來ないのに座敷で切と話し聲がするので、妙に思つてそつと襖の蔭から覗いて見ましたが、お母さんにも奥さんにも河童の姿や聲は全く見えもせず聞えもしませんでした。そして只八左衛門が庭に向つて一人言をいつてゐる丈なので何うしたことだらうと半ば呆れて居りますと、そのうちに刀を提げて庭へ飛下り、さうして鋭い氣合と一しよにすらりとそれを引抜きました。からりと晴れた空の下に、一ぱいに漲つた日光に長い刀をきらきら閃めかせながら、對手もなしに一生懸命請けつ開きつ切り結んで居るのでありました。
お母さんと、奥さんとは、八左衛門はてつきり氣違ひになつたのだと思ひました。で、直ぐと近くの親類や日頃往來してゐる傍輩などの許へ使ひを出して、取押へて貰はうとしました。人々は直に八左衛門の家へ馳けつけて來ました。それ等の人達にも河童の姿は少しも見えないのでした。しかし八左衛門の樣子は成程狂人に似てゐるとはいふものの、その刀の捌き方や身構へのし方などは決して心の亂れた者のやうにも受け取れないので、人々は無闇と手を下すことも出來ず、お互に訝りながら默つて見てゐるより外はありませんでした。

とかうするうちに、河童も、八左衛門もすつかり草臥れてしまひました。

『刀を引かないか、この上いくら戯つてもお互に草臥れる丈だ。今日はこれで止めて又明日同じ時刻に更めて勝負を決めやうぢやないか。』と、河童がいひました。

『さうしよう』と、八左衛門もさういつて刀を收めました。

見てゐた人々は口々にその仔細を訊ねたので、八左衛門は、三年以前河童退治の時の事から今日の始末を詳しく話しました。

『ほうそれは珍らし事だ　前代未聞のことだ。そしてわざわざ名告をかけて仇をかへしに來たとは、化物ながら中中殊勝な奴だ。』と、人々はとりどりにそんな批評をしました。そして直とその事を殿樣にまでお話し申上げました。

『それは不思議な事だ。明日は直々にそれを見物しよう。』

と、殿樣はさう仰せ出されました。そして大勢の家來を召し連れて八左衛門の家へとお出向きになりました。

『たとへ河童の姿は眼に見えなくとも、そのものがやつて來て、八左衛門と戰ひをはじめたならば、みなの者は嚴重に、その周圍をおつ取り卷いてしまへ。』

と、殿樣は家來達に申しつけました。家來達はめい〳〵刀の下緒をとつて襷をかけ、おのおの刄を拔きつれて、今か今かと待つて居りました。

やがてして約束の時刻になりましたが、どうしたものか河童の姿は八左衛門の眼にも見ることは出來ませんでした。

『いつ迄待つてゐても來た樣子はないぢやないか。八左衛門はい〻加減なことをいつて、主人の私迄もだまさうとしたに違ひない何といふ不屈な男だ。』と、殿樣はすつかり御機嫌を惡くしてしまひました。

して、プンプン怒りながらお歸りになりました。

するとその夜も大分更けてから、ぐつすりと寢込んだ八左衛門の枕許へ、河童はその姿を現はしました。

『晝間はお前の主人が大勢の家來をつれ來て勝負の樣を見やうといふことではあつたが、何うもあ〻多數の人間が居ると私は氣臆れがしていけない。だから私は姿を見せずにしまつたのだ。ところがそれがために、お前は主人にすつかり信用を無くしてしまつた。多分お前は主人から永の暇になるだらう。お前には誠に氣の毒だが、私には何うやら人間達がお互に保ちあつてゐる掟だの智慧だのといふものが判つた。そしてもう私はお前に恨みを晴らさうといふ考へも無くなつた。この儘自分は自分の領分へ歸らうと思ふので、今夜はその事をことわりに來たのだ。』と、いひました。

『お前のいふ通り私は御主人から偽り者と思はれてしまつた。誠に殘念だが、それを云ひとく事は出來ない。私は主人からお暇が出ることを覺悟してゐる。それはとにかく、お前はさうやつて、私の寢間へまで忍んで來るやうな通力をもつてゐながら、何故私がお前を斬つた時のやうに、不意打ちをして來ないのだ。』

と、八左衛門は昨日も云つたことを今夜また更めて問ひかけました。

『それは人間のお前と私とは、自然考へが違ふからだ。』と、河童は昨日と同じやうに事もなげにさういつて、その儘姿を消してしまひました。

八左衛門は河童のいつた通り、殿樣からは偽りものとされて、永のお暇になりました。しかし、八左衛門が河童を對手に切り結んだ時、知らず知らずの間に覺えた劍術の妙手は、一旦殿樣から受けた不信用を、すつかり取り返しても尙餘りある程立派なものでありました。八左衛門は劍術の名人として世間の誰からも敬はれるやうになりました。（ゑはり）

水滸傳（第六回）

宮島資夫

虎退治の武松

武行者武松の事はまた、景陽岡の武松とも云ひます。これはこの人がまだ故郷の清河縣にゐた頃、ある日一すした事の間違ひから、刑事のやうな男を一つうんと擲つたら、眼を廻して倒れてしまひました。武松はこれを見て、その男はきつと死んだのだらうと思つて、故郷を逃げ出して、小旋風柴進といふ豪傑の所に來て一年ほど厄介になつてゐました。

その後風の便りに聞くと、武松に擲られた男は、たゞ一時氣絕したゞけであつて、間もなく生き返つて達者に暮してゐると云ふことを聞いたものです

から、柴進や柴進の家で會つた宋江と別れをつけて、故郷に歸つて行く途中で、或日景陽岡といふ山の麓に着きました。武松は麓の酒屋でお酒を澤山飲んでゐる中に、秋の日は暮れてしまつて、往來は暗く、山路は殊に寂しくなりましたが、元來豪傑の武松はそんな事には平氣ですから、お金を拂つて出ようとすると、

『もし／＼お客樣、あなたはどちらへいらつしやるのです』と酒屋の主人が訊きました。

『私か、私はこれからこの山を越えて清河縣へ歸らうと思つてゐるのだ』と武松が答へますと、

『まあそこにあるお上からの廻狀を御覽なさい』と酒屋の主人が壁のとこを指しました。武松は何事が書いてあるのだらうと思つて、壁の上を見ますと——近頃この景陽岡には毎日大虎が現はれて、人を喰ひ殺すこと數が知れない。官廳でも獵師に命じて殺させようとしてゐるが、今以て捕へることが出來ないでゐる。故に、當分の間この山を通る者は、明け方から午後三時までの間に、多勢して隊を組んで行かなければいけない。その時間内でも一人で行く事と、夜になつてこの山を通る事は許さない。各人皆な注意をしなさい。——と書いてありました。

然し武松は元來勇猛な上に、その時は可なりお酒に醉つてもゐたものですから、

『何だ大虎の一疋位、この棒さへあれば立所に打殺して見せる』と云つて、『ふゝん』と笑ひながら酒店を出てしまひました。酒屋の主人は呆氣にとられて『恐しい亂暴な命知らずの人もあればあるものだ』と獨言を云ふばかりでした。

武松は酒屋を出ると、酒に醉つた顏を夜風に吹かせて氣持よく歩いてゐましたが、やがて山路にさしかゝつてくると、澤山飲んだ酒の醉が一時にかつと出て來て、だん／＼眠くなつて來ました。—どこか工合の好いとこで手足を伸してぐつすりと一眠りしたい——そんな事を考へながら武松はふら／＼と登つて來ますと、山の中腹の所に大きな青石がありました。

『これは好いものを見つけた』と心に思つて、武松はその上にごろりと横になると、疲れた手足をうんと伸して、眼をつぶりました。

するとその時、後の林で、ごーつと凄い響きがしたと思ふと、石を飛ばし砂を走らせて、一疋の大虎が出ひ吼えて走つて來ました。漸く眠りかけた武松もこれを見ると棒を取つて立上り、石を小楯にして構へてゐますと、大虎はすぐに『ウォーッ』と一聲吼ると共に武松を目かけて飛びついて來ました。普通の人ならばその勢ひの物凄さだけにでも目を廻してしまふのですが、武松はすぐにひらりと身をかはして、虎の後ろに出てしまひました。

虎もまた身を回すと同時に爪を立て腰をひねつて、再び飛びかゝつて來ましたが、武松は今度も巧くよけて傍に飛びのきました。

虎は二度までも獲物に身を避けられたので、怒り狂つて山も崩れる許りの聲を上げると共に、又も烈しく飛びついて來ましたが、武松は右の方に飛び退くと、棒を眞向にかざして暗の中から虎の足をぢつと見透しました。虎は最初の一擊に全力を盡してくるものなのですが、三度までもそれをかはされたので、少し勢ひがひるんで來たやうでありました。

けれども、この虎は世にも稀な大虎だつたものですから、少時ぢつと睨み合つてゐましたが、更にまた吠え吼つて飛びかゝらうとしたとこを、『えい

つ」と武松は力をこめてふり冠つてゐた棒を下しました。けれども今度は、虎の方で巧みに身を避けたものですから、棒は空に流れて、傍の松の木に當つたと思ふと、棒も折れ松も裂けて、ばたりとそこに倒れました。

折れ残つた棒を手にした武松は、空を打たされた口惜しさに、眼を怒らして虎を睨みつけますと、虎もまた怒つて飛びかゝつて來ましたが、武松はまたひらりと身をかはしましたが、面倒と思つたものか、短くなつた棒を投げすてゐると、いきなり大手を開けて虎に飛びかゝつて行きました。そして虎の兩耳をしつかりと握りしめて、力にまかせて押しつけて行きました。虎は大きな聲で唸りながら、どうかしてその手を振り放さうと身をもがきましたが大力の武松に壓へられてゐるものですから、首を上げる事も出來ないで、苦しんでゐる中に、だん〳〵疲れて來たやうでした。

この隙を見すました武松は兩手で耳を壓へながら、右の脚をあげて、虎の眉間を力に任せて續けざまに蹴りました。すると虎は苦しさうに呻きながら前足でしきりと大地を搔いてもがいたので、そこには忽ち一つの穴が出來てしまつたのです。

武松はこれを見ると、いきなり虎の口をその穴に押し込んで、更に脚をあげて十度許り蹴つたものですから、虎は遂に眼を吃して、ぐんなりとしてしまひました。武松はこの時やうやく右の手を放して、右の手で虎の頭を壓へたまゝ、鐵のやうな拳を固めて眉間の所を二三十續け打ちに打ちますと、虎はまた苦みもがきましたが、遂に眼や耳から血を流して、ばつたりと息が絶えてしまひました。

武松は虎を打殺すと、再びさつきの藪に下りて、村の人達にこの事を話しました。村人の喜んだことは云ふまでもありません。が、その時以來、武松の事を、景陽岡の武松とか、虎の武松とか云つて、素手で虎を打殺した武松をほめる言葉となつたのです。

武松は景陽岡で虎を退治て、名譽を世間に驅せましたが、その後兄さんが惡者の爲に殺されたので、仇の者を三人まで切り殺してしまつた爲に、遂に罪人となつて、七斤半も重さのある頸枷をはめられて、孟洲といふ所へ流される事になりました。その時の武松にも、二人の役人がついてゐましたが、二人とも武松が義勇に秀でた豪傑である事を知つてゐたものですから、大變に尊敬して、暑い時には頸枷をとり、夜は夜で樂々と寢せて、大切にいたはつて送つて來ました。

武松もまた義の固い人ですから、油斷を見すまして逃るやうな事もなく、三人は大變仲よく旅をつゞけて來ました。やがてだん〳〵孟洲に近づいて來た頃は七月になつたものですから、日中の旅は中々暑さが烈しくなりました。三人はそれでもほつ〳〵と山路を歩いて來て、峠の上で涼んでゐると、向ふの坂の下に小さな村落が見えました。そこで武松が、

『どうだ、あの村へ早く行つて酒でも飲んで休まうぢやないか』と云ひますと、二人の役人も、

『それが好い』とすぐに賛成して、三人は山を下つて來ました。そこには僅か十軒ばかりの田舍家が、谷川の流れにそつて並んでゐて、如何にも涼しさうに見えるので、三人は大變に喜んで行きますと、一人の樵夫に逢ひました。すると武松はその樵夫に、

『この邊は何といふ所ですか』と尋ねますと、

『こゝは十字坡といふところだ』と云つて樵夫はさつさと通り過ぎてしまひました。『はゝあ十字坡か。』と武松は何か考へたやうでありましたが、それつきり何も云はずに歩いて行きました。

村の端れの所に來た時、大きな樹の下に綺麗な酒店があるのを三人は見つけたので、中へ入つて行きますと、店の奥の方から、田舍には珍しい綺麗な内儀さんが出て來て、

『これはよくいらつしやいました』と云つて、愛想よく出迎へました。武松はすぐに、

『酒と肉を澤山持つて來てくれ』とあつらへますと、

『肉饅頭はいかゞですか』と内儀さんが尋ねました。

『さうだ肉饅頭も好いから二三十持つて來てくれ』と武松が云ひましたので、

『そんなに澤山ですか』と内儀さんは笑ひながら奥の方へ入つて行きました。

やがて酒と肉と肉饅頭とを大きなお盆にのせて持つて來た時、武松にいきなりその饅頭を手にとつて二つに割ると『此の中の肉は、人間の肉ぢやないか』と尋ねました。内儀さんはにこ〳〵笑つて、

『ご笑談を仰有つてはいけません。今時人間の肉なんかを饅頭にする人があるものですか。それはみんな牛の肉です』と云ひました。

『然し私は大樹林十字坡と云ふとこの人は、人を殺して肉饅頭を作ると云ふ事を聞いてゐた。これをごらん、この中にも人の毛が入つてゐる。それで私は尋ねたのだ』と武松が云ひますと、

『そんな事があるものですか、女一人で人殺しなんか出來はしません』と云つていやな眼をして女は笑ひました。そして『奥庭の涼しい所で召上つたら如何です。夜になつたらお泊りになつても差支へございません』と云ひましたので、武松は心に、こいつはきつと惡い奴に違ひないと思ひましたから、

『お前のとこの酒は薄くつていけないが、もつと好い酒はないか』と尋ねました。

『はい、まだ好いのがございますが、夏はどうも濁つていけないので差上げませんでした』

『いやその濁るのが好いのだ。すぐとそれを持つて來てくれ』と云ひますと女は悅んで、すぐ濁つた酒を一壺持つて來ました。

『この酒は冷いのより暖いのが甘いのだから、これを一つ溫めてくれ』とまた武松が云ひました。所がこれは武松が考へた通り、痺れ藥を入れた酒でしたから、溫めて飲むと藥の利き方が早いので、女は一層喜んで、すぐと溫めて持つて來ました。二人の役人はそんな事は知らないものですから、

『いやこれはほんとに甘い酒だ』と云つて喜んで飲みました。然し武松は、

『私はもう少し解が金ひたい』と云つて、その內儀さんが向ふへ行つた中に盃の酒をそつとそばで明けてしまひました。さうして內儀さんが肉を持つて出て來た時に、わざと舌を打つて

『この酒はひどく强いので、すぐと醉つてくる』と云ひました。これを聞くと內儀さんは、

『はゝ、馬鹿な人達だ、お前さん達はもう倒れる』と手を打つて云ひますと、二人の役人は身體が痺れてばたりと倒れてしまひました。武松もこの有樣を見て、自分も痺れてしまつたやうにばたりと倒れて眼をつぶつてしまひました。內儀さんは面白さうに、

『あはゝゝ』と笑つて『お前さん達の身體が藏で出來てゐたつてこれを飲んではたまるまい』と云ひながら奥の方から二人の若い者をつれて來て、役人共をまづ裏へ運ばせてしまひました。女はそこいらにあつた風呂敷包をいぢり廻して、『今日は何といふ上等の獲物が引つかゝつて來たのだらう』と云つて喜んでゐました。二人の男はまた出て來て、今度は武松をかつぎ上げようとしましたが、武松がそつと身體にうんと力を入れたので、どうしても持ち上る事が出來ないでまごゝしてゐました。すると女はそれを見てもどかしさうに、『何だ、お前さん達は二人もかかつて、その人をつかまへる事が出來ないのか』と云ひながら、武松のそばによつて輕々と抱き起さうとしました。

この時武松は急に兩手を伸して、女を胸の上に抱き上げて、足を開いて女をぐつと胴じめにしてしまひました。虎をも打殺すほど力のある武松に胴をしめられたので、女は苦しさうに眼を白黑させながら、

『助けてくれえ』と叫び出しました。然し二人の男も武松に近寄れば、女を一緊めに殺してしまひさうな樣子なので、手を出すことも出來ないでゐます

と、女は益々若しさうに、

『豪傑、どうかお許し下さい、全く私の間違ひでしたから、本當に許して下さい』と死にさうな聲を張り上げて叫ぶのでした。すると

その時、また表ての方から、

『豪傑、私からお詫しますから、どうかその女をお助け下さい』と云ひながら入つてくる人がありましたので、武松は急にはね起きてその女を右の足の下にしつかりと踏みつけて拳を握つて睨みつけますと、そこには色の黑い體の少しある、三十四五の男が立つてゐましたが、武松の前に叮嚀にお辭儀をして、

『何卒私に豪傑のお名前を聞かして下さい』と云ひました。武松は、

『私は先頃まで陽谷縣に住んでゐた武松と云ふものだ』と云ひますと、

『それでは景陽岡で虎を退治た武松大人ではありませんか』とその男が尋ねました。

『如何にもさうだ』と武松が云つたので、それを聞くと、男は大地にひれ伏して、

『長い間、あなたの御高名は伺つて居りましたが、今日お目にかゝる事が出來てこんな嬉い事はありません。』と幾度かお辭儀をしました。

『それでこの女はお前の女房か』と武松が尋ねました。

『左樣です。けれども何分女の事で人を見る事が出來ないものですから、あなたに對してこんな失禮な事をして何

とも申譯ありません。然し私の眞心はもうお判りの事と思ひますから宥くばどうかお許し下さいまし』と云つた男の樣子が餘り眞劍なので、武松も女を放して、

『私もさつきからお前さん方の樣子を見るに、普通の人ではないやうだ。兎に角名乘つて聞かせなさい』と云ひました。男はすぐと女に向つて、

『早くお詫びをしろ』と云ひますと、女も大地に手をついて、

『どうも申譯ない失禮を致しました。どうかお許し下さい』と謝罪りました。

『こゝではともかくお詫が出來ませんから、何卒座敷の方へお出で下さい』と云つて、男が先に立つて武松を奥へ案内しました。そして座が定ると、

『私の姓は張、名は青と云ふもので、この近くの寺で菜園を預つて居りましたが、ある時寺の僧と喧嘩をしたので寺中を驅き鰐つて、その後この大梁山泊に來、强盜をしてをりました』とその男は話し出しました。『ところがある日、一人の老人に會ひまして、例の通り剝ぎ取らうとしますと、老人中々の武藝者でして、遂に私が負けましたが、此の老人と云ふのも若い時から强盜をしてゐた人で、その時私の手の中の早いのを見て、自分の家へ連れ歸つて、私に武藝の奥義をすつかり傳へ、その上自分の娘をくれましたのがこの女房です』とその内儀さんの方を指しました。

『ところが私は町に住んでゐることはどうも嫌ひなので、こゝに來てごらんの通りの酒店を開いて、金のありさうな人と見ると痺れ藥で殺しておいて、金は奪ひ、肉は饅頭として賣つて歩いてをりました。その中に色々な豪傑と交りを結ぶことが出來ましたが、皆なは私の事を、菜園子張青と云ひますし、私の家内も父から武藝を教はつて中々强いものですから母夜叉孫二娘と呼んでをります。先程この女が餘り大聲で助けを呼んでをりますので、馳けつけて見るとこの有樣で、計らずも豪傑とお目にかゝる事が出來たのは、此上もない有難いことです』と長々と物語りました。

武松は張青の話を聞いてゐましたがその話から察して、盜賊をしてゐても、やはり何か知ら考へてゐるのに免じて、罪をゆるして快く一緒にお酒を飲みました。

その中に武松は二人の役人のことを思ひ出して、

『どうかあの二人を助けてやつてくれ』と頼みました。

『いやあなたはそんな餘計な事をなさつて、こゝから孟洲とか へ行かれゝば、それこそまたどんな苦い目に會ふか解りません。夫よりもあんな役人なんか殺してしつて、少時私の家で遊んだ上、二龍山にでも上つて豪傑魯智深と一緒に愉快にお暮しなさつたら好いではありませんかと』張青が云ひますと、

『いや私はさうは思はない』と武松は頭を振つて、

『私は以前から上に在つて權力を握つて威張る奴が嫌いで、下々で苦んでゐる人を氣の毒に思つてゐる。ましてあの二人の役人は路々私を大變大切にしてくれた。その人を殺したら私は第一天に對して相濟まない。それだからどうか許してやつて下さい』と云ひましたので、張青は、

『あなたの云はれる事は本當に義士の心です』

と感心して、二人の役人を引き出して來て毒を消す藥を與へますと二人は夢から醒たやうに驚いて、

『あゝあゝどうして私はあの一杯の酒でこんなに醉つて寢てしまつたのだらう』

と云つたので、武松や張青は、顔を見合せて思はず笑ひ出してしまひました。

武松はそれから二三日張青のとこに泊つてゐて、遂に張青と義兄弟の約束を結びました。

そして、やがてまた孟洲を望んで出發して行きました。

孟洲の配處へついてからも武松は大變武勇を現して、金眼彪施恩といふ人を助け、薄門神といふ惡者を懲しましたが、それがために、そこの張蒙といふ上役に大變苦しめられて、遂にその男のため殺されさうになりましたが、却つて張蒙をはじめ多くの役人を切殺して逃げ出してしまひました。

さうして再び張青の所に歸つて來てから、最初張青のいつたやうに、二龍山に上つて魯智深や楊者の仲間となつて、後に梁山泊に入つてからも、武行者武松の名は、多くの役人共に虎よりも恐ろしく思はれるほど澤山の武勇を現しました。

狐の裁判（つゞき）

小島政二郎

『なるほど、そんなことがあつたつけ』とノベル大王は、マルチン猿の女房の言葉で、古い〳〵ライネッケの手柄――お百姓と蛇との爭ひを裁いた手柄を思ひ出しました。

『お思ひ出しになりましたか。なんと感心な働きではございませんか。――それにひきかへて、狼のイセグリムや熊のブラウンの不忠と云つたらお話になりません』

かう云つて、女房は今度は慾深だと云つて二人の惡口を並べたてました。

それを聞いてゐるうちに、途中で、大王は

『よし。では、特別の計らひで、もう一度ライネッケの云ひ譯を聞かう。たゞし、永くは許さんぞ』と言葉をはさみました。

ライネッケは大よろこびで、マルチン猿の女房につれられてはひつて來ると、すぐ『申しあげます。合財袋に兎のランプの生首を入れたのは私ではございません。私はたしかに二つの寶ものを入れたのに相違ございません。それが證據には、入れたものをちやんと覺えてをります。大王さまには魔法の指輪、王冠さまには櫛と鏡、その鏡のうちには、髯のない若い美しい一人の男が手に金の林檎を持つて、三人のそれぞれ美しい女のまへに立つてゐる繪が飾りとしてはられてゐました。途中で袋をあけて見てほしくなつて、羊のベリンがそれを盜んだのに違ひございません。さうして私のせゐにしようと思つて、兎のランプ君の生首なんかを入れておいたのでせう。ベリンと一しよに合財袋を肩にかついで、これを大王さまの御手許へ屆けたら、きつと御褒美が出るだらうと喜んで山をおりて行つたランプ君のうしろ姿がまだ眼に見えるやうな氣がいたします。かはいさうなのはランプ君です。アイゴー、アイゴオ』と、ライネッケは口から出まかせの嘘を並べたてゝ、さも〳〵悲しさうにオイ〳〵泣いて見せました。すると、そばからマルチン猿の女房が

『大王さま、私も、ライネッケの家で、只今ライネッケが申しあげた三つの寶ものを見たことがございます。ですから、ライネッケの申しあげたことは嘘ではないと存じます。第一、ライネッケの家は父の代から大の忠義者でございます。大王さまはお忘れで入らつしやいますか。まだお父さまの御代に、お父さまが大わづらひをなさつたことがございました。その時、皆のお醫者たちが、お命があぶないと申しあげた時にライネッケの父一人はそんなことがあるものかと申して、お父さまに、生まれてちやうど七年七ヶ月と七日たつ狼の肉をおあがり遊ばせと申しあげました。で、そのとほりなさつたところが、たちまち病氣がおなほりになつて、それから暫くの間、神さま

がお授け下さつたお命を生きて入らつしやいました。これなどは、このライネッケの功ではございませんが、それでも父の功として、今度のやうな時に、子のライネッケの罪をお許しになつてもよくはないかと恐れながら思ふのでございます』と口達者に述べたてました。

聞いてゐるうちに、大王もお妃も、多くの獸たちも、

『成程な』と思つて來ました。で、誰一人として『許してはいけない』と云ふものはありませんでした。その樣子を見てとつたイセグリムやブラウンは、氣が氣ではありませんでした。せつかく死刑にするときまつたこのいたづら者を、こゝで一度ならず二度までも逃してたまるものかと思つて

『いや、親の功と子の罪とは別物だ。一しよにしてはいけない。ところで、大王さま申しあげたいことがございます。ライネッケは、また新しく罪をおかしました。今朝のことでございました。わたくしの家内が喉が乾いたので水をのまうと思つて、井戸をのぞくと、ライネッケが水の中へ落ち込んでをりました。家内の姿を見ると、「オーイ、助けてくれ」と聲をかけました。見ると、この寒いのに水につかりながら、やつと釣瓶につかまつてブル〳〵ふるへてゐました。で、家内もかはいさうに思つて、「待つて入らつしやいよ、今助けてあげますから」と云つたものの、女の力ではなか〳〵釣瓶をひきあげることが出來ませんでした。すると、下から「奥さん、あなたの目のふへにもう一つの方の釣瓶がありますね。それへ乘つて下さい。さうすれば、あなた

の重みで私のつかまつてゐる方の釣瓶が上へあがります。一たん上つたうへで、私から男の力で奥さんをひきあげることが出來るから」と云ひました。で、家内もその氣になつて、云はれたとほりに一方の釣瓶に乘ると、たとひ女でも狼です、狐とは目方が違ひます、こつちはスル〳〵とさがる、向うはキリ〳〵とあがる、途中ですれちがつてからは、こつちが自分が重いからたまりません、スル〳〵ボチャンと激しい勢ひで落ち込んで、いやといふほど水をかぶりました。ところで上へあがつたライネッケはどうしたかと云ふのに、家内をひきあげてくれるどころか、井戸側から下をのぞき込んで、「や、奥さん、どうも有り難う。冬の眞最中水風呂にはひるのもまたいゝものでせう。そのうち、凍えて死ぬるでせうよ。御機嫌よう。さやうなら」と赤い舌を出してさんざからかつたあとで、ブイとどこへか行つてしまひました。しばらくたつてから、家内の泣き聲を聞きつけて、私が行つてやうやつと引きあげた始末でございます』

『そればかりではございません。そのあとで、家内が體を乾かしに日のあたつてゐる沼の近くへ行きますと、ライネッケも同じやうにそこへ來てゐて、沼の水へ尾をひたしてゐました。で、家内が朝のことをなじると、「いや、これからお宅へお詫びに行かうと思つて、土產の魚を釣つてゐるところです」と云ひました。家内が「へゝ、さうして尻尾を水につけてゐると、魚がつれますか」とたづねると、「つれるどころですか。すばらしく釣れます。つりはこれに限ります。ものは試しです、あなたもやつて

ごらんなさい」と云はれて、家内もまねをして冷たい水へ我慢して尾をつけました。すると、ライネツケは、中途で「急な用事が出來たから」と云つて、その場を去りました。家内は馬鹿正直にいつまでも尾をひたしてゐたものですから、とうとう沼の水と一しよに凍りついて、尾をとらうとするとヒリ〳〵と痛く、とうとう大怪我をしてかへつて來ました。――ライネツケは前の罪にまたこんな新らしい罪をかさねました。前どほり、死刑になるのがあたりまへだと思ひます」

このイセグリムの訴へを聞いて、多くの獸たちは　またライネツケを憎んでザワザワさわぎ立ちました。しかし、ライネツケは一向平氣な顏をして

『大王さま、只今イセグリムの申した話をお聞きになつて、私がわるいと思召しますか、それともイセグリムの細君が馬鹿だからそんな目にあふので、私のせゐではないと思召しますか。それはまあどちらにしても、狼と私との間の私事でございますが、こゝに私事でない大へん事があるのでございます。それは何かと申すと……』なんとずるいライネツケではありませんか。話を巧みに脇へそらしてしまひました。『それは何かと申しますと、イセグリムが大王さまに對して不忠を働いたといふことでございます。さだめし大王さまもまだ覺えて入らつしやることゝ存じますが、いつぞや大仕掛けで狩りを遊ばしたことがございました。あの時、イセグリムは大猪を一匹狩り出して射とめました。それをどう分けるかと見てをりますと、さつさと自分で半分とつて、あとの殘りを二つにわつて、一つを大王に、一つをお妃にさゝげました。私には首をくれたゞけでした。家來としてこんなずるい分け方がございませうか。不忠と申すよりほかはないと存じます。ところが、同じその狩りの日に、私も大きな獲物がございました。その時、私はまづ獲物の半分を大王に、あとの半分をお妃に、味のよい肝をみんな王子さま方に奉りました。せめて自分は頭でも食べたかつたのですが、前に頭をもらつてゐるお禮に、頭はイセグリムにやつてしまひました。さうすれば、あとに私のたべるものとしては、四本の足が殘つてゐるだけでした。かういふ分け方こそ、君に忠義、友達に親切と云ふべきだらうと恐れながら私は思ふのでございます」

かう云つて、お喋り上手なのにまかせて、獸といへばみんな覺えがわるくつて、ぎ去つたことなんかてんで覺えてゐるものゝないのをいゝことにして、いゝ加減な作り事をこしらへあげて、さもまことしやかに述べたてました。これを聞いた多くの獸たちは

『そんなことがあつたつけかな』と思ひ、『どうも思ひ出せないな』と考へ、『しかし、ものおぼえのいゝライネツケの云ふことだからほんたうだらう。ほんたうとすれば、いかにもイセグリムの仕打ちはよくない。ライネツケの仕打ちの方が、君に忠義、友達に親切だ』と、感心して聞いてゐました。

しかし、當のイセグリムはだまつて聞いてゐるわけには行きませんでした。そんなまねをした覺えは毛頭ないのですから、一こゑ『ウォー』と高らかに啼いて、みんなの注意を自分にあつめてから

『嘘をつけ』と、どなりました。しかし、口の不調法なイセグリムは、そのあとをどう喋つていゝのか分りませんでした。で、たゞブツキラボウに、『皆さん、ライネツケの云つたことはあれはみんな嘘です。嘘です、大嘘です』と云つたゞけで、もうそれつきり云ふことがなくなつてしまひました。これだけでは、なぜ嘘なのかそのわけが分

らないので、多くの獸たちは何も云はずにだまつてゐました。それを見てライネッケは、得意になつて『何が嘘なものか。みんな知つてゐることだ』と悠々しげに云ひました。

『嘘だ。大嘘だ』

『嘘なものか。大王さまにおれは嘘を申しあげた覺えはない。それでも嘘だと云ふのなら決闘をしよう。決闘をしてどつちが本當か嘘かをきめよう』

さあ、このライネッケの言葉には、大王をはじめ一同のものが驚きました、同時にその勇氣のほどに感服しました。喜んだのはイセグリムでした。

『よォし。その場になつて逃げかくれするなよ。――大王さま。どうぞ二人の決闘をお許し下さい』

で、いろ〳〵支度もいることだからといふので、決闘はあしたの朝といふことになりました。ライネッケは、みんなが自分の勇氣に感服してゐるのを見て得意になつて威張つて、マルチン猿の女房や甥のグリンバート（穴熊）に供をされて、メバタキス山へかへつて行きました。かへりつくとすぐ、マルチンの女房は

『私がついてゐますからね、あしたのことなんか心配しないでようございますよ。しかしまあ、今日のうちに支度だけは十分しておきませう。まづよく體全體の毛を梳いてスベ〳〵にさせておかなければいけません。さう〳〵。それが出來たら、コテコテにバタをなすりつけて、イセグリムが飛びかゝつて來ても手がすべつて掴まへられないやうにしておきませう。かうしておいて、いざ決闘がはじまつたとなつたら、イセグリムがこはくつてとても呼ばないといふ調子をして、かまはないからお逃げまはりなさい。しかし、逃げまはる時がむづかしいのです。たゞ逃げるばかりではいけません。逃げながら、あと足で砂を蹴り、そのふとい尾で砂を撒き立てゝ、相手の目の中へ入れるやうにしなければいけません。幾度もさうしてゐるうちには、きつとイセグリムは目があいてゐられなくなります。盲同樣になります。さうなつたら締めたものです。いくらイセグリムが強くつても、目が見えなくなればこつちの勝です。まあ職ふ法はさうするよりほかにはありますまい』

かう云つて、悪賢い智慧をつけてくれました。

『なるほど、なるほど』とライネッケは一々感心して聞いてゐましたが、早速その日のうちにすつかり支度をとゝのへました。

一方イセグリムの方でも、熊のブラウンや犬のロスや猫のミニョンなどが集まつてイセグリムが手足の爪を研ぐのを手つだひながら、

『とにかく今夜は疲れを消すために早く床にはひつて、ぐつすり眠らなければならない』と云つて、みんなもそこへ泊まることになりました。

あくる朝になりました。氣のみじかいイセグリムは、みんなと一しょに早くから定めの場所へ出向きました。やがて、ノベル大王が、お妃をはじめ大ぜいの御家來たちをつれてお出でになりました。森の中の獸といふ獸が何百何千となく群がつて來て、まはるく輪を作つて見物をしてゐました。ところが、約束の時間になつても、ライネッケの姿が見えませんでした。

氣のみじかいイセグリムは待ちかねていら〳〵してゐました。そのうちに、三十分もおくれてライネッケがやつて來ました。この時間におくれて來たのも、實はマルチ

ン猿の女房の入れ智慧なので、わざとイセグリムに腹を立てさせておいて決闘の時にあわてさせやうといふこすい考へなのでした。

二人が揃つたので、いよ〳〵決闘がはじめられることになりました。二人は大王とお妃とに一禮をして、さて、どちらが不幸で殺されても、お互の子孫とも怨みを含まないといふ盟を云ひかはしてから、さッと兩方にわかれて身がまへしました。

『よくも今までさんざ仲間のものを苦しめたな。みんなに代つて今日といふ今日は貴樣の息の根をとめてやるからさう思へ』と唸りながら、イセグリムは牙をむき出して激しく嚙みついて行きました。すると、ライネッケの方では初めから逃げる計略なのですから、くるりとうしろを見せるが早いか、尾をあと足の間にはさんで逃げ出しました。しかし、遠くの方へは逃げないで、つかまへられるか擲まへられないかの鼻先を、ヒラリ〳〵と逃げて行きながら、バッ〳〵とあと足で砂を蹴かへすあひまには、尾をふつてまう〳〵と砂煙を立てました。二三度ライネッケの體にイセグリムの前足の爪がとゞいたこともありましたが、すべ〳〵してゐて擲まへどころがないためにいつも逃してしまひました。さういふ時には、ライネッケのために一層ひどく砂を蹴かへされて、目が一時あいてゐられなくなるのでした。そんなことを二三度くりかへしてゐるうちに、ライネッケの計りごとはうま〳〵と成功して、イセグリムの眼は砂のためにまつたく見えなくなつてしまひました。それと見てとつたライネッケは、急にふりかへつてまご〳〵してゐるイセグリムに嚙みついて來ました。見てゐたブラウンやロスやミニョンは、はつと息がつまりました。しかし、危くそれをはづしたイセグリムは相手の耳をギュッと嚙みぬゐると同時に、素早く前足をあげてライネッケを撥み飛ばし、喉ぶえと思ふあたりを食ひ破らうとタッと大きく口を開きました。すると、ライネッケは

『イセグリムさん、まゐつた。とても君には叶はない。勘忍して下さい。もう必ず心を入れかへて悪いことはしないから、どうか殺すのだけはこらへて下さい』と下から哀れな聲を立てました。さう云はれて見ると、心さへ入れかへて正しい獸になつてくれるなら、獸一匹の命をないものにするにも當らないことなので、つい人のいゝイセグリムは許してやる氣になつて

『きつとか。かうなつた苦しまぎれに云ふのではあるまいな。今度嘘をついたら、見つけ次第嚙み殺すからそのつもりでゐろ。よし、今度だけは許してやる』と齒と前足にこめてゐた力をぬく拍子に、どこまで油斷のならないライネッケでせう、氣をぬいたスキを狙つて下からイセグリムの喉ぶえへ飛びついて來ました。しかし、イセグリムは老練の戰士でした。ヒラリと飛びのくと同時に、ゆうべ研ぎすましておいた前足の十本の爪でさつとライネッケの喉からお腹へかけて一裂にさいてしまひました。それを見た何百何千といふ見物の獸たちは、われ〳〵人間なら拍手喝采すべきところを、尾と耳とをピンと立て、口を空にむけて

『ウォー』『ウォー』『ウォー』と、一時に森をゆるがして吠えました。

かうしていたづらものゝライネッケがゐなくなつてからといふものは、あの廣い廣い森の國のどこにも、爭ひ一つ起らず、從つて毎年の寄・合ひにも訴へごとでもあるなどといふこともなく、森はまつたく平和な國にかへりました。イセグリムは國をみだす者を亡したといふ名譽を永く荷ひました。（をはり）

をどりの靴

野口雨情

寒いロシヤの
親なし
子供
赤い踊の
靴ほしからう

靴がほしくば
日本へ
渡れ
赤い踊の
靴買うてはかせう

童謡

野口雨情選

〈大人篇〉

ぺんぺん草

大津市外字鎌　大高　重雄

だまつて
咲いた
ぺんぺん草。

かくれんぼ

東京市江戸川　湊　雨滴

おらぢの
お墓の
ぺんぺん草。
だまつて
咲いてる
ぺんぺん草。

濱邊で
かにと貝がらが
ぢやんけんぽつきり
かくれんぼ

おらの
母さん
ぺんぺん草。

かにが勝つたと
かくれたが
濱邊の砂に
かくれたが

貝がらどんぶりこと
さらはれて
波と一緒に
ぶつちやつた。

學校の雀

愛知縣碧海郡　田中ひとし

學校の雀に
何聞かしよ
いろはにほへとを
教へましよ

學校の雀は
かしこいよ
櫻にとまつて
こつち見てる。

雉子が啼いた

東京府豊島中野　伊藤　華世

けんけんお山で
雉子が啼いた
雨のお山で
けんけん啼いた

地震がするぞ
ゆすれるぞ
けんけんお山で
雉子が啼く

機織さん

岡山縣邑久郡　石川　成文

釣瓶にとまつた
機織さん
知らずに水汲みゃ
おぼれるぞ
あつぷあつぷと
おぼれるぞ
のかなきやあぶない
機織さん

異人さんの目

東京市渋谷町　富岡登久四郎

ピカピカ青い
異人さんの目

異人さんのおめゝは
なぜ青い
ボブラの樣に
背が高く

頭がお空へ
とゞきさう

だーからおめゝも
空色か。

〈小供篇〉

しやぼんだま

京都府三重校　糸井　美宜

くる〳〵廻つて
赤が出た
くる〳〵廻つて
青が出た
赤、青、紫、

しやぼんだま
夢のお國へ
飛んでゆく

米屋の小僧

宮城縣古川町　吉田　秀一

米屋の小僧
汗みどろ
うんとこどつこい
こりや重い
米屋の小僧
汗みどろ。

めが出た

栃木縣宇都宮市　岩本　靜夫

めが出た〳〵
出そろつた
家のおにはに
出そろつた

しやくやく
ほたんたんぽぽが
すらつとならんで
出そろツた。
天の川をまん中に
星の合戰はぢまつた
時々たまが飛んでゆく。

おしやれ嫁つこ

千葉縣手賀縣校　深山　良一

おしやれ〳〵
嫁つこさん
運送に乘つてやつて來た
恥かしいと
頭下げて裏つて來た
おしやれ〳〵
よめつこさん。

たまご

長崎縣若松校　赤武喜代美

めんどりゐない
かごの中には
しろいたまごが
こちや〳〵
なかよく
ねむつてゐます。

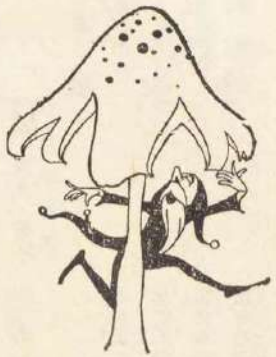
星の合戰

兵庫縣江川校　山村　俊治

お星さま

千葉縣東金校　市東千代子

ぴゆッ——と
夜風が吹いて來た
お星さんお目々に
すなはひッた
お目々がいたいか
ぱち〳〵〳〵。



幼年詩

若山牧水選

鐵砲（賞）

愛知縣海部郡西部校尋六　吉田義人

表でうつた
鐵砲
裏でひゞいた。

波

寒い風
波の先が
光つてゐる
畫

綴方

編輯部選

子豚（賞）

千葉縣山武郡東金校尋六　篠原園

庭場から飛出て見ると、おつかさんが『どうもお世話樣でした。』と言つてました。『馬豚』と背中に書いたしるしばんてんを着た人に言つたのだ。其の人は『どういたしまして。』と言つて自轉車で歸りました。『おつかさん、なによ。』と聞いたら『豚を持つて來てくれたゞよ。』と言ひました。私の足は豚小屋の方へ向きました。行つて見るとまだ一尺位しか無い豚が『ぶーぶー。』つて泣けなくつて『ピューピュー。』と泣きながら、小屋の板を張つてある板と板の間に鼻をあてゝ見ながら入つて居ました。『ぶーや。』と言つたら、ちよいとこつちを向きました。やつぱり鼻のしやくれた顔でした。おとつツあんも來ました。おとつツあんが棒で背中をたゝくと『ピュー〳〵。』と一層大きな聲で泣いて、かさいしつぽをチョロ〳〵動かしながら張つてある板の上の方に、わらを立てゝあるのを上の方まで上りつめました。私がいもを投げてやつたら、いもが大きくてくつかけません。密柑もたべます。いつも〳〵うるさい程泣いて居ます。あとで、おつかさんに『あん豚は買つたゞつぺ。』と聞いたら『さうさよ、だれがたゞで豚をくれるもんがあつかよ。』と言ひました。『いくらで。』と言つたら『十一圓五十錢。』と言つた。私は『ええつ。』と言つておどろきました。あんな小さな豚が。

電信柱（賞）

香川縣木田郡氷上小學校尋五　鈴木薫

『石がたくさんあつて掘れんが。』と一人ごとを言ひながら、工夫が電信柱を立てる穴を掘つてゐる。もう三四尺も掘つてゐる。穴のまはりには頭程もある大石や、小さな小石などがたくさん積まれてゐる。そばの畑には電信柱や太い針金などをおいてある。ふと南から背中に「電」と書いたしるしばんてんを着たこうふが來て、『掘れたか。』ととふたら、穴を掘つてゐる人はふりむいて、『石がたくさんあつて掘れぬが。』と答へた。南から來たこうふは畑にあつた太い針金を小さくまいて、『そんならもうよいが。』と言ひすてゝ又南の方へ行つた。私はぢーつと穴掘りを見てゐると、『そーら。』『うーん』『ちくしやう』と南の方でやかましく言ふので、私はその方を見ると電信柱が立ちかけてゐる。ころぎさうになつては起し、ころぎさうになつては起ししてゐるうちに、たうとう眞すぐになつた。すると、がちやがちやこつ〳〵と石を穴の中へ入れてゐるらしい。石を穴の中へ入れてすんだ頃、立つた電信柱の方からわい〳〵言ひながら大勢の人がこちらへ來て、『こんどはこいつだ。』『そーら。』等と言ひ乍ら畑にころがつてゐる電信柱を皆でかき出した。そして掘つた穴に入れようとすると、『こいつさけてゐるぞ。』と誰かゞ言ひ出した。皆は小聲で『えゝー』と言つて電信柱を見つめてゐる。

弟の顔（賞）　三重縣南牟婁郡本本町　奥川英太郎

すると洋服を着たかんとくらしい者が、『ほーつたのではないか。』と言つて皆を一々見まはした。『いや、ここまで車につけて來てかいておろしたのだのに。』『それでは取て來い。』かんとくらしい人が言ふと、『さうしよう、さうしよう。』と皆は、電信柱を取りに行つた。

どんと曇つた日
風が吹かない
波が休んでゐる。

評、君の學校の人は皆うまい。少しうますぎて、大人つぽくて子供らしくないのは殘念だ。（牧水）

ぼぷら（賞）

大阪府泉南郡谷川校尋三　稲垣勝

ぼぷらのねもとから
たくさんな
めがでてきた。

評、木の芽の樣にこの歌もやはらかで美しい。（牧水）

石

大阪府東成郡小路校尋六　大塚義博

山に登つた
うれしさに
石を麓の村に
投げて見た。

評、お山の大將ぼく一人。（牧水）

めくらさん

京都府舞鶴町
明倫校尋六　今井ゆり

めくらさん〳〵
なにをたよりにあるきます
私はめくらのかなしさに
つゑをたよりにあるきます。

評、やさしい〳〵口調がうれしい。（牧水）

小鳥

京都府中郡三重校高二　廣岡喜代治

籠の小鳥よ
逃げたいの
弱い羽でも逃げたいの
雪が降るのに逃げたいの。

評、これもほんとにやさしい調子。（牧水）

山の小鳥

長野縣諏訪湖南校尋五　小林ソノ

雨が氷になりました
お山が氷になりました
お山の小鳥は餌がなくて
村まで出て來て泣きました。

評、樂めの二句がたいへん佳い。（牧水）

父の歸りを待つ

熊本市千葉城町　柚原いち子（十四才）

時計がチン〳〵と九時を報じた。まだ父はかへらない。お土産ほしさに待つてゐた弟も早眠くなつて『歸へつていらつしやつたら起してちやうだい、きつと起きるからね。』と言ひながら兄と指切りして居る。母は電燈の下で銀色の針をチクリ〳〵とはこばせながらニッコリと笑つた。煮立つた鐵瓶が『シュン〳〵』と音をたてゝゐる。今話してゐたかと思ふ内に弟はもうスヤ〳〵と前後も知らず眠つてゐる。どうしたのだらう、お父さんは今日は歸らないのかしら、歸るはずだのにと、思ひつゝ一心に見守つてゐた。『あゝ？』思はずかうよばつた。人力車は銀行の横町に勢よく曲つてしまつたのである。私は又も『ア、。』とためいきをついた。いつの間にか雨がボツリ〳〵降つて來た。

支那蕎麥屋のふえが『ポーポー。』と淋しさうに聞える。たうとう父はかへらなかつた。

妹の病氣

茨城縣眞壁郡若柳校尋六　吉川たみ

ある夕方、みんな家中のものがごはんをたべてゐるのに、八重子一人は『おらたべね。』と云つてどこかいたいやうな聲でいつたので、私が『八重子はどこかいていのか。』父『ほんほいてのか。』ときくと『うん、おらほんほいてんだ。』といつたので私が『ほんぢや、こゝへねてろ。』と云つて私のひざをまくらにしてねせました。みんなでごはんをたべをはると、私は八重子をふとんにねせてやりました。そして少しすぎると本田の泰四郎さんが來て、父ちやんと二人で色々のお話をしながらお茶をのんでゐると、又本田の政一さんが來ました。政一さんもお茶を呑み乍ら話をしてゐました。そして私は父ちやんらのそばに作文をかいてゐましたら、八重子は私のことを『ねいちやん〳〵。』とよばつたので、私がいくと『ここにゐろよ。』と云つたので、私はそばについてゐました。私は死んだねえさんを思ひだして、そばについてないてしまひました。そして八重子がねむつてしまふまでついてゐると、父ちやんが來て『どうした〳〵。』と云ふと妹は『ほんほいてんだ。』と云ひました。そして八重子は、まつさをでぐなり〳〵してゐました。

た　こ

大阪府泉南郡谷川校尋三　辻里信夫

たこたこのほで
くもまでのほで
あをいそらに
ほんやりとのぼつてる

評、あまえ子さんあまえ子さん、あなたはおくちがきけないの。（牧水）

流れ星

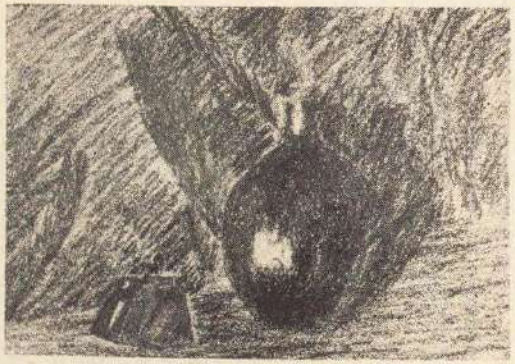
東京市牛込區市ヶ谷薬王寺町　伊藤登良男

お星様に
火がついて
流れ星に
なりました。

冬の雪

愛知縣海部郡西部校尋六　安井實

冬の雪
白い
すすめが
おちて



評物（賞）横濱市本牧校尋四　渡邊敏

細谷先生

東京府下戸塚第一校尋四　新津眞佐枝

私が春季皇靈祭の日に、二階でおはじきをしてゐたら、お母様が『細谷先生がいらつしやつたから早くお目にかゝりなさい。』と云ひました。私は夢ではないかと思ふ程嬉しうございました。先生は六疊の間に居りました。私は直ぐあいさつをしました。先生はフロックコートを着て、大きな鞄を側へおきました。『隨分大きくなりましたね。』とにこやかに仰ッしやいました。先生は髪をきれいに分け、眼鏡をかけて、學校の時の様子とはずッとちがつて立派に見えました。先生は判檢事と辯護士との試驗をつゞけて受け、兩方とも及第されたさうです。學校に居られた時、小形の本を始終見て、勉強して居られたやうで、私はきッと偉い方におなりになると思つて居りました。果してその通りでした。お父さんといろ〳〵受驗前の勉強の話などをして、模擬試驗を幾十度ともなく知り合ひの判事の方にして頂いたのでわり合に樂だッたとのお

しんでゐる。

晩

愛知縣海部郡西部校尋六　渡澄梅二

くらい晩
くらい雨
ぱちり〳〵と
光つてゐる。

新聞の繪

東京府下戸塚校尋四　新津眞佐枝

貧しい人だちが
おかゆを貰つてすゝつてゐる
新聞の繪を見て居ると
外には雪がちらちら。

とんび

東京芝區三田三丁目　鈴木利明

專賣局の高い避雷針に
とんびが一匹さつきから止つてゐる
ピーヒョロ〳〵
さつきからちつとも動かない。

川

鳥取縣石川郡澤田校尋五　深谷達也

冬になつて
昨日はじめて
川へいつて見た
川の岸には
氷がはつてゐた。

柳の芽

香川縣木田郡水田校尋五　濱垣又次

川端の
柳の芽が
ふくらんだ
もう春も
近いのでせう。

猫の子

香川縣木田郡水田校尋五　國方勇

昨日もらつた
猫の子
今日はおまんま
たべました。

女の子供（賞）　住所不明　大橋宣子

話でした。私の成績のことも尋ね、矢張り女學校の入學しけんも此の法によるとよい、一週間ぐらゐ一度づつしけんをしてもらふと大へんよいと仰ッしやいました。そして、お役目で名古屋の方へ近いうちにお立ちになると云ふことでした。去年の十月頃女のお兒さんが始めて生れたさうです。先生は『眞佐枝さんを一すおかりしたい。』と云はれて、私と寫眞をうつして下さると仰ッしやいました。辭退せず直ぐに木村寫眞館へ行きましたが、そこの主人が留守でしたので外をさがしました。丁度いゝ具合にもとの先生のお友達の方が寫眞館を開いてゐるのが見つかりました。それは磯野さんのお宅の前なのでした。先生は磯野さんへもあいさつして、磯野さんも一緒にうつさうと云はれました。磯野さんの宅のお庭で、三人で色々な形をしてうつしました。丁度つき山に梅が眞ッ盛りでした。先生は私がいつか萬朝報へ出した『私の先生』といふ題で書いた綴り方をお友達の所で見せてもらつたとその時の話をしました。それから三人で戸山ヶ原を散歩しながら、學校の時の話などして、惜しき別れをしました。『大きくなつてよく勉強して立派な人になつて下さい。もし名古屋へ旅行でもして來る折があつたら私の宅へ寄つて下さい。』と言はれました。

思ひ出

山梨縣大月實里東校高二　高山千代

あゝもうわたしは此の學校へあしかけ八年通つたのである。わたしの小學時代はずゐぶん變つた事もあり面白かつた事もあつた。三年頃までは友達もよくしらなかつたが、愛子さんとおちようさんはよくしつてた。おちようさんとは三年まで並んで居てけんくわも澤山した。四年になつて時ちやんと並んで時ちやんをしるやうになつた。そして四年五年の時は愛子さんと大へん仲がよくて、二人づつの遊びは何んでも愛子さんと二人になつて遊んだ。そして四年の時はうす〳〵おほえて居るが、何んだかの時に愛子さんがほんもとでわたしをせんきよした事もあつた。其の時分は竹子さんはずゐぶん眞面目できりつがよかつた。六年の時も竹子さんはあまりしらなかつたが、わたしに年賀狀の繪はがきの見本をまとめて澤山くれたので、竹子さんが分つて來た。高等一年になつて人數が少くなつて皆んな分つて來た。そしてもう卒業する時が日にまし近くなつた。私達は記念にまくでも寄附して面白く卒業しようと思ふ。

川（賞）　香川縣木田郡水田校尋五　吉田恒市

火事のあつた日

伊藤銳一

僕がお使ひにいつて、美江寺まで來ると、鐘がヂャン〳〵となり出した。僕はびつくりして、走つていつて、家の病院

星

香川縣木田郡水田校尋五　河原義弘

野原に子供が
あつまつて
おにごつこ
してゐたら
しらぬまに日がくれて
星が一つ出てゐた。

べんたう

山口縣岩國昆散畠　新庄憲光（十二）

けふのおかずはなんだらう
おひる御はんがたのしみだ。

雨上の朝

東京府杉並村天沼家庭校尋六　日向もも

田んぼのなかに
雨水たまつて
朝やけうつる。

お月さん

和歌山縣東牟婁郡朝鮮校尋三　切士忠

こんやのお月さん
なかしなお月さん
大きなかさきて
あすはあめだといつてゐる。

つばき

大阪府泉南郡多奈川村谷川尋三　中野トヨ子

ツバキノハナガ
サイテキル
ウチノセンザイニ
セイヤウノ
ツバキノハナガ
アリマスヨ。

山火事

安房國平群校高一　若林芳雄

田火事だ
山火事だ
綺麗だ
綺麗だ
おほ寒い
障子しめよか
しめまいか。

僕の友達（賞）　京都府中郡三重校　和田英雄

のへいに登つたが見えなんだ。で今度は屋根へのぼつた。向ふの女學校の松んとこから、黒いけむりがのぼつてゐた。近いので見ようと思つて、家の前まで來ると南さんに大川さんが來た。『火はどこなの。』ときいた。大川さんは『うん火はね忠節橋のよこなんだよ。』すぐ南さんは『いつて見て來な。』といつたから、大急ぎにかけて橋まで來たが、そとはもえてゐなかつた。鳥の竹やぶからけむりがもくもく立つてゐた。ぼかんと立つて見てたら『北方だぜ。』と聲がきこえたからハッと氣がついたら、人力星の人が五人走つていつた。僕もいつしよについて走つた。少し走ると北方とまるつきり方角ちがひの方がもえてた。そして大變遠かつたから、もうがつかりした。二度もだまされて、こゝまで來たのを大變くやしく思ひながらなほもえてる火を見い〳〵家へかへつた。

雨の夜

茨城縣古河男子校尋六　茂木品次郎

うちではもう、ごはんをすまして、いろいろ父の話をきいてゐた頃は、もう夜雨のふりはじまりであつた。うらの戸に音がさらさらときこえる。そのうちのき下にぽちや〳〵と、雨のおちる音がきこえる。僕はそのうち、とこをしいてゐると、かすか向ふの方で犬の聲がきこえると、父は『いまねる。』といつた。僕は先にとこにつくと、こんどは大つぶのやうにぽつぽつぽつと大きな音できこえる。僕がねむりにつくころであつた。うちの玉はいまふけてゐるから、大きなこゑでにやをん〳〵と女猫をよばつてゐる。そのうち、僕はねむつてしまつた。夜中に目をさまして見ると、もうよほど小ぶりになつてゐた。ぽうぽう鳥のなくこゑもかすかに、ぽうぽうと、きこえる。そのうちまたねてしまはうとすると、汽車のきてきがぽーと、さら〳〵とおとをたてて、ふつてゐるあの雨音にまぢつてきこえる。僕は又ねむりにつき、ぐうぐうとねてしまひました。

私の人形（賞）　樺演市本町小學校尋三　福田琴子

僕の臆病

宮城縣師範學校附屬尋三　片平信貴

コトコトコトと云ふ物音に目を覺した。時は眞夜中でしんとして何んの音も聞えない。僕は家の近くの林さんの家に、どろぼうが入りさうになつたと、云ふことを聞いて居つたので、なほおそろしくて、お母様を起す勇氣もなかつた。其中に又一しきり『がた〳〵ごと〳〵』とさわがしい音がやみをやぶつて聞えた。僕はふとんの中にもぐりこんで、しばらくの間はぶる〳〵とふるへて居たが、其の中にいつかしらず、うと〳〵と眠つてしまつた。翌朝目をさましてえんがはに出て見ると、ねずみの足跡で、一ぱいであつた。僕は自分の臆病にあきれてしまつた。

演講音の報告

土佐より

講師　沖野岩三郎

□四月十一日の晩に東京驛を立つた私は、翌日の十二時に神戸へ着きました。波が荒いので高知へは渡れないと思つて西村旅館に泊つて翌日の午後七時に、賀川豐彦さんに見送られ浦戸丸といふ大きな船に乗りました。

□十四日の朝高知の港へ着いて、直ぐ自動車で幡多郡中村町へ行きました。高知から中村までは三十三里の山路です。それを自動車が八時間で突破するのです。東京を出る時、櫻がまだ滿開にならないから、高知へ行つて見ようと樂しんで來ると、高知縣の櫻は、もう半月も前に散つてしまつて、青々とした葉が暖い潮風に吹かれてゐました。山といふ山は悠ゆるやうな波線で、靄霧も早や散り失せて藤の花が咲らでした。東京より確かに一月早く夏が來るらしい。

□中村町から三里手前の入野といふ町まで、南國新聞社の幸德廚太郎氏等が出迎へて呉れました。それから永橋卓介さんといふ金の星の誌友の兄さん一郎氏の宅で厄介になる事になり十五日はゆつくり休んで、夜、小學校で大人三百人に對して話しました。

□十六日の朝、中村小學校生徒一千人に話し、午後は中學校で四百人の生徒さんに話しました。愉快な集りでした。

□十七日は幸德さん達に伴れられて宿毛といふ所へ行きました。其所の小學校で一千人の生徒に話し、夜は清寶寺で二百人の大人に話しました。

□十八日は林寛治さんと小野十五郎さんに見送られて、同郡の山奈小學校へ行きました。私共が行つた時は、もう中筋、平田、山奈の三學校の生徒が大きな樅の樹の下に集つて私達を待つてゐました。話の終つたのは恰度十一時でした。それから又た自動車で中村へ歸つて直ぐ二時から中村女學校へ話しに參りました。女學校には私の舊友桑原壽榮造さんが居ました。女學校の話が終つて、夜の八時から小學校で五十人の大人に特別の話を致しました。

□十九日は午前十時から、中村町の隣村安並村の東山小學校で安並、古津賀の二つの學校を合併して話しました。尋常一年から高等二年まで一緒にしたのですが、高等科の生徒が尋常一年生の中に入つて監督してゐたので非常に靜肅でした。午後一時から三里離れた入野小學校へ行つてみますと、もう滿員でした。最初前田照憲さんといふお孃さんが、柿谷華王子さんの作つた『床屋のおちさん』を美しい聲で歌ひました。次に童話劇の花咲爺がありまして、三番目に土屋小糸さんが、西條八十さんの『風』を獨唱しました。其のあとで私は一時間のお話を致しましたが、二千餘人の子供達に一人の監督者も無いので、終りの方で少々ダレて來ました。しかし一生懸命に話して最後は緊張しました。大きな劇場が張さけるやうな騒でした。

午後七時半から縣公會堂で前夜の續きを話しました。今夜は前晩よりも更に聽衆が多くて六百名程ありました。三時間話して十時半に閉會いたしました。《廿一日記す》

□四月廿二日の朝は高知教會の禮拜に出席しました。それから一時前に會場の堀詰座へ行つてみますと、もう滿員で入場謝絶でした。講師の私も閉め出されて、ふお醫者さんが萬事のお世話をして下さいました。

へ行きました。そこには入野尋常小學校と、高等小學と、加持小學と、浮鞭小學と、田ノ口第一、第二小學と、六ケ校の生徒が集つてゐました。大きな教室四つを打拔いて、張裂けるやうな盛會でした。最初一時間話したが、折角遠くから集つたのだからといふので、尋常五年以上が殘つて更に一時間話しました。それが濟んだあとで、折角小學の先生達が五六十人集つたのだからといふので、更に先生達の爲に一時間餘り話しました。中村町へ歸つたのは七時でした。七時から有志の人達に送別會をして戴いて寢んだのは十二時頃でした。寢む前に私は喉へ塗附する藥を眼藥だと思つて、眼につけて、眼が開かなくなつて大ひでした。《十九日記す》

□廿日には朝八時の自動車に乗つて、また三十三里の山路を走つたのですが、前晩に睡眠不足だつたので、自動車の中で少睡をして、帽子を風に吹飛されたのを知らないで寢てゐました。暫くして氣付いて、運轉手さんがわざ〳〵拾つて來て呉れましたので、私は私の帽子を金壹圓に買ひました。自分の所有品を自分がお金を出して買つたのは、これが最初でした。そして高知の町へ戻つて來たのは午後四時でした。あんまり疲れたので、三十分程寢んで、お風呂に入つて、それから縣公會堂で八時から十時半まで大人五百餘名に話しました。高知市に於る第一夜の集會は先づ〳〵成功でした。

□四月廿一日は朝九時まで寢んで、起きてみますと、香美郡赤岡小學校の武田徹愚といふ坊ッちやんから『おぢさん、ごきげんですか、私も赤岡でべんきやうをしてをります、おぢさん赤岡へおみあけとして、お話をどつさり持つて來て下さいませ、まつてゐますから、』といふ手紙を受取りました。けれども赤岡まで行くと一日かゝるので、可愛いお招きを斷る事にしました。午後一時前に劇場堀詰座へ行つてみますと、もう滿員でした。最初前田照憲さんといふお孃さんが、柿谷華王子さんの作つた『床屋のおちさん』を美しい聲で歌ひました。次に童話劇の花咲爺がありまして、三番目に土屋小糸さんが、西條八十さんの『風』を獨唱しました。其のあとで私は一時間のお話を致しましたが、二千餘人の子供達に一人の監督者も無いので、終りの方で少々ダレて來ました。しかし一生懸命に話して最後は緊張しました。大きな劇場が張さけるやうな騒でした。

午後七時半から縣公會堂で前夜の續きを話しました。今夜は前晩よりも更に聽衆が多くて六百名程ありました。三時間話して十時半に閉會いたしました。《廿一日記す》

□四月廿二日の朝は高知教會の禮拜に出席しました。それから一時前に會場の堀詰座へ行つてみますと、もう滿員で入場謝絶でした。講師の私も閉め出されて、

やつと頼んで入れて貰ひました。入つてみますと、午後一時の開場を朝の七時から詰めかけて、係りの人を弱らせたさうです。

で、十時過に開場すると十一時前にもう二千六百人も入つたのださうでした。劇場が張り裂けさうな騒ぎ、前田照惠さんと土居小糸さんが可愛い歌を歌つて、それから私は力一杯話しました。

今日は話す私と聽く三千の子供さん達との心が、ぴつたり合ひました。話のあとで唱歌劇があつて大喝采で閉會しましたが、閉め出しを食つた人達にお氣の毒だからといふので、午後七時から更に開會すると事にしました。

午後七時開會間際に雨が降り出しましたので、子供さん達は少くて、大人が七分ありました。そして五百人餘りが、靜に聽いて下さいました。こんなに多勢子供さん達の集つたといふ事は高知市空前の事ださうです。

これで、高知市を引揚ける筈でしたが（高知市に於ける講演會の盛況）

まだ私を離して下さいません。

（昭和二年一月廿日十一）

伊那の龍丘より

講師　野口雨情

ただ今、伊那の龍丘へまゐりました。龍丘は長野縣中に於ける最も文藝に理解ある文化村であります。

龍丘校の自由畫はこれまで度々金の星誌上にのりましたから、讀者諸君は御承知のことと思ひますが、全く龍丘校は自由畫をもつて全國に冠絶してをります。指導者は木下茂男氏で號を紫水といひます。茨城縣若柳校の粟野柳太郎氏とは夙に文書の往復をしてゐられます文藝教育について熱心なお方であります。（三月十三日長野縣下伊那町龍丘村にて）

◇『金の星』は新しい時代の童話と童謠を普及するために、講演部を設けてあります。

◇講師は、童話は沖野岩三郎先生、童謠は野口雨情先生が擔任されます。

◇講演御希望の方は金の星社宛にお申込み下さい。出張費用等お問合せのあり次第御返事いたします。（終り）

自由畫選評

山本　鼎

▽どうも良い繪が少い。ちつぽけな紙にちゞこまつた繪が描いてあるのが多くてがつかりしますね。もつと大きな紙へ活發に、そしてゆつくりした氣もちで、はつきりと繪を描いて下さい。

▽福田琴子さんの『私の人形』、ていねいな描き方でいゝ。

▽大橋宣子さんのものびりして居ていゝ。

▽吉田恒市君の風景の寫生、落着いて描いてあつてよいが、前景の木立ももつとしつかりと描かねばいけませんね。あのわらによ位に强くね。

▽和田英雄君の『僕の友達』面白味がある。けれどもあまり小さい紙にかいてあるのでしみつたれても見える。もつと大きな紙へおかきなさい。

▽渡邊敏君の靜物畫、なか〳〵熱心のこもつたクレイヨン畫ですが、全體として失敗の作です。景中の瓶だけはよくかけて居ます。瓶にはトオンがあるが、他の部分はまるでトオンが見えない。

▽奥川英太郎君の『弟の顔』、ちとごちゃくした畫風だが、冴えがある。色も筆もしみつたれて居なくてよい。

幼年詩選評

若山牧水

ほんたうに調子のいゝのは讀んでゐても氣持がいゝ。今號の今井ゆり子さんや廣岡喜代治君、先號の谷岡安男君小林はな子さんなどのがそれである。これらは自分の歌はうとしたことがそのまゝに調子になつて來てゐるのでいゝのだ。さうでなくてたゞわけもなく調子をよくしやうとすると、それこそいやアな調子になつていけない。うは調子とか、から調子といふのがそれである。さういふのがかなり澤山あります。

それから餘りに考へすぎた樣なものはいけない。子供は子供らしくなくてはいけない。愛知縣西部小學校の生徒さんたちは皆うまいけれども少し大人くさい。子供らしさに缺けてゐる。

そしてたいてい誰が作つたのかわからない位ゐすべての作が似てゐる。

これはその指導者である先生の一考をわづらはしたいと思ふ。例へば今號に出てゐる吉田義久君のも安井實君のも渡邊梅二君のも歌

◆**自由畫掲載外佳作**　△家（平井茂）△蝦子（伊藤好）△あんか（林茂夫）△お義經（杉本一雄）△野菜（太田はる子）△人物（河島清）△茶びん（河島清）△茶びん（糸井桑助）△溝君（糸井桑助）△椿（下島持久）△鶏生（吉田恒一）△梅（佐野勝見）△おもと（糸井桑助）△火ばち（糸井桑助）△だいだい（糸井桑助）△子供（柚原五郎）△本と栗（郷清三郎）△田舍の家（安藤義行）△家（人見一三）△雪の山（吉田恒一）△冬の田舍（熊野一俊）△嬰兒を負つた女の子（内藤和嘉子）△田舍（安藤義行）△窓（石田操）△水仙（神村静香）

◆**幼年詩掲載外佳作**　△本（泰竹進）△かわいそうな妹（高木しげ子）△かげろう（小田島光郎）△一軒家（川カズエ）△かりうど（田井竹一）△水車（宮内要）△ヒヨコ（大塚義博）△暖かい日（岡村ヒサ子）△さつれ（川島正治）△庭の立木（山田明）△まびこの蝶（矢後キクエ）△栗の木の下（糸井次作）△カキ（大野カネコ）△カラス（鶴田花子）△雪の降る夜（吉井光子）△あり（濱田米子）△山に行く途中（渡邊ウメ）△くはの葉（宮本しまの）△人のけが（瀧本乙枝）△月（和田キヨコ）△雨（和田喜代子）△ムシのコエ（杉本杉子）△赤い靴（佐野勝見）△おこた（熊野清）△姉さん（和田龜太郎）△水仙（野崎清信）△星（木全清一）△月（鳥居賢二）△しやぼん玉（原藤五郎）△冬の雨（藤田幹）△マド（タナカトヨ）△金の砂（土橋清）△小西君（深井正二）

◆**綴方掲載外佳作**　△小西君（深井正二）

の姿が實によく似てゐる。私ばかりして子供の頭を一つの型に入れてしまふことをまことに恐れるのだ。

綴方評

選者

▽篠原國さんの『子豚』は今月集つた中でばすぬけていゝものでした。ピュー〳〵とかぶりつかない子豚が實によく書けてゐます。『「ぶーや」と言つたら、ちよいとこちらを向きました。やつぱり鼻のしやくれ顔でした。』のあたり、本當に面白いではありませんか。ぐん〳〵と思ふまゝ書いてゐながら、ちつとも無駄がなくて、しかも胸のすくやうな印象を與へるのは、この人が少しも飾らうとしないで、思ふまゝを書いてゐるところにあるのだと思ひます。

▽鈴木藏さんの『電信柱』は『子豚』に比べると、作者が女だけに面白く寫生してゐますわい！いつて柱を立てゝゐる工夫が實によく書けてゐるではありませんか。

▽高山千代さんの『思ひ出』を讀みながら感じたのは、もう高年二年位になつた人達の作には思切つてぐん〳〵書いたところがなくて、あゝ書いたものか、かう書いたものかと迷つてゐるところがあるだけに、讀んでみると、何處か力の拔けたところがあるのです。

これは止むを得ないといへば言へないこともありませんが、といつて此のまゝにして置いては唯上手にばかり書かうとして、中味の作りものとしないで、感じたまゝを書くといふことを忘れないやうしなくてはいけません。廣里東小學校の作には、まだ此の外に澤山面白いものがありましたが、のせ切れないので殘念です。

▽柏原いち子さんの『父の歸りを待つ』と吉川たみさんの『妹の病氣』、共にいゝ作です。この二つの作などは下手に書くと、ろ〳〵の事をだら〳〵と書いて、却つてつまらないものにしてしまふところですが、この二人の作者は書かなければならない事だけしか書かなかつたので、作が引立つてゐます。

▽新津眞佐枝さんの『細谷先生』は面白いものですが少し無駄を書きすぎてゐます。この半分位で書けたら面白いものになつたでせう

▽伊藤銳一さんの『火事のあつた日』はあたり前の出來榮えです。火事は誰も上手に書きますね。印象が强いだけ書きやすいのだと思ひます。

▽古河小學校の作品か澤山に見ることの出來たのは嬉しいことでした。いづれも面白いものだと思ひましたが、總體の傾向に就て評しますと、もう少しみんなが文章を飾らうとしないで、思切つて素直に書く必要があると思ひました。

▽幼い人達が强ひて巧く書かうとする時は非常な隨落となるおそれがあります。自由畫や幼年詩を書くと同じ氣持ちで、綴方も書くのではなければならない筈です。

▽茂木品次郎さんの『雨の夜』は中で最も自由に思ふまゝを書いてゐると思つて選びました。

▽うれしく思ひました。『實進び』『我儘な牛蛙』『金貨になつた蛸子』『林檎の森』『四五六爺さんとマロ』『豆大將』など、優れた作がなかなか多かつたのです。

▽これ等の作は何れも推薦乃至入選の候補に擧げていゝ作ですが、この中の二三の作に就て順後の感想と希望とを述べて見ますと、

▽久米舩一さんの『四五六爺さんとマロ』は題材も手法もなか〳〵しつかりしてゐます。

△ムギマキノトキ（八巻ミユキ）△ねこ（村井初枝）△さわやんのひるね（村井初枝）△汽車の中（桑原美道）△床屋で（大谷壽三郎）△一ツのドロブツス（永島龍居）△おいしきの晩（安田象子）△お使ひ（長谷川よし）△こないだ（篠原國）△思ひ出（高山千代）△けんくわ（田内小敏）△僕とふるたき爺さん（宮崎秀一）△先生の目鏡（池澤淳一）△雀（鈴木臨四郎）△朝の火事（田中文七）△夕食後（鈴木臨四郎）△夏の花（高橋久藏）△雨の夜（鈴木臨四郎）△歡會（柴田美緒）△黑汁（神沼喜市）△島屋へ（長谷川よし）△雨の夜（鷗口五郎）△雨の夜（古谷象義）△雨の夜（小林幸一）△雨の夜（篠崎藥方）△妹のはなつまみ）吉本辯二）△家の子の朝（小川歌子）△暮かな夜（三浦千代子　△人が通る（松本シズエ）△今年の正月（溝淵勝男）△朝學校に來た時（十河クニエ）△夕食後（池田彌一）△夕食時（小林幸一）△冬の夜（大内意二）△雨の夜（飯島孝太郎）△冬の夜（木下要藏）

◆童話住作　△大人篇林檎の森（三谷公臣）△人間の狼（有竹紅葩）△青鷲と赤猿（佐藤榮治）△泥鰌と田螺（佐藤榮二）△錦木塚物語（川合勇太郎）△アムモニア水（長谷川淑夫）△薔薇（白土俊雄）△雲雀の鑑（江口雄一郎）△はつかけ狼（小倉旭）△西洋人の見た夢（松村淑郎）△財產を腐らした話（富岡登久四郎）△魔の狼（濱守一）△眠の城（山宝周平）△巻の報ひと怒の報ひ（美祢隆男）△子供篇（悪魔に呪はれたお姫様（男谷ふく）△

吉）△逃げたもるモット（坂井半子）△貧吉の犬（八ツ代春村）△黄金雲の御靈（家竹道）△くもの自慢（高木しげ子）△不思議な糞（若林芳雄）△魔に呪はれた姫（大内意二）△魔法の帽子）大内意二）△孝子一男（山田明）

◆童話掲載外住作　▲大人篇　△梅の花（逸見子鳩）△てんと蟲（有賀連）△雪の夜（松本綠香）△お月さま（福井勝秋）△暮れ方（榎本逸雄）△ねむの木（美勢とんじ）△大漁（高根溪水）犬と猫（寺島貞次郎）△瓶（西街緑四）△四軒目の子（和田莊三郎）△兄さん兵隊（矢下清榮）△人形の國（柳寶）△雀の家（田中ひとし）△婆ちゃん（渡邊源四郎）△さくら（熊江清隆）△テルテルさん（梶上國之助）△眞珠の露（福島菁次）△赤い鳥小鳥（森田克己）△柳の芽（柴田けい子）△卒業式（村上たつま）△小さなお守（石原牛次）△火事（島田爛いち）△馬（横牛晩路）△ふくろ（美勢とんじ）△小川の流（丘村晃）△春（松村白彦）△親子雲（野村かつみ）△湯のか（りがけ（有賀博）△燕（濱田秀雄）△小供篇△悔ぶれ（坂井年子）△金の鑛（小倉兎月　△つばき（山村俊治）△お月様（宮坂茂集）△子豚が逃げた（伊藤憲一郎）△小雀（海老原惣兵衛）△雀（山本新一郎）△かたつむり（松本眞砂）△雀（齋藤勇三郎）△小犬（相田敏夫）△雪（峯崎二郎）△夕かんや（五月女芳二）△雨（藤岡喜一郎）△なんてん玉（向田碧太郎）△寒い朝の雪（九島廣）△公園の蟲（西岡榮）△夏（河野治吉　△月（加藤朝子）△いち惡雲（星野千代子）△むぎ（水谷秋）△蟲（水谷たつ）△星（水谷千代）

童話選評

齋藤佐次郎

▽毎月皆さんの作を拜見してゐますが、いつの月も全體から評するとして變つた事もなく題材と手法に面白いものや、しつかりしたものを二三見出す事の出來るのが樂しみな位です。

『金の星』誌友の創作募集

『金の星』は毎月童謠、童話、及兒童創作の研究と誌友の機關とを兼ね毎月『小馬』を發行いたして居ります。就ては下記の規定に從ひ、特に『金の星』の誌友の方々の創作研究を募集いたしてをります。どうぞ苦心のお作を御投稿下さい。

□規　定……は凡て『金の星』の創作募集と同樣です。但し原稿には必ず『小馬』原稿とお記し下さい。

□童謠（幼年詩）……野口雨情選
□自由畫……岡本歸一選
□童話……齋藤佐次郎選
□兒童の創作に關して……編輯部選
□綴方の研究、論說、隨筆……
□締切……毎月廿五日

す。この點は童話を書く者の注意すべき條件だと思ひます。

▽本間一郎さんの『我儘な半鐘』はアンデルセンにありさうな話だけに、かなりに豐かな藝術味が感ぜられました。全體としては、少しあつけない稀薄な印象を與へます。

▽松村淑郎さんの『金貨になつた硝子』は大變に面白い話でした。本當にいゝ話だと思ひました。たゞ惜しい事に表現力が題材に負けてゐます。

あれだけの面白い話を生かして現はすのには筆の方の力が足りない事を思ひます。いま一段と表現に力を入れる必要がたしかにあると思ひました。

▽牧野忠之さんの『當遊ひ』は無難で、面白い作です。

▽堀孝三さんの『豆大將』は十三歳の小年が書いたものとしては、驚くべき上手な作です實に調子よく書けてゐます。あまり上手に書けすぎていやしまいかと思ふほどですが、兎に角注目されました。

▽大橋正憲さんの『立身した下郎』には優れた皮肉があります。小便に行つた家來が思ひがけぬことで狼をつかまへて來て、そのために出世をするといふ話ですが、筋には變つた妙味があつて面白いのですが、これも表現力の方が負けてゐました。

▽以上の諸作はいづれも特色ある作ですからこの中の一篇を次號で推薦減は入選作として掲げます。尚この外にもかなり面白い作がありましたが、紙數の關係で、掲載出來ませんでした。

編輯室より

▽編輯所の名物になつてゐる柿の樹とぶだう棚のぶだうが、もう新芽を吹きました。早いものですな。もうぢきに初夏が來さうです。皆樣お變りもございませんか。編輯員一同は大元氣でございます。

▽雜誌が發展すると共に編輯部の方もなかなか多忙でございます。沖野先生も野口先生も講演旅行で各地を歩いていらつしやいます。

沖野先生は高知を中心に四國の各地を廻つておいでですが、高知新聞や土陽新聞や、婦人矯風會が主催や後援をして下さるので大層な盛況です。二葉枚のエハガキが足りないで後から送るやうな有樣です。

▽野口先生は信越方面を作曲家の中山晋平先生とご一しょでお歩きになりましたが、これまた大好評で、各地で非常な歡迎を受けられました。

▽七月號から面白い讀物がジヤ〳〵と出ます。先づ小鳥政二郎先生は長篇をお書き下さるはずを後廻しにしていたゞいて、等號かはつた面白い短篇を書いて下さいます。先生は實に樂山面白いお話を持つてゐらつしやいますから順々にお書き下さるお話はきつと皆樣から大歡迎を受けますことでせう。

▽また西條八十先生は長い間つゞいた『スペインの山賊』が一先づをはりましたので、つづいて『牢破り』といふ面白い〳〵長篇を執筆して下さいます。

▽このお話は矢張りジエラール中尉の冒險談の中の一つで、例の勇敢なジエラール中尉が不思議な運命から牢に投げ込まれ、牢を破つて出るといふ冒險談です。これもまた大喝采のことでありませう。

▽此の外に、戯曲家として有名な鈴木善太郎先生の兒童劇や森川一郎さんの『飛靈船の話』『願ひごとの叶ふ指輪』などといふ面白いものも後から續々と出ます。兎に角、七月號からの『金の星』を御覽下さい。かならず皆さまに御滿足をあたへる事が出來ると信じてをります。

では皆樣御氣嬢よう。

『金の星』誌友募集

『金の星』の誌友を募集いたします。誌友にはいろ〳〵の特典がございますが、先づ第一に童謠童話及兒童創作の研究雜誌『小馬』を毎月無代で差上げます。そして誌友に限り『小馬』に投稿の特權があります。尚この外にもいろ〳〵の御便宜がありますから、本社宛に誌友規則書をお申込み下さい。早速お送り申上げます。

通信

岡本歸一

先月號の本欄でお伽ゑばがきの事を一寸書いておきました所、その後續々御通知に接しました。御通知のあつたかたにはそれ〴〵御申出だけ御返金いたしておきました。少しづつでも責任が輕くなるので、喜んでゐますが、まだ〳〵澤山のかたがあつた樣に思ひます。どうぞ御遠慮なく申出て下さい。私の重荷をとりのけてやるのだと思つて。委しくは五月號を見て下さい。

御通知を下さいましたかたに厚く御禮申上げます。

○練木さん、又々御注意を受けました。あなたの御申越通りの服裝の事がやつと今度作者の方から原稿がまはつて參りました。一回一回しか見られないのでとても統一のある正しい挿畫が書けないので全く閉口します。おまけに今度の原稿ではヂエラル中尉が四十人もの山賊にあんなに引きづられたり、蹴られたり、縛られたり、したのだから多分帽子なぞ脱げて了つてゐる方が自然だと思つて、描いてゐました。所がちやんとかぶつてゐるのです。これには閉口しました。今更帽子をかぶせる譯にもゆきませんでせうし、我慢して下さい。

○それから三四のかたから四月號に出てゐました出版部の豫告の私の本の事について御問合せがありましたが、私にはまだ考へがまとまつてゐませんから、暫りあてにしないで下さい。

△どての火事（片桐みつゑ　△夕方（岡まさを）

◆**金の星新誌友**　○鎌本　山村サチ子樣○東京　湊守一樣○樺太　油木貫一郎樣○東京　田口銀次郎樣○名古屋　水尾富士子樣○名古屋　水尾隆彦樣○仙臺　北野とし子樣○東京　西川正世樣○靜岡　飯尾晉禰樣○横濱　岩下五郎樣○東京　朝比奈隆樣○靜岡　松井多門樣○高知　今村猛樣○山梨　小川もと子樣○東京　八ツ代春村樣○横濱　平井淳雄樣○長野　大平金吾樣○東京　南須原靜也樣○京都　大島花子樣○宮城　永澤安雄樣○秋田　菅原末吉樣○熊本　栗林節子樣○長野　星合勝樣○埼玉　逸見嘉一樣○廣島　二宮守人樣○茨城　林長雄樣○長野　柿木保樣○東京　太田子樣○京都　坂口千年樣○東京　野村長治郎樣○和歌山　關口末一樣（以下次號）

新しく出た本

◆**家庭用兒童劇第二集**（坪内逍遙先生著）兒童劇に熟心な坪内先生の兒童劇集の第二篇です。本篇には「櫛と芒」「豊の會議」「わるい友だち」「因幡うさぎ」等七篇の兒童劇が集められてゐますが、いづれも先生の苦心になつた名篇ばかりです。本書は表題の通り主として家庭内で演する樣にと書かれたものですが、幼稚園や小學校で演じてもさぞ面白いだらうと思ひます。それから附錄には例により著者の假面や衣裳についての行き届いた說明と家庭劇を見た多くの人々の感想が載せられてゐます。（四六判二〇〇頁、定價二圓二十錢、早稻田大學出版部發行、振替東京一一二三）

◆**日本童話作家と其傳記**（水月昭道先生著）兒童劇はどうして進歩して來たか、兒童劇にはどんな區別があるか、又どんな效能があるか、子供に劇をやらせても教育上差支へはないか、と云ふやうな兒童劇に關するいろ〳〵の實際上の扱ひ方について叮嚀懇切に述べたのが本書であります。今のところかういふ問題に就てこれ程立派な議論を述べたものは他にありません。父兄の方々や兒童劇及の初等教育に興味をお待ちの方々におすゝめ致します。（四六判二三四頁、定價一圓八十錢、早稻田大學出版部發行、振替東京一一二三番）

◆**孤り星**（露谷虹兒先生著）著者の詩畫集であります。なめらかなピロードの美しい裝幀が先づ眼をひきます。悲しい、寂しいそしてなやましい、數々の抒情小曲は少女達の胸にどんなに强い響きを與へるでせう。著者の特色である憂鬱な寂しい五十枚餘の繪は一層興味深いものです。（定價二圓五十錢、日本橋區本材木町文化社發行振替東京三二〇二〇）

◆**憧れ知る頃**（吉屋信子女史著）少女の日、學窓にありし頃からの感想文、小品、物語、散文詩を集めたもので、其一ツ〳〵の短かい文章に著者の青空のやうなけだかい心の影がたゞよふてゐます。

純な少女のためには、かならず柔かい魂の種となりませう。裝幀と挿畫は露谷虹兒先生の苦心になつたものだけに實にすつきりとした麗しいものです。（三五版、一六〇頁、定價一圓四十錢、神田區仲猿樂町交蘭社發行振替東京四〇二七九）

讀者だより

▼諸先生方にはお變りありませんか。四月二日には第一回「仙臺兒童倶樂部」を開催いたしました。多分「おてんとさん社」からお知らせでもあつて御承知で御座いませう。「おてんとさん社」主催で毎月一回です。その際、私は友人の鈴木君等と、小さいお客さん、大きなお客さん方の案内役として一生懸命に働きました。その御褒美として、『金の星』正月號を戴きました。すつと前に、雨情先生迄きつと『金の星』の愛讀者になると約束した事がありましたが、今迄愛讀者にならなかつたのです。それは實は一度も『金の星』を見なかつたからです。それゝ、今度戴いたので、嬉れしく拜見して居ります。(仙臺　菅野逸雀)

▼五月號はほんとにうれしいことばかりでした。なぜつて僕の童謡が出ていたんだもの。それから「名所めぐり童謡」に家の近所の鐵音様が出てゐたから。それからもう一ツは作曲に伴奏がついて良くなつて、雜誌が立派になつたからです。編輯部の皆さんはずゐぶん忙がしいでせうね。九月の特別號はぜひ童謡號にして下さい。(淺草　松井純三)

▼若山先生のお選びになつた『金の星』の幼年詩をまとめて御發行になるやうに拜見いたしました。大へんにうれしいことに存じます。邪路に入りがちな今日の童謡に一ツの大きな導きの炬火があらはれるやうな氣がいたします。つきましては若山先生の短評をいつもながら、面白く味はつてゐる私どもにとりまして、子どもの詩のみならず、あの短評をもつけていたゞきたいと思ひます。それはすべての人にとつて願はしいことだと存じます。(新潟縣　青木重亀)

▼色んな事になまけて、隨分『金の星』とも御無沙汰して居ました。長い間、雪にとぢこめられて、春を忘れてたこのサツポロの野山が今ニコ〳〵した太陽にそれを思ひ出して喜びにかゞやいてゐます。わざ〳〵私の所にお送り下さいました綺麗な『金の星』に、わすれたお歌でも思ひ出す樣な氣がしました。(札幌　相川正義)

▼私は『金の星』第二號からの愛讀者ですが、お便り申し上げるのは今始めてです。けれどもこの間童謡を投書しましたが沒書でしたので今からは、ドン〳〵投書するつもりです。以前にも投書しようと思つてゐましたが入學試驗といふ心配ものがありましたから、できませんでした。けれども、もう安心して下さい、首尾よく合格しました。私は兄さんから毎月『金の星』を送つていたゞいてゐますので、書棚は『金の星』でいつぱいになつてゐます。末筆ながら諸先生の御健康をお祈り致します。(宮崎縣　井上節子)

▼暖い春が來ました。皆さんお變りも御座いませんか。グリム號から五月號の岡本先生及び水島先生の挿畫のヨイのに驚ろきました。それから僕に三ツの願ひがあるのですが、聞いてくれますか。一、アンダーセン號、グリム號を作つたのに童謡號がまだ一つも出てゐません。童謡雲の者は甚だ不平です。どうか童謡號を出して下さい。二、童謡投書欄をもつと大きく設けて下さい。三、綴方その他のものにも批評が出てゐるのに童謡だけ出てゐません。ほめられゝばうれしいと思ひ、叱かられゝば嬉しい所に氣をつけて行こうとおもひます。(東京　山下愛子)

▼私は去年の一月に、兄樣から『金の星』をもらひました。其時兄樣は「一日一話づつていれいに見よ」と申しました。なぜつて僕は一つづつ、可愛に思ましたの。その時外のさつしたいと思つてゐます。どうか野口先生に批評をおたのみ申します。(淺草　松井純)

▼この度は未熟なる僕の作品(留置場の一夜)を佳作にして下さつて誠に有難う御座います。あれは僕が第一回目の作品ですから、下手な所だらけであるにもかゝはらず、佳作の部に入れて下さつた事は厚く御禮申し上げます。(東京　八ツ代春村)

▼先生、私は、先生が「星の御殿」と「夢の御殿」へ天使を向けてお祈り下さつたので、御蔭樣で、無事に「豫備科」にスーツと入つてしまひました。入學式は來月の七日ですから、其間、大いに投書する心算です。どうかよろしく。豫備科へ入つても、尚ほ一層『金の星』を愛讀します。師範を卒業しても、お婆さんになつても死ぬまで……五十年後の『金の星』！まあ、どんなに發展してゐるでせう！　でも其の時分は記者先生が……ヨボ〳〵〳〵〳〵、あらつい……御免下さいね、さようなら。(東京　山下愛子)

▼私は去年の一月に、兄樣から『金の星』をもらひました。其時兄樣は「一日一話づつていれいに見よ」と申しました。なぜつて僕は一つづつ、可愛に思ましたの。その時外のさつし

よりはるかに、よいといふことを知りました。記者樣私を一愛讀者にして下さい。(秋田　谷口三郎)

▼私達がまつてゐました春が參りましたれ。記者先生及讀者諸君の御健康を祈ります。愛讀者が月々にふえゝ行く事は、どれほど嬉しい事でせう。お健闘を祈ります。(兵庫縣　木舟廣次)

▼金の星社の人々へ……兄さんはいつも、僕の買つてくる『金の星』を見てうれしがる。これは童話、童謡、繪等の王樣だ、第一ほかの社では、こんな作者はあつめられまい。」とおつしやる。——○「おゝい、そこへ行くのは縣ちやんでないか」僕「さうだよ」○「あのね君の手に持つてゐるのはなーに……大へんきれいだね」僕「うん……これか……これは『金の星』さ」○「さう、どれ見せて……やアー！ア、おもしろいな……この表紙が第一氣に入つた。ほう口繪も……いくら三十五錢だらう」僕「イヤ三十錢さ」○「うそ……三十五錢以上だ……紙もいゝもの……」うちを見て○「あゝ……ほんと……安いな！……どこに賣つてゐる……近江屋あの大學通りの……よし今日買つてこう」と僕とわかれた。——僕と兄さんと母さんと妹のさよ江と四人でいつも「やアーおれに見せて……やアおもしろい〳〵〳〵」と四人がうばふ樣に見る。一冊の本でこんなに見られるのだから皆ながら『金の星〳〵』と云ふのはもつともと感じました。(東京　矢名)

▼岡本先生の繪を誰かがほめると、自分の繪をほめられた樣にうれしくて(先生は本當にお上手でせう)と云ひます。(郡保布先生のお繪も大好きで御座います。どうぞ、いゝ繪を澤山お書きになつて、私達をよろこばして下さいませ。(京都　蝶子)

▼小宮時子の綴方に對し賞品御送り下されまことにありがたうぞんじます。よろこんでわざ〳〵私に見せてくれました。御禮申上げます。(山梨　加藤幹雄)

▼私は『金の星』の方々には初見えの新參者で御座います。けれど『金の星』は一昨年から毎月々々愛讀して、その佳境に入つて行くのを喜んでゐる次第で御座います。ついて何此の度御誌の讀者の末席につらなり度いと思つて居りますので、御手數で御座いませうけれど「誌友規則」を表記の所へお送り下さいまし。岡本先生の表紙畫は私の大好なものの一ツです。終りに西條先生のお住居はどこで御座いませうか、誌上でお答へ下さいませ。(京都　星野三雄)

▽西條先生の御住所は東京市外淀橋町柏木四三三です。

▼拜復本日は美しい可愛いゝ『金の星』エハガキを澤山御送り下さいまして眞に何とも御禮の申上げやうもございません。此上ともお見捨てなく御指導下さらんことを切望いたします。私はあくまで御誌の向上をお祈りいたす者でございます。(横濱　平井淳雄)

▼金の星諸先生は御健で日々『金の星』のためにおはたらきの事と存じます。私は以前からの誌友でございます。けれども、一度も投稿いたしました事はありません。今綴方を投稿いたしました。お笑ひ下さいませ。(山形縣　船山よし)

▼記者先生、私も『金の星』誌友の一人となることの出來たことを大變うれしく思ひます。昨日、岡本先生のキレイな繪葉書をいたゞきましたことを重ねて厚く御禮申し上げます。(横濱　岩下五郎)

▼なつかしき記者先生へ樂しい樂しい春がまゐりましたれ。先生にはおかはりはございませんか。私は無事で居ります。『金の星』は次第々々と美しくなりましたれ。それに表紙畫はすてきれ。私は、氣に入つてしまつたの。岡本先生は又此度の『金の星』に可愛いゝお繪をお書きになるでせう、まつて居ります。(群馬縣　田口ふみ子)

▼諸先生樣にはお變りもございませんか。惡い風がはやるやうですから、御身を御大事にいたしなさい。さて『金の星』が朝日の如く發展しつゝあるのを心からうれしくおもひます。私は毎日『金の星』を樂しみとしてまつて居ります。(茨城縣　富永豐三郎)

▼拜啓。先日は沖野岩三郎先生の童話面白く聞きました。歸りには美しき繪ハガキまでいたゞいて、ほんとに御禮申上げます。(宮城縣　千葉次男)

▼先生。私は二月號からの愛讀者ですが來だ一ペンだつて投書も通信もしなかつたのですが今度から此の大きな赤ちやんにも色々御指導下さい。どん〳〵、投書しますから。だから大急ぎで愛讀者名簿におのせ下さい。(牛込　窓竹進)

▼岡本雨情、野口雨情兩先生に御願ひ致します。御無理なる御願ひですが、出來得るなら雜誌に兩先生の御寫眞をのせて載く樣吳々御願ひ致します。(福島縣　石田長治)

▼チリン〳〵もし〳〵……記者樣一生けんめい金の星のためにおつくし下すつてありがたうございます。皆樣私たちもまけないやうにしませう。御身大切にさようならチリン〳〵……(東京　城神安子)

懸賞創作募集

◆少年少女の創作◆

自由畫……山本鼎先生選
幼年詩……若山牧水先生選
綴方……編輯部選

〔注意〕課題は何でもかまひません。諸君の日々見たり、感じたりしたことや諸君のすきなもの、諸君のすきなやうに畫なり、詩なり、文なりにしてかいてください。一人で何題出してもかまひませんが、姓名は、學校や學年（または住所と年齢）とともにおとさないやうにして下さい。用紙は自由畫はなるたけ畫用紙に、幼年詩や綴方はなるたけ原稿用紙（または半紙）に書いてください。よく出來た方には『金の星』特製の賞品を差上げます。次號締切は五月廿八日（その以後は次號へ廻る）發表は八月號、宛名は東京市外田端三百五十一番地金の星社。

◆一般讀者の創作◆

童謠……野口雨情先生選
童話……齋藤佐次郎先生選

〔注意〕童謠は十五行以内、童話は二十字詰二百行以内、優秀な作品は「推薦」または「特選」として發表いたします。推薦の場合は童話には五圓、童謠には二圓づつ、特選の場合は童話には拾圓、童謠には五圓づつ賞金として呈します。但し少年少女の創作童話にして「入選」の場合は「金の星」賞を呈します。締切、發表、宛名は少年少女の創作と同じです。原稿はお返しいたしません。

定價壹冊參拾錢（送料壹錢）
三ケ月分三冊（送料共）九拾錢
半年分六冊（送料共）壹圓八拾錢
壹ケ年分十二冊（送料共）參圓六十錢
但し四月號九月號は特別號で冊五錢新年號は四十錢ですから、御註文の節はこの分だけ必ず加へてお拂込み下さい
振替口座東京五九五九六番

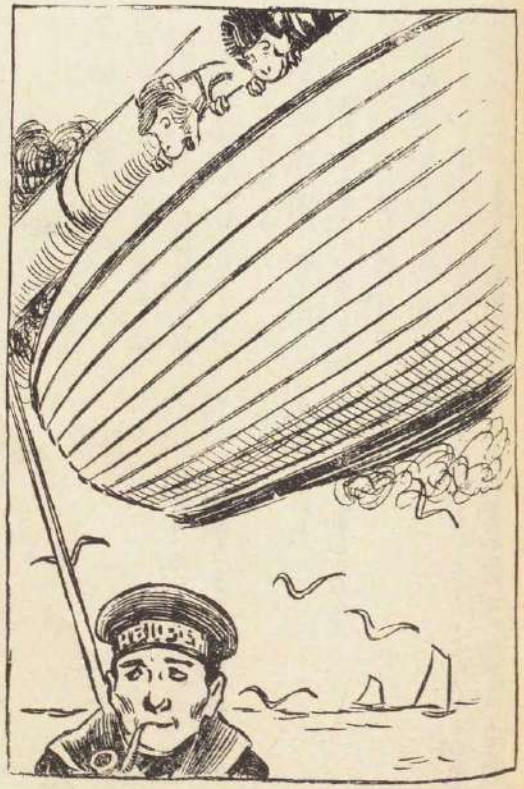
〔送金〕▽御註文は必ず前金で御拂込み下さい
▽送金は振替が一番便利で御座います
〔注意〕▽切手代用は（壹錢切手）一割増しです
▽郵便番號何號よりと書いてください
▽住所姓名はハッキリ書いてください

廣告料は御照會次第お答へ致します

大正十二年五月六日印刷納本（毎月一回）
大正十二年六月一日發行
編輯兼發行人　齋藤佐次郎　東京市外田端三百五十一番地
印刷人　大橋光吉　東京市小石川久堅町百八番地
印刷所　株式會社博文館印刷所　東京市小石川久堅町百八番地
發行所　金の星社　東京市外田端三百五十一番地
振替口座東京五九五九六番　電話小石川五三八七番

沖野岩三郎先生著
長篇物語
父戀し
定價金壹圓
四六判箱入美本
送料十二錢
岡本歸一先生裝幀及挿畫
大好評四版發賣
沖野岩三郎先生著　童話讀本
赤い猫
三五判美本
定價八十五錢
送料十二錢
本居長世先生作曲
野口雨情先生作謠
一人一つお星さん
買船
菊判木版刷美本
各冊金六十錢
送料金四錢
少年少女名作物語の第一篇『父戀し』は驚くべき大歡迎を受けて、遂に第四版を發行いたしました。此の版からは岡本先生が裝幀に一層新工夫をこらされたのでいよ〳〵美くなりました。或學校では『父戀し』を最も理想的な課外讀物として指定したさうです。これを見ても此の本がどんなに面白い、爲めになる本であるか、知れます。父を尋ね歩くあはれな姉と弟に流す涙は必ず皆さんの魂を清めるでせう。
東京上野公園下　金の星出版部　振替東京一六六八七〇番　電話下谷三二一三番

ほるぷ出版複刻版'83



童謠十講

野口雨情先生新著（四版）◇定價壹圓八拾錢□四六判箱入美本□送料十四錢

第一講　現代の童謠論
第二講　童謠の發達と變遷
第三講　童謠普及の經路
第四講　正風童謠論
第五講　鄕土童謠論
第六講　童謠教育論
第七講　童謠の指導法
第八講　童謠と童話の違ひ
第九講　童謠創作の心得
第十講　結論
補遺　童謠界の現在
附錄　雨情童謠作風集

◆野口雨情先生が童謠に就ての多年の研究を發表したものだけに、現代に於てこれ程權威ある童謠の研究書はない。

◆童謠に關する事なら此の書一卷によりて凡てに精通することが出來るから、眞に「童謠の寶典」と稱すべきものである。

◆附錄の「野口雨情作風集」は傑作集ともいふべきものであつて、同先生の主なる作は凡て此の中に集められてゐる。

東京上野公園下谷前　金の星出版部　振替電話東京六一六六　谷下七〇八二　一〇三番

赤頭巾

『木の實は上出來ですネ。』

『地面が見えない程落ちてゐますネ。』

法性院とチョンとの挨拶が終ると直ぐ、チョンは猿共を一列に並ばせました。もう整列も番號の呼び方も旨く行きますので、チョンは大層喜んでさつそく定九郎先生の話のつゞきを語り始めました。

チョンは松の樹の伐株に腰を掛けて一同を見渡しながら、

『さア、此間の定九郎先生の續きをお話し致します。』と申しました。

『あの定九はそれから何所へ行きましたのですか。』

法性院は木の實をかぢりながら申しました。

『それから定九郎先生は、山の中へ逃げ込みました。そしてどん〳〵どん〳〵と山を向ふへ向ふへ歩いてゐると、峠の方から、(おうーい、定九郎ぢや無いか。)と呼ぶもの

がありました。

『それは人間でしたか。』と、法性院は心配らしく問ひました。

『いゝえ、猿でした。定九郎先生は吃驚して峠の方を見ると、一疋の猿が、ねんねこを着て、赤い頭巾を被つて木の枝に坐つてゐました。で、定九郎先生は不思議に思ひながら、(君は何所から來たんだい？)と訊くと、赤頭巾の猿は、(僕は猿廻しに伴れられて此所まで來たんだが、今、猿廻しの爺さんが其所へ寢てゐるので、此所で遊んでゐるんだよ。)と答へました。そこで定九郎先生も安心して赤頭巾の所へ近寄つてみますと、猿廻しの爺さんは仰向になつて道の傍へ寢轉んでゐました。で、定九郎先生は其の爺さんの傍へ行つて、ぢッと顏を覗いてみますと、爺さんの顏は眞蒼くなつてゐます。(君、此の爺さんは死んでゐるんぢやァ無いか。)と定九郎先生は申しました。(さア？)と言ひながら、赤頭巾はそッと右の掌を爺さんの頬ッぺたへ當てゝみますと、もう氷のやうに冷たくなつてゐました。すると赤頭巾は聲をあげて泣きました。爺さん……爺さん……も一度生きて下さい。爺さんどうぞ、も一度生きて下さい……と言つ

て泣きましたが、爺さんは何の返事も致しませんでした。《君、爺さんはもう死んでしまつたんだよ。》と定九郎先生は申しました。赤頭巾は、いよ〳〵爺さんが死んでしまつたのかと思ふと、悲しくて悲しくて堪らないので、定九郎先生に手傳つて貰つて、爺さんを草の上に寢かして木の枝を折つて其上に載せて、お葬式をしました。それから爺さんの背負ッてゐた小い荷物を二つに分けて、二つの風呂敷に包んで、それを二疋で一つづつ背負つて山を降りました。山の麓へ行つた時、定九郎先生は、赤頭巾に對つて《君、これから何所へ行きますか。》と尋ねました。《僕これから四國へ歸るつもりだ。》と赤頭巾は申しました。すると定九郎先生も吃驚して、《さうですか、僕も四國へ歸るんだが、四國へ行くには海を渡らねばならないネ。》と言ひました。それを聞いた赤頭巾は、《それは何でも無いよ。此の山を向ふへ越えれば、其所に廣い廣い海がある。其の海には十も二十も船が浮んでゐるから、それへ乘ればいゝんだ。》と申しました。そこで二疋は大急ぎで山を越えますと、赤頭巾の言つた通り廣い〳〵海が見えました。

「さうか、それは善かつたネ。それから二疋はどうしました？」

法性院は少しく膝を乘り出して尋ねました。

「二疋は犬や人間に見付けられないやうに、荷物を背負つたまゝテク〳〵と歩いて海岸まで行つて、一番大きな船へ乘つたのです。所が恰度其時船の上には誰も人間が居なかつたので、二疋はずん〳〵と上の方へ上の方へ登つて行くと、其所には小いボートといふ舟が吊してありました。で、早速其の中へ入つて顔だけ舟の縁の所へ出して見てゐますと、やがて人間が五人も十人も出て來ました。そしてワケの解らぬ事を

何とか、かとか言つてゐましたが、暫くすると、船の眞中にある高い〳〵柱が、ウーウ、ボーオ、ブーウ……と泣き出したさうです。」

『柱が泣いた？　それはどういふワケだい？』

法性院は不思議さうに頭を傾けました。

『どうも其のワケは今に解らないんです。兎に角大きな丸い柱が途法もない大きな聲で泣いたさうです。すると船は岸を離れて海の眞中の方へ泛んで行つたのです。さァかうなると定九郎先生も赤頭巾も、うれしくて〳〵堪らないもんだから、《おい、いつ四國へ着くだらう。》《さァ明日の朝かも知れないよ。》《家へ歸つたら此の荷物をお土產に、お父樣やお母ァ樣にあげませう。》などと話してゐると、急にボートの下の方が騷がしくなつたので、二疋は何考へなしに下を覗いてみますと、同じ着物を着た人間が百人も二百人も出て來てゐるぢやありませんか。《何でせう？》と赤頭巾は囁きました。《ねェ、何でせう？》と定九郎先生も首を傾けました。

『それは一體何といふ船でしたか。』と青蓮院は尋ねました。

『それは軍艦といふ船で、それに乘つてゐたのは人を殺す軍人さんといふ人間でした。所が其日は恰度何かのお祝ひ日で、軍人さんは皆な船の上に出て來て、面白い事をして遊び初めたのです。歌を歌つたり踊つたり、それは〳〵大騷ぎでした。赤頭巾と定九郎先生は、ボートの中から一生懸命に見て居りますと、不意に二疋のゐる所へ黑い物が飛込んで來ましたので、二疋は一度にキャッ？　と言つて首を竦めました。そして氣づいて見ますと、其所には軍人さんの被る頭巾が落ちてゐました。それを見た定九郎先生は、にこ〳〵笑ひながら、《君、これはあの軍人さん達が、僕に呉れたんだよ。》と言つてそれを被つてみましたが、すッぽり頭が其の頭巾の中へ入つてしまひますので、《これは大き過ぎる！》と言つてゐる所へ、軍人さんは、そんな事とは夢にも知りませんから、柱を攀ぢてボートの所へ來てみますと、これはまァ何といふ事でせう。其所には、赤い頭巾を被つた猿と、羽二重の紋付を着て腰に刀をさした猿とが、小さい風呂敷を背負つてちよこなんと立つてゐるではありませんか。』

『面白い面白い、それからどうしました？』

法性院は手を拍きながら問ひました。

『所が不思議にも其所へ上つて來た軍人さんは其の赤頭巾を伴れてゐた猿廻しの息子さんでした。』

『先ア、不思議な事があつたものだネ。』と青蓮院は申しました。

『赤頭巾は其の軍人さんの顏を見覺えてゐたのでした。軍人さんも赤頭巾を見覺えてゐて、《おい、お前はどうしてこんな所へ來た？　その荷物は僕のお父樣の荷物ではないか、お父樣はどうしたんだ？》と言つて泣きました。そこで赤頭巾と定九郎先生は猿廻しの爺さんが死んだ事を軍人さんに話しましたが、軍人さんは猿の言葉が解りませんでしたから、《僕のお父樣は死んだのではないか知ら？》と云つて又た泣きました。下で遊んで居た多勢の軍人さん達は、《おうーい、大山君、どうしたんだい？　帽子は確かに其のボートの中へ落ちたよ。》と言ひましたが、大山が何の返事もしないので、他の軍人さんが、ボートの所へ昇つて來ましたが、ひよいとボートの中を見ますと、きやーッ！　と云つて下へおツこちました。《どうしたんだい？》と云つて他の軍人さ

んが昇つて來てボートの中を覗きましたが、これも、きやーッ！　と叫んで仰向けに下へ落つこちました。《大山兵曹が切腹でもしたのらしい！》と云つて軍人さんの中の一番偉い大將が、一人の家來を伴れて昇つて來ました。《おい、大山兵曹どうしたんだい？》と言ひながら大將はボートの中を覗きますと、其所には二疋の猿がゐたので大將は吃驚しましたが、さすがに大將だけあつて、下へは落つこちませんでした。

『それから大將と定九郎先生との戰爭がありましたか。』と法性院は訊きました。

『大將は大山兵曹から詳しい話を聽いて、ホロ〳〵涙を流しました。そして《大山、其の二疋の猿を大事に養つてやれ！》と申しました。さアそれから赤頭巾と定九郎先生とは、多勢の軍人さん達からお菓子だとか、南京豆だとか、旨しいものを澤山々々貰つて腹一杯それを食べたさうです。』

『それはよかつた。それから二疋は四國へ歸りましたか。』

『否え、直ぐには歸りませんでした。その時大將は、《大山兵曹、今日の餘興に、其の二疋の猿を使つて、猿芝居をして見ろ。》と言ひました。大山兵曹は二疋の背負つてゐた風呂敷包みを開けて見ますと、其中には安珍清姫のお芝居の衣裳がすつかり揃つてゐましたので、定九郎先生が船頭になつて、赤頭巾が清姫になつて、面白いお芝居をしたのです。それからといふものは、二疋の猿は軍艦の中で、多勢の軍人さんから大變大變可愛がられました。二日三日四日五日と船は廣い〳〵海の中を渡つて、暑い暑い所へ行きました。其所は南洋といふ所で、大山兵曹とそのお友達は軍艦から陸へ上る時、赤頭巾と定九郎先生とを肩に乘せて行きました。其國には赤い〳〵花が美しく咲いてゐました。大きな木の實が澤山實つてゐました。定九郎先生と赤頭巾とは動物園へ伴れて行つて貰ひました。動物園の金網の中には南洋產れの猿が多勢居ましたが、それは皆な尾の長い猿で赤頭巾が《おい君！》と言つても、定九郎先生が、《木の實は上出來ですネ。》と言ひましても知らぬ顏でゐました。南洋の猿は物を言はないのかと思つて見てゐますと、一疋の大きな猿が金網の上の方から降りて來て、《おい〳〵皆さん、あの氣の毒な猿を見なさい、あんなに尻尾が短いぢやないか。あれは吾々猿族が退化して、段々人間に近くなつたのだ。猿の仲間で惡い事をした者は死んで產れ

變つた時、あんな尾の短い猿に產れる。それから又た惡い事をすると、今度は人間に產れて毛がちッとも生えないで寒い目に會ふんだ。あの人間が惡い事をしたなら、今度は蛙に產れて水の中で暮すやうになるんだ。其の證據に人間の言葉と蛙の言葉とはよく似てゐるぢやないか。》と言ひました。赤頭巾も定九郎先生も默つて聞いてゐましたが、成程さうだらうと感心しました。それから二三日後でした。赤頭巾は大きな聲で、《定九郎先生、定九郎先生、軍人さんが皆な蛙になつた！》と叫びましたので、定九郎先生吃驚して帆檣の上に登つてみますと、さア大變です。今まで軍人さんであつた人間は、皆な蛙になつて水の中で足を縮めたり手を伸したりして泳いでゐるぢやありませんか。《あ、大山兵曹も蛙になつたぞ！》と赤頭巾は叫んで、ほろ〳〵涙を流して泣きました。すると定九郎先生も心配し始めたと見え、《吾々もやがてあの人間になつて、それから蛙になるのではなからうか。》と云つて泣きました。

「では、たうとう其の兵隊さんは蛙になつてしまひましたか。」と青蓮院も心配さうに尋ねました。

『所が、軍人さんは又た元の人間になつて、毎日船の上で調練といふ面白い事をして、赤頭巾と定九郎先生とに見せて呉れました。それから十日廿日と海の上を渡つてゐるうちに、今度は美しい〳〵町へ着きました。其所には珍らしいものが澤山あつて、とても一々覺えきれなかつたさうです。所が其所でも大山兵曹等は、二疋をつれて動物園へ行きました。其所の動物園には大きな〳〵猿がゐました。それは狒々といふので、吾々の五倍もある大きな猿でした。』

『うん、狒々といふ猿があるさうだ。それが何とか言つたかい？』

法性院は優しく尋ねました。

『狒々は定九郎先生を見て、《お前は日本の猿か。》と尋ねましたので、《はい、左樣でございます。》と答へると、狒々はにた〳〵笑ひながら、《日本といふ國は世界で一番小い國だ。人間の身體も小い、猿まで小いなァ、定めし膽玉も小いだらう？》と言ひました。それを聞いた定九郎先生大變腹を立て、《失禮な事を言ふな、僕は身體は小くとも心は大膽だぞ！》と言ひ返しました。狒々は驚いて、《ではどんなに偉いか言つて御覽

？》と言ひました。そこで定九郎先生は、淺草の花屋敷を飛出した事から、早野勘平といふ巡査と戰爭した事やら、進化論の話をしてゐる先生を驚かした事やら、蠟の紐を渡つて、軍艦へ乘つた事などを詳しく話しました。それを聞いて狒々は全く感心してしまつたと見え、《どうぞ日本へ歸つたなら、皆さんに宜しく。》と言つたさうです。』

『それから二疋は日本へ歸りましたか。』

と、法性院は尋ねました。

『いゝえ、まだ〳〵なか〳〵歸りません。』とチョンは小い欠伸を一つしました。聞いてゐた多勢の猿も皆な欠伸をしました。

『今日はこれだけにして、又た次の日に此の續きを伺ひませう。』と青蓮院が申しましたので、法性院もそれに贊成しました。

其時、山の下から與兵衛爺さんがのそり〳〵上つて來ましたので、法性院は、

『皆さん、チョンさん所のお爺さんが來ました。今日は一つお爺さんにお禮をしようぢやありませんか。』と言ひました。すると皆なは大贊成で、何をしようかと相談し始め

ました。

與兵衛爺さんは腰に大きな籠を下げてゐました。それは此の鈍栗山の眞中に大きな栗の木があるので、其の實を拾ひに來たのでした。

「さうだ〳〵、お爺さんは栗の實を拾ひに來たのだ。さア手傳つてあげて下さい。」と、チョンが言ひますと、皆な大喜びで、栗の木に攀ぢ上つて、力の限り枝を搖ぶりました。四十疋餘りの猿が一度に栗の枝を搖ぶりましたので、緒く熟れた栗の實はバラバラボロ〳〵と地の上に落ちました。それを見た與兵衛爺さんは、

『有難う、有難う。』

と言ひながら、栗の實を籠に一杯入れましたが、まだ澤山落ちてゐるので上衣を脱いでそれに包んだが、まだ餘りました。

『猿さん、これをあなた方に差上げます。皆なもつてお歸りなさい。』と云つて與兵衛爺さんは栗の實を一升ばかり枯草の上に置いて、チョンと二人で家の方へ歸つて行きました。

三宅安子女史、三宅艶子孃共著

母子童話集

（廣川松五郎畫伯裝幀）

定價一圓 郵稅八錢 四六判 函入美本

お母さんの安子女史とお子さんの艶子孃とがお作りになつた童話を一冊の本にまとめたのが本書であります。お母さんの童話のおもしろいことは言ふまでもありませんが、艶子さんのもなかなかおもしろい。艶子さんは器用ですから、口繪や挿繪も自分で描かれました。須藤しげる畫伯の挿畫も入つてゐます。

最新刊

「小學男生」主筆 澁澤青花先生著

對話と歌劇集

森の月

最新刊

定價一圓五十錢 郵稅八錢 四六判 函入美本

岡本歸一畫伯裝幀 草川信氏作曲

――「青花先生の言葉」――

ながい間、對話や歌劇に筆を執つて來た私は、この頃家庭や學校に於ける對話、歌劇のます〳〵盛んになつて來たことを、何よりも喜ばしくおもつてゐます、然しその臺本としての單行本はまだ〳〵至つて少いやうです、この吉もその不足を補ふ幾分かの足しとでもなれば、私としては非常に滿足であります。

＊　＊　＊　＊

大略目次

（對話）森の月、サンタクロース、お土產、俄か雨、名婦合せ、雷の子、合宿、峠茶屋の一日、七人の少年其他

（歌劇）影法師、兎の耳、自慢の王樣、俄か分限者、居眠り佐市、醫同志、聾者と盲人、雪の降る夜其他

東京市京橋區南鍋町 實業之日本社 振替東京三二六番

姉と弟

姉「芳雄さん、歯が痛いの？」
弟「歯なんか痛かないや。」
姉「ぢやどうしたの。」
弟「お菓子が食べたいんだあ。」
姉「おやさう！ぢや、これからお母さんからいただきませうね。」
弟「ぼくは、チョコレートがいいや。」
姉「ぢや、チョコレートをいただいてあげますから、あとで、わずれずにライオン水歯磨でうがひしませうね。